
異形の魂を宿す者

畏無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異形の魂を宿す者

【Nコード】

N3851V

【作者名】

畏無

【あらすじ】

〈人格〉の名を持つ異形……その魂を宿したいた青年が転生者（仮）として色々頑張る物語

※現在第2の世界で活躍中

プロローグ（前書き）

始めちゃいました…

よろしくお願いします

では、本編をどうぞ

プロローグ

俺の名前は遠坂霧夜^{とおさかきりや}。んで、年齢は16だ

そして俺は……ついさっき事故で死んだ

事故の原因は居眠り運転していたらしい相手の自動車が、歩道を歩いていた俺にぶつかったから

このまま天国か……なんて考えながら気を失ってた筈なんだが……目を覚ました俺が居たのは真っ白な空間
この空間には俺と……何故か少女が居た

「少女じゃありません！」

いや、見た目からして少女しかないだろ
他になにがあんだよ……？

「私は貴方達で言う天使なんですよ！？」

天使（自称）と目の前の少女は俺に名乗った

「一体なんですか、自称って！ 私は本当に天使なんですからね！
！」

「黙れ少女」

「だから私は少女じゃありません！！」

おふざけはとりあえず置いといて、俺は天使（少女）に訊いてみた

「だから私は少女じゃなんかありませんって！！」

「なんでもいいが、なんか俺に用なのか？ 本当に天使ならさっさと天国にでも俺を送れよ。どうせ俺は死んでるんだからよ」

「そうしたいのは山々ですが……貴方の魂が何故か天国にも地獄にも連れて逝けないから、私も困ってるんですよ！！」

天使（幼女）、多分字が違うぞ？

……いや、合ってるのか？

というか、今天使（幼女）はなんと言った？

俺の聞き違いでなければ、『天国にも地獄にも連れて逝けない』って言わなかったか？

聞き違いだと信じたかった俺は天使（幼女）に訊いた

「おい幼女、今なんて言った？」

「だから私は幼女じゃないも「さっさと答えろよ」分かりましたよ……だから、貴方の魂が天国にも地獄にも連れて逝けないから私も困ってるって言ったんですよ……」

……よし、この天使（幼女）絞めてやろうか

なんで俺は天国だけじゃなくて、地獄にも逝けないんだよ！？俺生きてる間になんか悪いことしたか！？

……結構したかも

一歩間違えるとヤバイ事になってたしな……まあ、生きていく為には仕方なかったことなんだが……：そーいや、あいつら2人元気にしてっかな？

けど、あいつらは俺と違って何もしてない筈だしな

「あの一説明してもいいですか？」

「ああ、すまん。頼んだ」

「分かりました。えっと……どうやら、貴方の魂になにかあるみたいなのですよね」

マジか！？

…だが、色んな意味で天使も堕ちたものだな

「それ、ちよつと酷くないですか!？」

「全く酷くない」

「明らかに酷過ぎですよ!!」
（涙目）

この程度で泣くとは……流石幼女だな

「よう……じょじゃ、グスな……いもん……うえええええええええええええええん！
」

ああ、遂に泣き出しちったよ……
さて、どうすっかな～

〈少々お待ち下さい　by霧夜〉

かなり時間が経ったが、とりあえず天使（幼女）が落ち着いたみたいな感じだから、俺は訊いてみた

「私幼女じゃないです…」

「別になんでもいいが、俺はなんで逝けないんだ？」

「えっとですね…多分、コレのせいですね」

と天使（幼女）がパネルを出して見せてきた

…なんでパネルなんだ？

とりあえず…

「なんで俺の心臓の形がハート形なんだよ!？」

「とりあえず、心臓にある丸くて赤い石が原因の様ですね」

天使（幼女）め、無視しやがった……けど確かに、天使（幼女）が

出したパネルには、俺の心臓と思われる映像になにやら丸くて赤い石があった

だが俺は敢えて言おう…

「嘘だ!!」

「本気で思ってます?」

「全く思っていない」

嘘だとは全く思ってる訳ではないが、これは流石に驚いたな……まさか、心臓にこんな石があったなんて……というか、それが原因で天国や地獄に逝けないみたいなんだよな? この石って……どんだけ凄いんだよ!?

「とりあえず、この石に触れて干渉してみますね?」

天使（幼女）はそう言うと、自身の腕を俺の左胸にノーアクション&スツと入れてきた
…痛みが無いのもあるが、躊躇無く腕を入れてきた天使（幼女）のノーアクションな行動にはかなり真面目に驚いた…

「つて無茶苦茶痛えよ!なんか絶対心臓だけを握ってるよな!?!
更に、石以外の心臓の部位だけを器用に触ってるよな!?!」

「…私、幼女じゃないもん（ボソツ）」

まだ恨んでたのかよ!!
分かりました!分かりましたよ!貴方は幼女じゃありません!!ただ身長の小さい女性なだけ…

へ大変申し訳ありませんが、少々……いえ、暫くお待ち下さい
Y天使

いかん、スゲェ気持ち悪い……真剣^{マジ}で死ぬかと思った

「霧夜さんは既に死んでますけどね？（クスクス）」

この天使（幼女）め、クスクスと笑いながら俺の揚げ足取るな。ちよっと背筋に寒気を感じたじゃねえか……というか、何故俺の名前を知ってるんだ？

「私、天使ですから♪」

そういや、さつきから色々連続でツツコミやってたな……流石は天使（幼女）だn……はい、すみませんでしただから、俺の心臓をノーアクションでグツと掴まないで下さい掴まれると、真面目に痛いんだぞ!?

「全く……私は貴方という存在が完全に理解出来ません……というか、あまり理解したくありません」

天使め、はっきりと言ってくれるじゃねえか……さてっと、干渉とやらをさっさとしてもらえませんかね？

「分かりました♪ では、干渉開s……」

天使の声を聞きながら、俺の意識は沈んでいった……

プロローグ（後書き）

畏無「遂に始めてしまった…どうも、畏無です」

???「おい、さっさと俺のこと紹介とかしろよ」

畏無「面倒な…本作品の主人公、霧夜君です」

霧夜「よろしく」

畏無「さて、本日は時差別でもう一度投稿する予定なので、また会いましょう」

霧夜「短いな……んじゃ、失礼します」

プロローグ2 (前書き)

プロローグが前回で終わったと思った方、残念！

霧夜「畏無はバカだから気にするな」

酷くない？

霧夜「酷くない」

(´；ω；、)

霧夜「んじゃ、本編どうぞ」

プロローグ 2

天使（幼女） S I D E

私、幼女じゃないもん！
名前の表示直してよ！！

へ申し訳ありませんが、少々お待ち下さい・・・＜

天使 S I D E

ふう、やっと直りました
さてっと、私は亡くなった方の魂を回収して天国か地獄に運ぶ役割

をしている天使で、ゼウス様達には『天ちゃん』と呼ばれているのですが……なんで他の天使達は天使と呼ばれてるのに私だけ『天ちゃん』なんでしょうかね？

……とりあえず私の呼び名等は置いて……本日私が回収した魂……遠坂霧夜さんの魂を天国へ送るのが今日の私の仕事なんですが、何故か霧夜さんの魂が全く天国に逝ってくれないんですよね

(……もしかして、地獄逝きなのかな?)

そう思った私は霧夜さんの魂を次に地獄へと送ろうとしたのですが、地獄にすら全く逝ってはくれませんでした

「なんで天国だけじゃなくて、地獄にも逝かないの!？」

原因を探る為に、私は霧夜さんの魂と対話をしたのですが……霧夜さんはなんで私のことを何度も何度も幼女って言うんですか!？

皆さん、霧夜さんって酷いと思いますよね!？

とりあえず霧夜さんを調べたら心臓に赤い石があったので、恐らくこれが原因と思った私は干渉しようと触れたのですが……

「……これは全くもって予想外過ぎなのですよ」

私の目の前に居た筈の霧夜さんは居なくなっていて、変わりに居たのは《スパロボ》というアニメやゲームに出てくる地球をルーツとする生命を監視するために生み出された人造生命体……アインストそのアインストの頭と言える存在である《ノイ・レジセイア》が作り出された擬人型アインスト……アルフィミィが搭乗していた機体《ペルゼイン・リヒカイト》そのものだったのですから……えっ?なんでこんなに詳しいのか?

知り合いの神様がハマってるゲームで、何故か教えてくれました♪

SIDE OUT

???
SIDE

「誰じゃ！許可無しで天界の近くにペルゼインを召喚したのは！！」

さっきからゼウス爺様が怒鳴るから、頭が痛い

ただでさえ眠いのには……

全く、突然こんな夜中に収集が掛かったから何事かと思った……
実は私、自分の名前とは逆に夜にはめっぽう弱いよね……

けど、天界の近くでペルゼインを召喚するなんて……召喚した神か
天使は勇気あるわね

誰かは知らないけど、誰が召喚したのかちょっと覗きに行こうかし
ら？

とりあえず、全は急げね♪

「というわけだから……アポローン兄様、ゼウス爺様に説明とか色々よろしくお願いしますね♪」

「なっ！？待つんだ、アルテミス！！」

「アポローン兄様？ 私は待ちませんよ？」

私はアポローン兄様にそう言いながらゼウス爺様の執務室から出た
勿論目的地は……ペルセイアの召喚された場所ね♪

SIDE OUT

天使SIDE

さっきから私とペルゼイン（おそらく霧夜さん）は睨み合ったままの状況で、別に何も起きてないのは問題無いのですが…

（もしかして、霧夜さんの心臓にあったあの赤い石はペルゼインのコアだった…：ということなのでしょう？　もしそうなら、色々と神様方に報告しなければならんですが…：しかし、今この場を私が動いたらペルゼインがなにをしでかすか分からないわけですから…）

等と色々と頭の中で考えながら現状維持に努めているわけで…

『……………』

「……………」

それでも…………：やっぱり怖いものは怖いんですよ！？

なんで私がこんな目に遭わないといけないんですか！！　私はただ自分の仕事してただけなのに！！

『…奴ハ何処ニ行ツタ』

「ひゃい！？」

私の思考が処理しきれない時に突然喋ったペルゼインの言葉で、私はつい驚いてしまいました

：ですが私はこの時、ペルセインの言葉から1つの疑問を得ましたそれは：

（『奴は何処に行った』って、一体どういう…）

私を得た疑問を考えていると、何処から一本の矢が飛んできて、その矢はペルゼインの左胸に刺さりました
そしてペルゼインの左胸に刺さった矢が消え始めたのと同時にペルセインの姿が段々消えていき、最終的にペルセインの居た場所には霧夜さんがまるで眠っている様な雰囲気であって倒れていました
ところで、さっきの矢は：

「大丈夫だったかしら？天ちゃん」

私が後ろを振り向くと、弓を構えたアルテミス様が居ました

「あ、アルテミスさまあゝ（泣）」

私は泣きながらアルテミス様に抱きつくと、アルテミス様が「よしよし」と言いながら頭を撫でてくれました

「…けどまさか、天ちゃんがペルゼインを召喚するなんて思わなかったわ」

「…召喚？何の事ですか？」

「…一体どういうことかしら？」

私はアルテミス様に霧夜さんのことや心臓にあった石等を全て説明しました

「…なるほど、そういう事態だったの」

「そうなんですよ」
泣

アルテミス様は未だに私の頭を撫でながら倒れている霧夜さんを見ます

霧夜さんを見たアルテミス様の眼を、私は忘れません……その時のアルテミス様の眼は何か懐かしい物を見ている様だけど……どこか悲しそうな……そんな眼をしていました……

暫くし、アルテミス様は私の頭を撫でるのを止め、霧夜を見ながら頷きました

そして、**頷いた後**：

「…とりあえず、彼は私が引き取るから。悪いけど、ゼウス爺様とアポローン兄様よろしくね♪」

[illegible]

私が叫ぶ中 アルテミス様は私を手を振りながら楽しそうに去って
行きました……霧夜さんの首根っこを持って、更には霧夜さんの頭
を引き摺りながら……霧夜さん、御愁傷様です

SIDE OUT

霧夜SIDE

俺が再び目を覚ますと、何故か異様に頭が痛かった

「って、なんか俺引き摺られてないか!？」

「あっ、気がついたんだ」

俺が振り返ると、俺の首根っこを掴んだまま歩いている女性が居た
この女性、どこかで見たことあるような……ってか、その前に…

「だから痛いって!!」

「あら、そうだったわね」

女性は俺の首根っこを離れた後、一瞬で俺の前に移動してきた
って、速っ!？

「えっと、貴方は霧斗君……だっけ？」

「霧夜だ」

「そうそう、切矢君」

おかしいな、発音が一緒なのに字が違う気がするのは何故だ…

「あつ、私はアルテミス。とりあえず神様やってるけど、よろしくね♪」

「アルテミスって…」

神でアルテミスと言えば、ギリシア神話に登場する狩猟と純潔の女神で、後に月の女神となつたってアレのことだな

「へえ、貴方意外と詳しいのね？」

「まあな」

女性……アルテミスは俺を不思議そうに見た後、俺の左胸に手を置いてきた

「なっ！？一体なに？」 「本当にあるみたいね」 ……なにがだよ？」

「ん？ペルゼインのコアだけど？」

ペルゼインってなんだよ？

「…なんか、ペルゼインで色々自分が置かれている状況が分かってないみたいだから、教えてあげるわ」

「…よろしくお願いします」

へアルテミスが霧夜に説明中・・・

「…って感じよ。分かったかしら？」

分かったって言うより、まさかスパロボに出てくる敵のコアが俺の心臓にあった石だったのが一番の驚きだったんだがな…

「さっき貴方、そのペルゼインになってたのよ？」

「…マジで？」

「真^{マジ}剣よ」

アルテミスが腰に手を置きながら言ってきた（その時、目の前で何かが2つ程揺れた様に見えたのは全くもって気のせいだ…）

にしても、そこまで言うことなのか…？

ん？てことは、俺が天国や地獄に逝けない原因はそのコアというわけなのでは？

「そういうことね」

うわぁ……俺、オワタw

まさか、いつの間にか人というカテゴリーから外れてたとは…

「というわけだから……君はこれから私の玩具にしてあげるわ♪」

…はい？

今日の前の神様はなんと言った？

人を玩具にすると言わなかったか？

「アルテミスさんや……頭大丈夫k 「その頭、射たれない？」 変なこと言ってすみませんでした」

弓を構えるアルテミスさんに向けて俺はジャンピング土下座をするいや、一気に5本も矢を引っ張られたら流石に恐いって!？

そして、アルテミスさんは弓を下ろすと、何故か楽しそうに玩具発言について説明してくれた

「…要は、俺がアルテミスさんに転プレしてもらおうと」

「まあ、正確には貴方という魂や存在をペルゼインのコアと一緒に〈全て〉転生者という〈器〉に変換するって感じね」

まさか、二次創作でしか見たことない転プレを体験する事になるとは……ん？

転生者⇨玩具ってことは…

「他の転生者達も神様方の玩具ということか？」

もしそうなら、俺凄いい嫌な気分になるんだが：

「あまり知られてないけどね……あつ、けど幾つか例外が居るけどわね」

「例外？」

「神を敬わないで親しげに会話をする転生者、神を超えた転生者、神と同等になった転生者とか色々居るわね……そうそう、最近の質悪い転生者は神に見捨てられて行方不明になったり、神に敵対するのも居るわ」

：転生者って、凄いな

なにが凄いのかは上手く説明出来ないが……とにかく凄いな

「とりあえず、器に変換した後貴方には修行してもらおうから」

修行ねえ……って

「…はい？」

「だって、貴方を器に変換するだけなんだから、身体能力とかはへ一般人」と同等なのよ？……まあ、貴方はペルゼインに変化出来るわけだから、その時（ペルゼイン状態（またの名をアインスト化））の制御か……または自分の力として完全に制圧してもらわないと危ないから。…分かったわね？　ちなみに拒否権は無いから♪」

どうやら俺は（拒否権全く無しで）転生者になるみたいです…

プロローグ2（後書き）

霧夜「さて、とりあえずこれでプロローグは終わり……だよな？」

その通り

ついでにこいつを後書きに呼んでみた

天使「どうも、「少女」です…って、霧夜さん！声被せないで下さい！！！」

少女！少女！

天使「作者もですか…」

霧夜「頑張れ少女」

天使「だから、私は少女ではなく、天使です！！！」

霧夜「まあ、いっか」

そうだね（^・^）y~~~~

天使「酷過ぎです！！！」

霧夜「んじゃ、次回も頼みます」

よろしくお願いします

天使「私無視ですか！？」

霧夜「えっと、竜華零さんと雨季さん…早速感想ありがとうございました」

天使「それでは♪」

【第零話】 転生直前（前書き）

前話である『【プロローグ2】』にて、色んな読者様方から「スパロボを知らない」や「説明不足」等、自分の執筆の修正箇所を指摘が多々あったので、指摘ありがとうございました

なので、本作品に出てきた単語の説明はこの本編の後にさせていた
たぎます

申し訳ありませんが、これからもよろしく願います

それでは、本編をどうぞ

【第零話】転生直前

霧夜SIDE

どうも、形だけ転生者になった霧夜だ

あれからすぐに俺の師匠になってくれるらしい人達が来て、それからずっと修行三昧

別に文句とかがあるわけじゃないし、寧ろ感謝してる

ただ……〈形だけ〉の転生者ってのはやっぱりキツイと思ったただけだ

身体能力が一般人と同じレベルだから、転生者と同じレベルまで上がるのに真剣^{マジン}で死にかけた

まあ、そのおかげで師匠の考えてくれた修行のステップ1（ステップは全部で3まである）に無茶苦茶時間（もとい年月）が掛かったんだがな…

ちなみにステップ1では危機察知能力と見切りの修行や、戦術講座、常に技は開発し続ける開発力、柔軟運動による反射神経等、更にアインストの制御系を鍛えるのが主な内容（※マラソンをしながら師匠達の攻撃（ギリギリ俺が避けれるレベルの）を避けるという2つの行動を並行して体力を、危機察知と見切り、精神統一等で精神を鍛えてくれるのは貴史師匠と霞師匠、柔軟運動で反射神経等の体を鍛えてくれる薫師匠、柔軟な思考による戦術講座や開発力の講義をしてくれるカスミ師匠、自身に内包している異形（俺で言うアインスト）等の気持ちや扱い方を講義してくれるのは要師匠、強い力の意志によって屈服させ、従わせる&対話して洗脳して主至上主義（

?)等のアインストに対する制御系の修行をしてくれるのが薫師匠とカスミ師匠)

んで、無事にステップ1を合格(?)した後はステップ2に上がった
ステップ2の内容はステップ1の内容を少し減らして次の修行をする
というもので、勿論ステップ1の修行もちゃんとやる
ちなみに、ステップ2の修行はカスミ師匠が魔法や魔術を、薫師匠
と霞師匠が武器の使い方を、貴史師匠が格闘技を、要師匠が異形化
(アインスト化)した状態での戦い方を教えてくれるというもの

そして、ステップ3に進んだのだが……ステップ1と2が楽だと思
うくらいにステップ3軽く死ぬる

まずは武器だけで戦う制限模擬戦
相手は薫師匠と霞師匠

霞師匠が色んな宝具で攻撃してくるのと、雷帝モードになってる薫
師匠がちよくちよく攻撃してくるのがキツイ

二番目は魔術や魔法だけで戦う制限模擬戦
相手はカスミ師匠

SLB等を撃ちながら漆黒魔法も撃ってくる
更に星のバックアップがあるから実質魔力無限
勝てる気がしない

三番目は格闘技だけで戦う制限模擬戦
相手は貴史師匠と要師匠
貴史師匠と要師匠の息が綺麗に揃っているから、実質2人で俺1人
をフルボッコしてる様な状況
だけどカスミ師匠よりは若干楽な気がする

四番目はアインスト化だけで戦う制限模擬戦

相手はORTって巨大な蜘蛛化した要師匠なんだが……ORTの硬さがチイトな程異常過ぎる

おにれんげ

鬼蓮華では表面に傷が付けれれる程度で、未だに斬れない

真面目に悔しい

最後に総合模擬戦

相手は貴史師匠

自分が持つてる力を最大限使っているが、全く歯が立たない
真剣で涙出た

そして今は総合模擬戦をやった後の休憩中

休憩後は師匠達との一騎打ちの修行で、最初の相手は薫師匠、二番目がカスミ師匠、三番目が要師匠で、四番目が霞師匠、そして最後が貴史師匠

…マジで前が霞んできた

「お久し振り」

俺がちよっと鬱になりながら顔を服の裾で拭いていると、アルテミスが何故か楽しそうにやって来た

確か、アルテミスと前に会ったのはステップ1が終わる直前だったから……大体5年前位か？

「貴方の感覚的にはね？外は貴方を器にしてから1週間位しか経ってないわよ」

「マジかよ…」

実は俺が今居る場所……確か空間や、空間居る人（転生者も含む）の外見の時間等が止まっている感じ（正確なことは俺も知らない）の部屋らしい

おかげであまり外見は変わってない

ただ髪がちょっと伸びて邪魔後ろで結んでることを除いては…

「にしても……よくこんな凄い師匠達を呼べたな」

「今頃ね」

確かに今頃だな…

だけど、ちょっと前から気になってたんだよな

「実は、貴方の師匠達は皆転生者の中でも上位に君臨してるメンバーで、私がゼウス爺様をお願いして呼んでもらったの」

ゼウス爺様って……多分、あの色んなことで有名なゼウス神のことだよな？

確か、オリュンポス十二神をはじめとする神々の王で……ギリシア神話の主神たる全能の存在

そして、天候……特に雷を司る天空神でもある……だったか？

「やっぱり詳しいのね。ちなみに、向こうの神々に頭を下げてくれたのもゼウス爺様よ」

ゼウス神様、自分の為にお疲れ様でした

そして本当にすみませんでした

「…：そういや、なんか用があったんじゃないのか？」

「えっとね……そうそう、貴方の行く世界決まったから教えに来たわよ」

いきなり過ぎる……

俺は驚きながらもアルテミスに訊いた

「…で、どんな世界？」

「えっと、確かね……《ネギま!》の世界よ」

何故に《ネギま!》の世界なんだ…?
てか、誰が選んだし…

「世界を決めたのは……アポローン兄様よ」

アポローン兄様って……あんた（アルテミス）の双子の兄にして、オリュンポス十二神の1柱とされる神のアポローンか
確か、古典時代のギリシアにおいては理想の青年像と考えられたと言われて、日本語ではアポッローンとか呼ばれたっぽくて……んで、長母音を省略してアポロンと呼ばれることが多いらしい……筈だよな？

「なんでそんなに詳しいのかしら？」

「昔の知り合いに詳しいのが居たからな……有名な神々は大体分かると思う」

そういや、なんであいつはあんなに神話に詳しくったんだ？

特にギリシア神話関連

まあ、俺は死んでるわけだから別にどうでもいいがな

「それじゃ、行く時間^{とき}が決まったら迎えを寄越すわ」

「ん、分かった」

アルテミスが部屋を出ていくと、嫌な予感がしたから俺は急いで頭を下げた

すると、頭の真上をカスミ師匠の魔法が通り過ぎていったのを感じた

「いつまで休憩してるつもりだ？馬鹿弟子」

「すみませんした、カスミ師匠」

「罰として私達との一騎打ちの全てに私の魔法を避ける。いいな？」

「…了承しました」

…さて、もっと修行頑張りますかね

S I D E O U T

アルテミス S I D E

霧夜君の修行部屋から出た後、自室に向かっていた
すると…

「あっ、アルテミス様。お久し振りです」

後ろから1人の青年が近づいて来た

彼はハデス神の■■■■と特殊な盟約を結んだ人物で、色んな神々と親しい仲の存在でもあるのよね

「ん？なんか良い事でもあったんですか？いつもより表情が明るく見えます」

「そ、そう…？」

それはやっぱり■■■■が原因……かな？

SIDE OUT

| | | | |

天使「どうも、天使です。ここからは『プロログ2』で分かんかったと思われる単語をピックアップし、説明させていただきます」

「アインスト」

とあるゲームにて、地球圏全域に突如として現れた正体不明の生体

群の総称

その正体は生命が誕生するより遙か昔、地球をルーツとする生命を監視するために〈思念体〉によって生み出された人造生命体

階級ごとに役割が分かれていて、更に上位のアインストは意思を持っており、ハチやアリのように下位のアインストを生み出して使役する

普段は自分達の為に作り出した異次元空間に生息しているが、宇宙に現れる時に異常な重力帯が発生して、ストーンサークルが形成されることもある

人間の可聴域を越えた音波を発し、無人機や人間を乗っ取って操作し配下に収めてしまうことが可能（一定以上の《意思》を持つ場合は操作されない）で、対象を理解する為に相手の情報をもとにコピーを作ることもある

アインストには、身体の中央部に球体状のコアを持っており、これを破壊されない限りは自己再生が可能である

また、撃墜あるいは最上位個体が撃破された場合、破片等まで完全に消滅してしまう為、残骸を回収することはもちろん、解析も出来ない

「ノイ・レジセイア」

アインスト達を統べる、最初にして最上位のアインスト

本来は全てを見守る為だけの存在だったが、自分たちが望む進化をする生命を作り出すべく、人間に干渉する

そして、人間に代わる新しい知的生命体を創造する為に、様々な世界にアインストの種を撒いている

言わば〈女王蜂〉とでも言うべき存在

「アルフィミイ」

アインストの幹部格ともいえる少女で、「ですの」という語尾をつけゆっくりと喋る独特な口調が印象的

アインスト達の中で唯一人間に近い姿をしていて、見た目の年齢は13〜14歳前後と推測される

その正体は、人類との接触及び調査をより円滑にする為に作り出さ

れた擬人型アインストで、搭乗機体はペルゼイン・リヒカイト

「ペルゼイン・リヒカイト」

アルフィミイの搭乗機で、怨霊や鬼を連想させる面のようなパーツを全身にあしらった、赤い鎧武者のような外見が特徴

見る者に強烈なインパクトを与えるその鬼ないし髑髏の仮面は「人格」を表現していて、鬼の装飾は人類全体のデータから導き出されたものらしい

そして「鬼面」は、女性の怨念を具現化したものではないかとされる他のアインストと異なり、母体であるノイ・レジセイアよりもアルフィミイの意思を優先して動く

取り込んだものを再生させる能力を持っていて、傷ついたある女性を収容し、その内部で女性にアインストの細胞を与え、再生させたこの時に生み出されたのがアルフィミイである

ペルゼインの頭部には複合センサーとしての機能が集約されていて、更に額の球状パーツには思念受信機と思念波による精神攻撃の役割

を持っている

ボディは主に骨格、外皮、軟質の筋繊維状のパーツで構成され、上腕部は骨格が存在せず触手のみで繋がっており稼動範囲が広い

ペルゼインの武装は、太刀のへ鬼蓮華（本来はオニレンゲ）一本で、あとは内蔵武器となっている

そして、ペルゼインの左右には浮遊する鬼面砲（本来は鬼菩薩^{オニボサツ}）が帯同していて、更に鬼菩薩は鬼面部分から骨格状の体を作り出し、それ自体が別個のアイNSTとして活動することも可能

天使「これにて説明を終わらせていただきます。ありがとうございました」

【第零話】 転生直前（後書き）

というわけで、霧夜の修行とアインストの説明でした

天使「今回は誠にすみませんでした」

霧夜「これからもよろしく頼みます」

天使「それと：f a k uさん、249さん、竜華零さん、雨季さん、
感想ありがとうございました」

今日は時間が有ればまた投稿する予定です
良かったらご覧下さい

霧夜「んじゃ、ばいなら」

【第壱話】時が来た…だけど移動手段が（汗）（前書き）

更新です！

霧夜「とりあえず本編どうぞ」

【第壱話】時が来た…だけど移動手段が（汗）

霧夜SIDE

師匠達との修行（ステップ3）が一通り終わった
カシミ師匠曰く、「とりあえずは及第点」だそうだ

そして修行とは関係あまり無いが、要師匠のおかげで酒に無茶苦茶
強くなったのと、貴史師匠のおかげで若干胃痛になった

胃痛になった時、要師匠は何故か俺の肩を叩いた
その時の貴史師匠は「胃痛とはな……あいつみたいだな」と笑いな
がら言っていた

あいつって誰だよ……だけど、分かったことが1つ
貴史師匠によって、俺以外に胃痛を得た人物が居るということだ

修行が終わった後、霞師匠がすぐに姿を消した
要師匠曰く、「旦那のところに帰った」だそうだ

そのあと師匠達と別れを告げた俺は部屋の外に居た天使（幼女）と
話（という名の幼女弄り）をしながらアルテミスの部屋に案内して
もらっていた

「にしても……久し振りだな、天使（幼女）」

「まだ幼女って言うんですか!？」

何度でも言うと思うよ？

…そして、なんで○の中が読めてるんだよ

「天使だからです♪」

まあ、幼女だからな
読めれても仕方ないな

「スルーですか！？そして幼女じゃありません！！」

ちなみに俺が好きなのは幼女では無い
幼女（天使）はただの弄る対象だ！！

「逆になってますし、弄る対象じゃ無いですし、完全にスルーなん
ですね！！」

こうしてツツコミをしてくれるしな…流石幼女

「もうこの人嫌です…」

天使（幼女）を弄りながら歩いていると、アルテミスの部屋と思わ
れる部屋から1人の男性が出てきた

天使は男性を見ると、途端に元気になり…

「悠さ〜ん♪」

「ん？おお、天ちゃん。元気だったか？」

「はい♪」

天使は男性に近づいて行き、男性は天使の頭を撫でていた
すると、男性が俺に気付き声を掛けてきた

「ん？まさか、お前が噂のビックリ人間か？」

「噂のビックリ人間ってなんだよ…」

男性は苦笑いをする、天使の頭を撫でるのを止め、俺を見てきた

「とりあえず自己紹介な？　俺は橘悠^{たちばなゆう}。ハデス神の部下で、転生者達の監察者をやってる」

ハデス神…確か死者が行く場所で、ギリシア神話の下界の神ハーデースからとった言葉と言われてる神…だったか？

「ほお…アルテミス様の言ってた通り、ギリシア神話に詳しいっぽいな」

「生前の知り合いのおかげでな…」

「そういや、あいつ…今なにしてっかな？」

「ところで、悠さんはアルテミス様に何か御用だったのですか？」

「まあ、ね…ちょっと許可を貰いに来たんだ」

「許可って…まさか〈例の件〉のですか！？」

天使が驚きながら言った言葉に、男性…悠が若干暗そうに頷いた
〈例の件〉って、なんだ？

「とりあえずアルテミス様には許可は貰えたから、後はゼウス神に

申請すればって感じだね」

「そうなんですか……ですが、本当に大丈夫なのですか？」

「若干……いや、だいぶ危険かもしれないけどね。この件で今動けるのは俺だけだしね。んじゃ、またね天ちゃんとビックリ人間君」

悠はそう言っていると、歩き出そうとする
だが…

「ちゃんと待てや……俺はビックリ人間って名前じゃねえよ。俺の名前は遠坂霧夜だ」

俺が名乗ると、悠は何故か感心した様な顔をした

「そうか……もし逢えたらまた逢おう。またな、霧夜少年」

悠はそう言っていると、俺達が来た道を逆に去って行った
というか…

「少年ってなんだよ……」

外見を見る限り同い年くらいじゃねえか…

「悠さんはハデス様の妹様と盟約を結んでいる転生者みたいな存在で、天界では少し有名なんです〜♪」

天使が何故か楽しそうに言うが……ところで、ハデス神の妹って一体どういうことだ？

それに、転生者みたいな存在って…

俺は色々そんなことを思いながら、天使と一緒にアルテミスの部屋に入った：

SIDE OUT

悠SIDE

アインストのコアを体内に秘めているという噂のビククリ人間……霧夜少年が天ちゃんと一緒にアルテミスの部屋に入ったのを見た後、俺はとある部屋に入った……いや、入ったと言うより、戻ってきたというのが正しいかな？俺はこの部屋からアルテミスの部屋に向かったわけだしな……

「よう、元気か？」

「あ、悠うう？私はいつも元気なんだよおう♪」

「そうかよ」

この語尾が変な感じに伸びてるのがハデス神の双子の妹で、名前はネイカ

俺と盟約を結んだ相手であり、平行世界の神々との窓口をしているちなみに外見は白髪赤眼……確か、アルビノと言うんだったか？

それと身長が8歳くらいで、何故かスタイルが良いこのスタイルは確か……

「出るところは出てる、だったか？」

「なにがあう？」

む、どうやら口から洩れていたみたいだな
つまり、ネイカはアルビノのロリ巨乳ってやつだ
別に俺はロリコンでは無いし、ネイカの体にハアハアするなんてこ
とは絶対有り得ない
というよりネイカ自身が：

「悠うゝ、これ読んでえゝ」

「誰がそんな百合な雑誌を読むか、アホ」

そう、ネイカは百合好きなのだ
最近は何故か俺に百合な雑誌を読むように勧めてくるのもあるが、
もう一つ気になることがある

それは、ネイカがよく俺の背中に抱き付いてくる様になったことだ
ネイカの行動を見たハデスが前に「ネイカを頼んだ」とドヤ顔をし
ながら俺に言ってきたことがある

その時は思わずハデス神のドヤ顔を《護式・斬冠刀》で斬り掛かっ
てしまった

理由は……ドヤ顔が苛ついたからしかないな
ちなみに後悔や反省は全くしていない

「ところでえゝ」

「ん？」

「数日前にい、例の《アレ》が確認されたっぽいんだよおゝ」

…どうやら、《例の件》を急いで興す必要があるみたいだな

なんでって……いや、アポローン神が今回やられるのは当たり前じゃね？

そして天使（幼女）、よく噛まずに『いや』が何度も言えたな…

「当たり前ね」

「当たり前なんですか!？」

さて、天使のツッコミが冴えてるからもう暫く弄りたいな
俺はそう思いながら再び天使を弄ろうとしたが…

「残念じゃが、時間じゃ」

そう言って、白髪でシワシワな爺さんが部屋に入ってきた

「あらせウス爺様、もう時間なの？」

この爺さんがゼウス神だったのか…

「ゼウス神、自分のせいでご迷惑おかけしてすみませんでした」

俺は素直にゼウス神様へ頭を下げた

理由は、俺の師匠達を用意してくれたからだ

「いやいや、此方も多少はお主の原因でもあるわけじゃからな……
じゃが、世界については悪かったの。アポローンには後でキツチリ
言っておくからの」

（ゼウス神様、マジでありがとうございます）

俺は心の中で感謝した

「んじゃ、この扉を潜ったら《ネギま!》の世界へ行くからの」

ゼウス神様がそう言うのと、ゼウス神様の隣にはいつの間にか扉があった

あったのはいいのだが…

「これは、某青狸のd「気のせいじゃよ」いや、絶対にどk「気のせいじゃ」……d「気のせいじゃ」わ、分かりました、分かりましたから…」

ゼウス神様、頼むから顔を近づけないでくれ
迫力が在りすぎる…

「…んじゃ、御世話になりました」

俺は感謝の意味を込めてゼウス神様やアルテミス、天使に頭を下げた

「……………い（ボソボソ）」

ん？今、アルテミスはなんて言ったんだ？

「…行ってらっしゃい（ボソボソ）」

アルテミスさんや、最後の方が聞こえないのですが……まあいいや。
にしても、行ってらっしゃい、か…
んじゃ、俺は…

「…行つて来ます」

聞こえるか聞こえない位の声でアルテミスに言った

「!?!?!?!?!え、ええ／／／」

何故かアルテミスが顔を紅くしてたが…まあ、俺も少し恥ずかしかったが…

そして俺は、某青たn「霧夜君や、気のせいじゃと言った筈じゃが？」俺は扉を潜った…

SIDE OUT

【第壱話】時が来た…だけど移動手段が（汗）（後書き）

というわけで、霧夜が異世界入りしました！

霧夜「明らかにどk「その先は言っては駄目です!!」黙れ幼女」

天使「また幼女って!？」

???「天ちゃん、大丈夫かしら？」

天使「アルテミス様（泣）」

げっ、アルテミス：

アルテミス「霧夜君、この後お願い出来る？」

霧夜「なんで俺が…：雨季さん、竜華零さん、ユタさん、十六夜ア
ミナさん、けーくんさん、fakuさん、nosugarさん、秋
代さん、時空の旅人さん、感想ありがとうございました」

アルテミス「次回は…と言っても、今日中に後2話上げるんだった
わよね？」

これだからアルテミスは嫌なんだ（泣）

霧夜「勝手に嫌いになったのはお前だろうが…」

天使「では、次回もよろしくお願いします」

【第貳話】拾われた…（前書き）

本日2話目です!!

天使「では、本編をご覧ください!」

【第貳話】拾われた…

霧夜SIDE

無事（？）〈ネギま！〉の世界に着いた俺、霧夜ですが……着いた瞬間、何故か体が8歳になった
更に8歳になって少し後、なにかに追われ始めた
俺を追って来ているのは……悪魔だった
とりあえず悪魔が俺を追って来ている理由に耳を傾けてみると…

「あの村の生き残りだ！ さっきと捕まえて食うぞ！！」

「「「オォー！！」」」

どうやら悪魔達は俺を食うつもりらしい……てか、多分俺を食っても旨くねえと思うぞ！？

それにこいつら……この近くにあるどっかの村を1つ潰してやがる…！？

果てには、俺を潰してきた村の生き残りと勘違いしていると……ふざけんな（泣）すると突然…

「「「ギャアアアアアア！！！！」」」

悪魔達の叫び声が聞こえて来たから、俺は急いで後ろを振り返った
そこには…

「食らいな！千の雷！！」

なんか手帳を読みながら悪魔に向かって魔法ブツ放ってる人がいた

……って、あの人は!?

(まさか、ナギ!? ……なら、今は葉味坊主の前の時代か!?)

転生(?)した時代に対して思いっつきし驚きつつも、何故か鬱になりそうな気分だった

理由こそ、個人的な理由。そう、実は俺…

ナギが主人公の時代の登場人物や使う魔法や技は大体で分かるのに、時代の流れだけが全く分かんねえんだよ!!!!!!

そんな時、身長の小さい人が段々俺に近づいて来て……って

(この人、ナギの師匠のゼクトさん!?)

俺が内心驚いていると、ゼクト(?)さんが俺に話し掛けてきた

「小僧、大丈夫じゃったかの?」

「えっ、あっ、はい!!」

俺が慌てて答えると、ゼクトさんは「そうか」と言い、自身の後ろを見た

ゼクトさんの後ろでは既に悪魔達（と、一部の大地）が居なくなっていた…

こうして俺は『紅き翼』^{アラルブラ}と出逢い、何故かゼクトさんの養子となつた……つうか、なんでゼクトさんの養子になってるんだ？俺（汗）

【第貳話】拾われた…（後書き）

このままもう1つ更新しますので、後書きはスルーします

【キャラ設定・主人公編】今頃ですがね…（前書き）

というわけで、キャラ設定です

アルテミス「どうぞ」

【キャラ設定・主人公編】今頃ですがね…

《転生前》

名前…遠坂霧夜

（とおさかきりや）

年齢…16歳

《世界介入後》

名前…キリヤ・ゼクト

年齢…8歳

《特徴》

髪色…黒色

髪型…ロング

瞳の色…群青色

《服装》

FF?のアーロンさんの色違い（黒色）

《説明》

歩道を歩いてたら、居眠り運転していた相手の自動車にぶつけられて死んだ

本来なら転プレとは無縁で、そのまま天国か地獄に逝く筈だったが、何故か心臓にあったアインスト（ペルゼイン・リヒカイト）のコアのせいで形だけの転生者になった

その際、アルテミスから師匠を何人か強制的に付けられ、修行をした後、『ネギま！』の世界へ旅立った

そして『ネギま！』の世界に来たが、近くの村を襲っていた悪魔達に狙われた

その時、偶々ナギ達に助けてもらい、そのまま何故かゼクトの養子になった

《武装》

・鬼蓮華&鬼菩薩

原作（無限のフロンティアEXCEED）でアルフィミイが使っていたのと同じ物

使いたい時に姿を現す

《能力》

・アインスト化

そのまんまペルゼイン・リヒカイトになる
体もアインストそのもの

・魔術、魔法関連

余程の緊急時以外は使わない為、執筆無し

・身体能力関連

及第点故に、師匠達レベルの転生者達程強くは無い……が、本来な

ら並の転生者には恐らく互角レベル

《師匠》

・南武貴史&カスミ・ヴェネーラ&近衛薫

「チート最高、最強、無敵、無敗、更に原作ブレイク確実上等!」
な作品、『三人の転生者』の主人公メンバー

作者は秋代様です」

・一条要

「神様にアニメ世界に飛ばされ、型月最強へORTの力等のチート能力で暴れ回る『チートじゃ済まないシリーズ』の主人公

現在は『チートじゃ済まないin星海』で活躍中

作者は雨季様です」

・霧雨霞

「^{ヒロイン}主人公になることを求める、一人の少女の人生の軌跡を描く物語

現在はへ【唯一神】シリーズの『唯一神を継ぐもの シャナなう』で活躍中

作者は葵（仮）様です」

【キャラ設定・主人公編】今頃ですがね…（後書き）

とりあえず、本日の更新は終わr「まだ更新やるよな？」…はい？

霧夜「この勢いでもう1話更新しろよ」

天使「更新しましょう！」

アルテミス「更新しなさい」

…出来たらしまず（泣）

天使「アルテミス様、お願いします」

アルテミス「時空の旅人さん、秋代さん、感想ありがとう」

霧夜「んじゃ、次回も」

天使「よろしくお願いします♪」

【第参話】鬼畜眼鏡め…そして馬鹿到来（前書き）

一体今日だけで何回更新するのだろうか…

霧夜「ちなみに4回目だな」

天使「では、本編をどうぞ♪」

【第参話】鬼畜眼鏡め…そして馬鹿到来

霧夜SIDE

悪魔達に追われた日から数日が経った

ここ数日で現在の紅き翼のメンバーとは随分仲良くなれた

ちなみに、俺が実は身体の中に異形がいるとか（転生者ということ以外）全て話してしまった
しかし…

「んなもん、関係ねえよ。お前はお前だろ？」

とナギさんが俺に言った

その時、俺は思わず大泣した

まあ、これ以上は恥ずいから言わないとして…
メンバーの紹介をしながら色々と言ってく

まずは、ナギ・スプリングフィールド…ナギさんとは何故かノリが合って、偶に色々馬鹿な事を一緒にやってる（だが俺は8歳…）

青山詠春…詠春さんは、俺が神鳴流しんめいりゅうの技が使えると知ってからは色んな技やアドバイスをくれるようになった

それに、師匠達より若干レベルが低いがアドバイスをくれる為、技の微調整や自分に合う風に改良とか出来るから随分楽だ
それに、俺が成長していく姿が楽しみらしい

アルビレオ・イマ…アルさんは最初会った時、俺を少女と勘違いしたから思わず鬼蓮華で斬り掛かろうとしてしまった。反省もして

ないし、後悔もしてない

俺が転生者と分かってからも、色々と面倒を掛けてくれる
最近は俺に魔法の応用を教えてくれる

そして最後はフィリウス・ゼクト……ゼクトさん曰く、俺を養子に
してくれた理由は「なんとなく」なんだそうだ
なんとなくで養子にしてくれたって……ちょっと複雑な気分になる
のは気のせいなのか？

ちなみに、俺がゼクトさんと呼ぶ時は…

「ゼクト父さん」

と呼んでいる

理由は……まあ、俺もなんとなくだ

| | | | |

さて、今は晩飯時

詠春さんが晩飯作ってて、俺はナギさんとゼクト父さんの2人と修
行中

アルさんは愉快そうに俺等3人を見てる
しかし、修行中の内容は…

「ちょっと、ナギさん！？ マジで千の雷は止めて!!」

「キリヤなら大丈夫だ!」

「その自信は一体どこから!?!」

そう、普通に千の雷等の上級魔法がドカドカと放たれているのだ

千の雷は未だに相殺とか無理だから、回避しなければいけない
そんな時、ゼクト父さんがナギさんに近づき：

「ナギ、いい加減キリヤにそんな馬鹿魔法を撃つんじゃない」

「ちえ……師匠がそう言うなら仕方ないな……」

とゼクト父さんがナギさんに注意してくれた
ゼクト父さん、ありがとう……

「さて……キリヤ君、私とちょっと勝負しよう」

俺がゼクト父さんの言葉で惚けていると、詠春さんがいきなり俺に
言ってきた

「ところで詠春さん、晩飯は大丈夫なのか？」

「アルが代わりに見てるからね」

さ、際ですか……（汗）

俺は鬼蓮華を出すと、鞘から鬼蓮華を抜く
8歳の身体になったせいで腰に鬼蓮華を身に付けることが出来ない

から、代わりに鬼蓮華を出すという応急措置をしてる
それに……片手で持てた筈の鬼蓮華が、今は両手じゃ無いと無理な
んだよな……

「では、いくよ!」

詠春さんが俺に声を掛けた後、一瞬で近づいて来るが、俺はすぐに
避ける
しかし……

「――神鳴流奥義：斬岩剣!」
ざんがんけん

詠春さんは俺に斬岩剣を放ってきた
俺は慌てて緊急回避をする

「ちよっ、それ奥義!?」

「キリヤ君なら大丈夫だろうと思ってね」

（この痩せ眼鏡……鬼畜だな。なら俺も……）

俺はそう思うと、自分から詠春さんに近づき……

「――斬岩剣!――!」

斬岩剣を詠春さんに放つ

「ッ!?」

詠春さんは俺が放った斬岩剣を驚きながらも、余裕で避けた

ちなみに言っておくが、俺は斬岩剣だけで終わるつもりは無いんだな、これが!!

「―斬空閃!!」
ざんくうせん

俺は先程放った斬岩剣の状態から斬空剣を詠春さんに放ったそれに対し、詠春さんは…

「―神鳴流奥義：斬空閃!」

斬空閃を放って、相殺させてきた
そして、俺の放った斬空剣と詠春さんの放った斬空剣がぶつかり、見事相殺された。更に相殺によって砂煙が起き、俺は砂煙を利用して詠春さんに近づいて…

「―百烈桜華斬!!」
ひゃくれつおうかざん

俺が神鳴流の中で一番得意を放とうとした
しかし、8歳の身体故だろう…放つ直前に俺はその場で倒れた
8歳の身体では、百烈桜華斬の反動に耐えきれない
おそらくそれが原因

「危なかった…」

詠春さんがそう言って俺をおんぶしてくれる

「いつもすみません…」

「いいよ、8歳であそけまで動けるんだ。こうなる事は当たり前だ」

詠春さんの言葉に、俺は頷くことしか出来なかった…

「（アルテミス……また会ったら覚えてろよ…）ところで詠春さん……今日の晩飯はなんですか？」

「今日は鍋料理だ」

鍋か……そういや、魔法世界の鍋って旨いのか？

――――

「日本の鍋料理って奴かぁ……じゃ、早速肉を〜♪」

「あっ！ナギ、おまつ……何肉を先に入れてるんだよ」

「トカゲ肉でも旨いのかのう？」

「この肉、トカゲ肉なんだ…」

今は皆で鍋料理を食べてるんだが……ナギさんが早速肉を入れたそれを詠春さんが怒って、ゼスト父さんは肉が旨いかどうか聞く俺はゼスト父さんの言葉を聞いてちよつと鬱に入り、アルさんは何故か笑顔で傍観してる

「いいじゃねえか、旨いもんから先だよ。ホラホラ」

ナギさんがそう言って、どんどんトカゲ肉を鍋に入れていくそれを見た詠春さんがナギさんに注意する

「ところでゼスト父さん……トカゲ肉って旨いの？」

「旨いのう……まあ、この鍋料理でも旨いかどうかは分かんがのう」

見た目は普通の肉にしか見えないのに、実はトカゲの肉とか……ちよつとだけ抵抗があるな
すると、アルさんが微笑しながら言った

「フフ……詠春、知っていますよ。日本では貴方のような者を〈鍋將軍〉……と呼び習わすそうですね」

「つ……強そうじゃな」

いや、鍋將軍じゃなくて鍋奉行だから（汗）
そしてゼスト父さん信じちゃった!?

「わかったよ……詠春、俺の負けだ。今日からお前が鍋將軍だ」

「全て任す、好きにするが良い」

「んー……嬉しくないなー。そして鍋將軍ではなく鍋奉行だ」

どうやらナギさんも信じたみたいだ……それに対して詠春さんがちやんと訂正してる……だけど、ちよつと俺は悪乗りしてみたくなった

「頑張ってください……詠春鍋將軍♪」

「だから鍋將軍ではなく鍋奉行……霧夜君、わざとらしいぞ」

俺の言葉に詠春さんが溜息をつきながら反論した

何故だろうか……詠春さんを弄るのが楽しく思えてきたのは…

「何故キリヤ君は幼女に見えるのでしょうか…」

「アルさん、俺は女子じゃなく男子だ」

アルさんの一言で思わず鬼蓮華と鬼菩薩を出しそうになった…
危ない危ない

「思い出しました。確か、キリヤ君のような者を日本では確か……
そう、〈男の娘〉と呼び習わす筈……でしたよね？ 詠春」

「何故俺に振るんだ？」

俺も何故〈男の娘〉と言われるのかが不思議な位なんだが……てか、
俺が勝手に男の娘にされていく……そんなに俺って、女顔なんだろう
か……？

「アルテミス様の転生特典です♪ b y天使」

今なんか色々と苛ついたから、とりあえずアルさんを後で殴ることを
決めた

そんな時、ナギさんが肉を食べながら呟いた

「…姫子ちゃんにも食わしてやりたいくらいの旨さだな」

「姫子ちゃ…？ ああ、オスティアの姫御子のことじゃな？」

ナギさんとゼクト父さんの言葉で疑問が1つ
オスティアの姫御子って……誰だったわけ？

「…そういえば、キリヤ君はオスティアの姫御子等を知ってますか？」

「全く知りません」

この場合は忘れたと言わなければならないのかとつい迷ってしまった

「では、教えてあげましょう。まずはオスティアの姫御子……アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアという…」

「…というわけなんですよ」

「へえ」

アルさんの説明が終わり、（長かったから略すが…）なんというか……凄いな、オスティアの姫御子って

「まあ……戦が終われば、彼女を自由にする機会も掴めるやも……ですわね」

アルさんの説明が終わった直後、詠春さんが椎茸（だと思いう食べ物）を食べながら言った

「その戦だが……やはり、どうにも不自然に思えてならん」

「「何が（ですか）？」」

俺とナギさんが同時に訊くと、詠春さんは「何もかもだよ」と答えたその時、ナギさんとアルさんとゼスト父さんが突然動き、肉を取り始めた

俺と詠春さんがポカンとしていると、鍋に向かってなにかが飛んで来て、鍋はなにかに当たり、宙を舞って、詠春さんの頭に落ちた

「食事中失礼ッ……俺は放浪の傭兵剣士、ジャック・ラカン！！
いっちょやろうぜッ」

俺はその時思った…

（…馬鹿が来たよ（汗））

S I D E O U T

【第参話】 鬼畜眼鏡め…そして馬鹿到来（後書き）

とりあえず馬鹿襲来までをお送りしました

霧夜「俺は男の娘じゃない!!」

アルテミス「その発言を拒絶する!」

こいつらが面倒になってきたな…

天使「秋代様、竜華零様、時空の旅人様、雨季様、感想ありがとうございます♪」

霧夜「次回更新は…」

未定です

霧夜「斬るぞ?」

アルテミス「射ぬくわよ?」

天使「○○潰しますよ?」

天使が男性にとって一番怖い台詞言ってる…

アルテミス「じゃあ、次回もよろしくね」

【第肆話】 ○○の恨みに注意報…いや、既に警報レベルかW（前書き）

題名の○○には幾つか入りますが、それは皆さんのご想像にお任せします

霧夜「最悪だな」

アルテミス「残念ね」

うるせー（泣）

天使「では、本編をどうぞ」

【第肆話】○○の恨みに注意報…いや、既に警報レベルかW

??? SIDE

依頼されて3人の男と1人のガキの計4人を襲撃してみたんだがよ……なんか、ガキ1人増えてないか？

しかも、外見からしてロリ少女かよ……まあ、とりあえず……あの少女も対象ターゲットってことでいいんだよな？

…んじゃ、さっさと片付けるか！

この放浪の傭兵剣士、ジャック・ラカンがよ！！

SIDE OUT

霧夜SIDE

ジャック・ラカン……確か、〈千の刃のラカン〉って異名を持つ傭兵剣士で、他にも〈死なない男〉、〈不死身バカ〉、〈つかあのおっさん剣が刺さんねーんだけどマジで〉等、数多の異名を持ってるバグキャラ……だよな？

というか、その前に…

「え、詠春さん…？」

「フ……フフフフ…」

ジャック・ラカンによって宙を舞った鍋が未だに詠春さんの頭にあるからだ

更に、詠春さんから黒いなにかが見える気がする…

「えいしゅ……プッ!？」

ナギさん!？今笑ったら色々ヤバいつて!!

「フ……食べ物を粗末にする者は…」

あつ、今なんか切れた感じの音がしたような…

「どーしたー来ねーのかぁー」

ジャック・ラカンが叫ぶのと同時に、詠春さんの姿が消えた

「来ねーならこっちからいッ…」

ジャック・ラカンの方を見ると、ジャック・ラカンの持っていた剣を真つ二つにした詠春さんがいつの間にか居た

「キリヤ君、一緒にお肉食べながら観戦しませんか？」

見ると、ナギさんとゼクト父さんも観戦していた……肉を食べながら俺は…

「…いただきます」

SIDE OUT

三人称SIDE

ラカンが折られた（もとい斬られた）剣で詠春と相手をしていた

「ちよっ、タンマタンマ。あんたマジでつええな……ちよい待たね？」

「ふざけるなっ、やる気なら本気を出せ貴様！」

その頃、観戦組（？）はというと…

「お？ 詠春の攻撃凄いでるぜ」

「あの大男、やりますよ。見たことがあります。ちよっと前、南で話題になった剣闘士ですよ」

「なるほどのう……キリヤ、この肉をやろう」

「あっ、ありがとう。ゼクト父さん」

普通に肉を食べながら2人を見ていた…

「へっ、ソースか……けど、5対1だし、本気出す訳にはいかんのよね」

ラカンはそう言って、4つのカプセルを取り出した
そして…

「あんた達の情報はリサーチ済みだぜっ!？」

4つのカプセルを詠春に向けて投げた
すると、カプセルから4人の女性が現れた…

女性が現れた時、観戦組はというと…

「おいおい…」

「……………」

「アルさん、何故俺を見るんだ？」

「いや、やはりキリヤ君はようZ「違うから!？」…………まあ、いい
でしょう」

「良くないから!？」

既に肉を食べ終わっていて、観戦しながらふざけてあっていた…

SIDE OUT

ラカンSIDE

「ホイ、一丁あがり」

《情報その1》…………生真面目剣士はお色気に弱い。情報通りだな

そんな時、嫌な予感がしたから避けてみた
すると、俺がさっきまで居た場所にデケェ魔法が落ちた

「おう、出たな《情報その4》……赤毛の魔法使いは弱点なし。特徴《無敵》」

杖を持っていた小僧は俺を見ながら他の奴等に言った

「てめえら……手エ出すなよ」

すると、他の奴等は…

「言われずとも」

「バカの相手はバカにさせるのが一番じゃ」

「けど、詠春さんは回収するから。アルさん、手伝って」

と言って、《情報1》を回収して空に上がった

「へっ、おっさん。いいのかよ、剣なしで」

「心配すんな。俺は素手のが強え」

俺と小僧は同時に動き出した

S I D E O U T

霧夜SIDE

ナギさんとジャック・ラカンが戦い始めて13時間後……正直に言わせてもらおうと

「あんたら環境破壊し過ぎなんだよ!!」

「ちょっとマジになりすぎたな」

地形が無茶苦茶変わり過ぎて、あまり原型留めてないんだが……てか、何故2人ともハモってんだよ!?

「…よし、俺も紅き翼に入るぜ! ナギ・スプリングフィールド!!」

「おうよ! 筋肉ダルマあ!!」

ナギさんとジャック・ラカンがお互いに笑顔で拳をぶつけたなんでもいいが、なんか頭が痛いんだが…

「…とりあえずアルさん、俺の髪に触ってなにをしよう?」

「いえ、ちょっとキリヤの髪でツインテールを…」

もう勝手にしろよ…

勿論、後でちゃんと元に戻るがな…

SIDE OUT

アルテミス、紹介よろ

アルテミス「了解。霧夜君の師匠の1人の、カスミ・ヴェネーラ御姉様よ！」

カスミ「なにやら若干凄い紹介をされた気がするが……真祖の吸血鬼、カスミ・ヴェネーラだ」

作者は秋代さんで、作品名は『三人の転生者』です

カスミ「ところで……馬鹿弟子はどうした？」

霧夜は今…

霧夜「殲滅完了っと。にしても、意外にこの剣使えるな。畏無、本編でも使わせろ……って、カスミ師匠!？」

あっ、帰ってきた

カスミ「馬鹿弟子、ちょっと来い」

霧夜「えっ？」

「カスミ&霧夜退場」

天使「…では、次回もよろしく願いします」

アルテミス「まったね〜♪」

元氣だな、オイ(汗)

まあ：剣については考えておくか

――キィ：

〔説教部屋の扉が開く音〕

カスミ「お前さー、年齢身長が下がっても悪魔とか千の雷とか神鳴流に勝てよ」

霧夜「えっ、あっ、す、すみま」

カスミ「すみませんで通ったらメガロな老害は要らないんだよ」

霧夜「はい……」

カスミ「お前、誰の弟子だよ」

霧夜「か、カスミ師匠達の」

カスミ「だよな……」

——パタン…

〔説教部屋の扉が閉じる音〕

この後、誰も霧夜の姿を暫くは見なかったそうなの…

天使「以後、霧夜さんがこうなる場合は『霧夜のお師匠様達による説教部屋』というコーナーになります」

【第伍話】イレギュラーとの初戦闘（前書き）

題名通りです！

霧夜「んじゃ、本編スタートってことで」

【第伍話】イレギュラーとの初戦闘

霧夜SIDE

ラカンさん（俺が男と知って驚いていたが…）を仲間に加えた紅き翼は一緒にある村に着いた

この村に1日泊まっていくんだそうだ

俺はゼクト父さんと一緒に昼飯を食べた後、村の中ではなく外を散歩していた

「なんか、静かっているn「きゃあああああ」…俺の静かな時間が（泣）」

俺は悲鳴が聞こえた場所に向かった…

| | | | |

着いたら変な女性が一人だけ立っていた

「…？」

俺が不思議そうに女性を見ると、女性はいきなり俺に向かって火の玉を放ってきた

「んなっ!？」

俺は急いで鬼蓮華を出し、鞘ごと火の玉を斬った

「へえー、やるじゃない。私のファイアを鞘ごと斬るなんて……そして、私がへわざわざ」叫んだ声に反応してくれてありがとう」

色々ツツコミを入れたいのだが……とりあえず、あの叫び声が罠だったというのは理解した
しかし……ファイアだと？
ちよつと待てや、ファイアってまさか……それに、その髪形や髪の色……

「あんた……何者だ」

「私？　今から殺す相手に名乗るつもりは全く無いわよ!!」

女性はどこからかとても長く長い刀を出して右手に持つと、そのまま向かって来た

俺は鬼蓮華を抜刀し、女性の刀を防いだ

「てかその刀……まさか、村宗か!？」

村宗……某最後の幻想の7番目に出てくるキャラが使っていた、とても長く長い刀の武器
そして、そのキャラの名前は……

「あんたのその姿……『セフィロス』の姿とそっくりだな!!」

「私はセフィロス様の姿と力、そして全てのマテリアの力を得た……
……貴方を殺す遣いよ!!」

セフィロスの姿をした女性（恐らく転生者）はそう言うのと、俺から一度距離を置き、左手を突き出した

「召喚獣……召喚!　へバハムート!」

女性を言ったのと同時に世界が変わり、竜巻がそこらじゅうに起きている世界になった

そして、その世界の中心と思われる場所に、黒い龍が居た

「マジかよ……てか、バハムートって…」

俺、どうやっても勝てる気がしない……と思えない
今の身体じゃ、完全に技に着いていけない……だが、アレになればなんとかなるか

「さて、どうすっかな…」

「どうするもなにも、貴方は死ぬだけよ!」

女性がそう言って村宗を振りかざしてきた

俺は避けた後、女性に斬り掛かろうとするが、バハムートの尻尾が俺に向かって来たから、慌てて避ける

(1人でこれはちょいキツイな……アレになる為の時間が掛かるから……)

俺が女性とバハムートの対処に困っていると…

「よお、元気か? キリヤ」

…何故か隣にラカンさんが居た

「って、なんでラカンさん居るの!?!」

「とりあえずあのデカイ奴は任せろ！」

ラカンさんはそう言うのと、バハムートに向かって言った
いや、だからなんであんな居んだよ!?

…まあ、いいや

「ハア……んじゃ勝負といこうぜ…」 『偽セフィロスサンヨォ』

俺は自身の身体に眠っている異形……ペルセインに姿を変え、女性
に鬼蓮華の刃先を向けた

SIDE OUT

| | | | |

三人称SIDE

「それが貴方の正体……ってところかしら？」

女性がペルセイン化した霧夜に聞く

『ナニガ正体ダヨ、全ク……サテット、ソロソロ始メルカ』

霧夜は女性の問いに答えると、鬼蓮華を左手に持った鞆に収めた

「あら、せっかく抜いたのに、しまっちゃうの？」

『無駄口開ク暇ガアルンダッタラ、早く掛カッテ来イヨ』

女性は霧夜の挑発的な態度に笑みを浮かべながら、マテリアの力を

発動した

「なら、遠慮無くやらせてもらおうわよ？
アビリティ
能力……えんきよりこうげき、セツト！」

女性は告げた後、その場から移動せずに村宗を霧夜に向けて振った
すると、女性から斬撃が霧夜に向かって飛んできた
しかし、霧夜は慌てずに鬼蓮華を構え…

『―神鳴流・抜刀ノ型：しんめいりゅう・ばつとうのかた斬空閃！！』

抜刀で斬撃を放ち、女性が放った斬撃と相殺させた

「（神鳴流の抜刀術！？）…どうやら、そう簡単には殺せないよう
ね。……それなら、此方は能力追加……れんぞくぎり、セツト！」

女性は更にマテリアの能力を発動させると、再び斬撃を放ってきた
先程の斬撃と違い、1振りで何十もの斬撃が飛んできた
それを見た霧夜は抜刀の構えをせずに、女性に向かって抜刀したま
ま移動を始めた
そして…

『神鳴流ノ奥義ノ改造版ニシテ、俺ノアレンジ技！
―鬼牙流・斬撃ノ型：きがりゅう・ざんげきのかた千慄桜華ノ舞！！』

舞を描くように鬼蓮華を振るい、鬼蓮華から出てきた斬撃が全て一
度に斬る様に女性の放ってきた斬撃を斬るが、それで終わらずに、
そのまま女性に向かって斬撃が飛んでいった
それに対し女性は、霧夜の放った斬撃を村宗で対処し始めた

「思つて……たい……じょうに、多い……わね……！」

『アンタハ確カニ強イカモシレン……ダガナ、師匠達ニ比ベタラ有象無象ノ雑魚ニ過ギナインダヨ……！』

「いつの間に……！」

女性が対処している間に霧夜が女性の目の前に来ていた

『コレデ終ワリダ……イケ、鬼菩薩』

霧夜が言うと、霧夜の両肩辺りに浮かんでいた鬼菩薩が鬼蓮華の様な刀を持ったアインストとなって、女性を刺した

それと同時に霧夜と女性の周りがモノクロの風景に変わり……

「ぐっ……？」

『――鬼牙流きがりゅう：眩忌まぶい獲愚璃えぐり』

霧夜は鬼菩薩が刺した女性を鬼蓮華で突き刺し、何度も抉り始めたしかし、女性は抉られていることに気付いていない……いや、気付けない

何故なら、モノクロの風景の中では時間が止まっているからだだから、女性は自分が鬼菩薩に刺されたことしか知らないのだそして……

『コレニテ終幕……』

眩きながら鬼蓮華を引き抜いた
それと同時に女性から血のような飛沫が迸る

鬼蓮華が引き抜いた後、鬼菩薩も女性から引き抜き、元の鬼の面に戻り、霧夜の両肩辺りに浮かぶ霧夜の両肩辺りに戻ったすぐ後、モノクロの風景から元の風景に変わり、女性の時間も動き出し：

[illegible]

時間が動き出した女性は叫びながら消えていった

霧夜はアインスト化を解き、ラカンのところに向かおうとするが：

「あつ、村宗だ……」

地面に女性が使っていた村宗が落ちていた

「…せっかくだし、拾ってくか」

霧夜は村宗を拾うと、ちょっとだけ急いでラカンのところに向かった…

S I D E O U T

アルテミス S I D E

「それはちょっと…いいえ、だいぶヤバイわね…」

アポローン兄様の部下の外見が犬な天使（名前は湾子君）からきた連絡を聞いて頭を痛くした
まさか、こんなことが起きるとは予想外だわ…

「湾子君、悠は動けないのかしら？」

「悠様は今、ネイカ様からの頼みで違う世界に出張してます」

ネイカの頼みの出張って…まさか、他世界の神々のところ！？
こんな時に！？

「仕方ないわね…誰か、悠の代わりに動ける転生者は居ないの？」

「例のペルセイン転生者しか今のところ…」

この世界の天界では、霧夜君を知らない天使や神々は彼をへperlセイン転生者」と呼ぶの（私と天ちゃん、ゼウス爺様とアポローン兄様が今のところ普通に名前で呼んでるわね）

「…悪いけど、霧夜君を呼び寄せるしか無いわね」

「では、早急に」

霧夜君には、本当に悪いわね…けど、必ずなんとかしないといけない…例えばその世界がへ原作に極めて近く、そして限りなく遠い世界」であつたとしても…

SIDE OUT

天使「どうも、天使です。今回からは本編で登場した技等を中心に私が紹介していく『天使ちゃん発表会』が度々あるので、よろしくお願ひします。第1回目の紹介は此方です」

「きがりゅう
鬼牙流」

霧夜が元々ある流儀の技等を自分流にアレンジや改良（もとい改造）した流儀

「千慄桜華ノ舞」
せんりつおうかのまい

正式名称「鬼牙流・斬撃ノ型・千慄桜華ノ舞」

神鳴流の技の1つである百烈桜華斬ひゃくれつおうかざんを鬼牙流に改造した技で、その動きはまるで舞を踊っている様な動きだが、動きの中で千もの斬撃を放っている

「眩忌獲愚璃」
まぶいえり

正式名称「鬼牙流：眩忌獲愚璃」

〈スパロボ〉でペルセイン等が使っていた技を霧夜がアレンジした技で、元の技の名前はマブイエグリ

鬼菩薩を異形のアインストに変化させ、そのアインストが持っている刀で相手を刺して拘束（刺したのと同時に風景がモノクロになり、その間は相手の時間は止まる）

その後、拘束した相手を鬼蓮華で突き刺し、何度も決る

そして、鬼蓮華を引き抜くと血のような飛沫（実際に血かどうかは霧夜が決る時の物による）が迸り、鬼菩薩も相手から引き抜く

鬼菩薩が引き抜いたすぐ後に、モノクロの風景から元の風景に戻り、相手の時間も動き出す

天使「これにて第1回『天使ちゃん発表会』を終わります。ありがとうございました」

【第伍話】イレギュラーとの初戦闘（後書き）

初イレギュラー戦をお送りしました

霧夜「そして村宗拾った」

拾った後は近所の交番へ！

霧夜「村宗なんて持ってったら銃刀法違反で即捕まるわ！！」

天使「霧夜さん落ち着いて下さい」

霧夜「黙れ少女」

天使「私、少女じゃありません！！」

なんでもいい

アルテミス、よろしく

アルテミス「分かったわ。時空の旅人さん、秋代さん、竜華零さん、SILVERさん、感想ありがとうね。特に秋代さんとSILVERさんには指摘ありがとう♪」

天使「えっと…時空の旅人様からへアカムトルム、ウカムルバス、アルバトリオン、アマツマガツチの天災クラスの四頭と、〈漆黒爪〔終焉〕（太刀）、王牙剣〔折雷〕（片手剣）、ウンディーネ（双剣）、セイバートゥース（ランス）、煌銃槍イシユタル（ガンランス）〉の大量の武器をお土産にいただきました」

アルテミス「ちなみに、アカムトルムとアルバトリオンとアマツマ
ガツチは龍属性が、ウカムルバスは火属性が弱点だそうよ」

というわけで、霧夜どうする？

ただし、武器はいただいた5つの中から限定な？

霧夜「んゝゝなら」

霧夜（アインスト化）『ウンディーネ（双剣）✓ヲ両腰ニ差シテ、
右手ニへ漆黒爪「終焉」（太刀）✓、左手ニへ煌銃槍イシユタル（
ガンランス）✓、背中ニへセイバートウース（ランス）✓デヤルカ』

お前、アインスト化に全武器装備ってありなのか？

霧夜『イインジャネ？ ンジャ、俺ハモウ行クカラ』

・霧夜一時退場・

アルテミス「勝敗の結果は次回の後書きにて発表するわ」

では、次回もよろしくお願いします！

【第陸話】神の遣いと…（前書き）

いきなりだけど、バカテスの小説やソード・アート・オンライン（S・A・O）が読みたい

霧夜「黙って執筆をしろ」

ちよつと息抜きに…

霧夜「なんか言ったか？」

ε || ㄗ (・ | ・) ㄥ

霧夜「逃げんなよ!？」

(違う!これは戦略的撤退だ!!)< (□ ;) !!

霧夜「嘘を言うな!!」

天使「皆さんは作者みたいならずに、ちゃんと息抜きをしながら執筆や学業、仕事等を頑張ってください。では、本編スタートです」

【第陸話】神の遣いと…

霧夜SIDE

あの転生者の女性と戦った後、ラカンさんを迎えに行ったら何故かバハムートを手懷けたラカンさんが居た

「いや、なんで手懷けてんの!？」

「なんでだろうな？」

いや、俺に訊かれても…

「とりあえずこいつどうすればいいんだ？」

いや、だから俺に訊かれてもさ…

「とりあえずマテリアに戻します」

「マテリアってなんだ？」

ですよねゝ

さて、俺がなんとかするかな…

〈霧夜奮闘中・・・〉

バハムートのマテリア化に無事成功した……てか

「なんでラカンさんの言うことしか実行してねえんだよ…」

そう、ラカンさんがバハムートに「戻れ」って言ったら、バハムートが自分からマテリア化したんだよ…

「とりあえず、それは一応俺が預かります」

「分かったぜ。ほらよ……受け取れ!!」

マテリアを投球ポーズで投げるな!!

バハムートのマテリアを受け取った俺はラカンさんに口止めを頼み、一緒に村へ帰って来た
すると、アルさんがなにかを抱きながら俺に近づいて来た

「アルさん、なにを抱いてるの？」

「喋る犬です」

…はあ？

遂にアルさん、現実逃避まで始めたのか？

「いえ、正確には〈神の遣い〉と名乗った喋る犬ですがね」

神の遣い？

てか、大型の悪魔じゃないのか？それ

「悪魔ではありませんよ、ペルセイン転生者」

「ほら、ね？」

…ちょっと待てや

「アルさん、ちょっとその犬貸して」

「どうぞ」

俺はアルさんから犬を借りると、犬に訊いた

「お前、何者だよ」

「自分はアポロン様の部下を務めていまして、名前は灣子と申します。今日は貴方へ早急に伝達しなければならなかったのがあったので、伝えに来ました。ペルセイン転生者」

なんでもいいが、ペルセイン転生者ってなんだよ……いや、俺のこ
とって分かるけどさ…

「では、今から天界h「ちょい待ち」なんですか？」

この犬、自分勝手に話進めやがって…

「とりあえず、天界に行くってのは理解したから、ちょい待て」

「…分かりました」

俺は犬を地面に降ろすと、アルさんに訊く

「アルさん、ちょっといいでs「いいですよ」早っ!？」

「話は全て聴きましたからね。ですが、一つだけ約束を……必ず、
戻って来て下さいね？」

「!?!?…はい!!」

俺はアルさんと話終わった後、犬によって天界へ転位した…

S I D E O U T

| | | | |

アルビレオS I D E

キリヤ君が喋る犬と一緒に魔法とは違う何かで目の前から転位しま

した

一体どうやって等色々疑問がありました、恐らくキリヤ君が前に私達に話してくれた話の中に出ていた〈神〉に関連する力での転位だと私は思います

私はあの時、キリヤ君の話をあまり信じていませんでした
なにせ神とか色々出てきましたから
ですが、今なら信じられますね

何故ならキリヤ君は……私達〈紅き翼〉の仲間なんですから

「…行つてらっしゃい、キリヤ君」

さて、ナギ達にキリヤ君のことを話さなければ……

SIDEOUT

霧夜SIDE

「……んでだ、犬」

「湾子です」

灣子でも犬でも別にどうだっていいんだが……何故俺は先程から吊り下げられてるんだよ!?

「アルテミス様の命令ですから」

ア ア ア ア ア ア ア ア ア ル テ ミ ス ウ ウ ウ ウ ウ ウ ウ ウ
ウ ウ ウ ウ ウ ウ ウ ウ ウ ウ !! !

「呼んだ？」

もう神なんか嫌いだ……こんちくしょう（泣）

「…んで、なんの用だよ」

「そんなふてくされた顔しないでよ……とりあえず、まずは用件を話すわね。霧夜君、貴方にはある世界にちょっと介入してもらいたいのよ」

ある世界ってどこだよ……てか、介入してもらいたいってどういうことだよ？

「実はね、その世界には霧夜君の師匠達に深く関わりのある人物がいるんだけどね？」

師匠達に深く関わりのある人物だと？

「だけど、その人物の物語を破壊する為に、ある馬鹿な天使がイレギュラーを何人か介入させたの。まあ、その天使は罰として冥界送りにしたけど」

馬鹿な天使は既に冥界送りって……てか、物語を破壊する為にイレギュラー！？

「そのイレギュラーの人数や特徴とか分かるのか？」

「分かるわよ？ えっと……月姫関連1人と、f a t e関連が3人、F F関連が1人、モンハン関連が5人、スパロボ関連が2人、犬夜

又関連が2人、限定武器関連が2人、ガンダム関連5人の計21人
「いや、20人だ」えっ？」

俺はアルテミスに先程FF関連の転生者と戦ったことを伝えた

「：つまり、残りは20人ってわけね」

「恐らくだな」

アルテミスはなにか考えると、黒いポーチを俺に渡してきた

「なんでポーチ？」

「餞別よ。このポーチは、簡単に言えばf a t eの〈王の財宝〉^{ゲート・オブ・バビロン}の
様な感じの神器なのよ」

要は某青狸のなんでもポケットのポーチバージョンか

「サンキューな」

「ちなみに、中に武器関連は殆どないから。あるのは貴方が得た
武器とか、その他諸々だけだから」

オイ！？

：まあ、いいか

「んじゃ、行ってくる」

俺はイレギュラーと戦う為に世界へ向かった：

…筈だった

「何故吊り下げられたままなんだよ!？」

「実h「おゝ吊り下げられてんな」お疲れ様です」

…ちょっと待て

マジか!？マジなのか!？

「んじゃ、第2回『お師匠様達による説教部屋』を始めるか」

「な、何故なのでしょう？（ガクガク）」

「んなもん、さっきの戦闘で分かってんだろ？」

あの戦闘、見てたんだ…

「まあ、初戦で身体が出来上がる前だから無茶苦茶大甘で見て及第点…：だが、バハムートを召喚された時点でマイナスだな。他にも色々あるが…：要は、総合的にマイナスってわけだ。だから〈説教部屋〉」

「お、お手柔らかにお願いします…」

…貴史師匠」

俺の言葉を聞いて、貴史師匠は…

「だが、断る」

と答えた

その日、天界に1人の少年の叫び声が響いたそうなの…

【第陸話】神の遣いと…（後書き）

霧夜は未だに説教タイム中なので、今回は出ません

天使「霧夜さんも大変ですね」

アルテミス「今回は霧夜君の代わりにこんな人を呼んでみました♪」

ゼクト「紅き翼所属で、キリヤの父親になったフィリウス・ゼクトじゃ」

まさかのゼクトさんと呼んじやった!?

アルテミス「霧夜君を養子にした感想は？」

俺のことは無視か!?! 無視なのか!?! 無視で決まりなんだな!?

ゼクト「何故養子にしたかはあまり話たくないが、養子にして良かったのは確かじゃな。ところでなんじゃが…」

アルテミス「どうしたの？」

ゼスト「あそこでいじけとる作者はなんとかならんかのう？」

アルテミス「そうね…天ちゃん、お願い」

天使「分かりました」

アルテミス「さて…じゃあゼクトさん?これを読んでもらえる?」

ゼスト「うむ、分かった。：秋代さん、十六夜アミナさん、時空の旅人さん、雨季さん、烈火さん、感想ありがとう」

アルテミス「烈火さんは、指摘してくれてありがとう」

ゼスト「それと、なにやらキリヤに贈り物が来とるそうじゃが：」

アルテミス「ああ、時空の旅人さんから送られてきたラオシャンロンね？　だけど、贈り物のラオシャンロン自体が此方に歩いて来るから、次回の後書き辺りに着くらしいわ」

ゼクト「ところで、ラオシャンロンってなんじゃ？」

アルテミス「とりあえず大きな龍よ」

ゼクト「巨大な龍……ヘラス帝国の帝都守護聖獣である龍樹ナーガシャみたいな奴かのう？」

アルテミス「うーん、なんて言えいいかなー……とにかく巨大な龍」

ゼスト「：まあ、いいじゃろ」

そろそろ時間でゝす

ゼスト「復活が早いのう」

天使「弄られるのはもう嫌です：」

天使（幼女）は弄られる存在だからなゝ

天使「だから幼女じゃありません!!」

アルテミス「まあまあ、天ちゃん落ち着いて」

ゼスト「なんじゃかのう……では、次回もよろしく頼んじゃぞ」

アルテミス「それと、前回の後書きで霧夜君がへアカムトルム、ウカムルバス、アルバトリオン、アマツマガツチの天災クラスの四頭と戦った際の勝敗の結果だけど、結果はアカムトルム、ウカムルバス、アルバトリオンは討伐。アマツマガツチだけは霧夜君に懐いたみたいよ」

天使「アマツマガツチは今アポローン様が霧夜さんの代わりに飼っています」

アルテミス「いつかまた後書きで会いそうね…」

天使「ですね…」

【第漆話】 原作に極めて近く……そして、限りなく遠い世界（前書き）

なんと！

お気に入り登録数が20件&PVの累計が10,000アクセスに到達しました！！

霧夜「嬉しいな……こんな駄作品をお気に入りしてくれて」

お前は素直に喜ぶことが出来んのか！？

天使「前置きはここまでにして……では、本編をどうぞ」

【第漆話】 原作に極めて近く……そして、限りなく遠い世界

霧夜SIDE

『お師匠様達による説教部屋 by 貴史師匠編』を受けた次の日：
：俺はイレギュラー退治をする為にアルテミスに転位させてもらい、
師匠達に深く関わりのあるらしい人物の世界にやってきた
やってきたのは良かったんだが：

「なんちゅう密林だよ…」

何故か密林だらけの場所に俺は居た
辺りを見回しても木々しか見当たらないだけと思ってた時期もあり
ましたよ：

「なんで俺は囲まれてるかなー…」

今俺は絶賛動物（っぽい生物）達に囲まれてる状況
しかも面倒なことに：

「触手に捕まった状態だしな…」

手足を触手で縛られてました
そして触手の先には……FFで（おそらく）お馴染みのモ〇ボ〇が
居た

「いくらなんでも、いきなりこれは酷いっしょ…」

俺はその場でアインスト化した後、浮かんでいた鬼菩薩で俺を縛っ

『ウザッテエナ！
——鬼牙流・殲滅ノ型・雷迎枝！！』[illegible]

『チッ、少シ残ツタカ……ナラ、コレデ！——鬼牙流：眩異断血！』

[illegible]

『フウ、ドウニカ全テ片付イタナ…』

俺のことを囲んでいた生物達を全て片付けた俺は、アインスト化を解かずに密林を動いていた

『ニシテモ……チョット消シ過ギタカ？
先程カラ生物ラシイ感じ』

ガ全クシナインダガ……ン？アレハ？』

密林を抜けた先に、なにか建物が見えた
別に建物が見えたのは全く問題が無い
あるとすれば…

『マサカ、コンナ外ニマデ血ノ匂イガスルナンテナ……テカ、普通
ナラコノ血ノ匂イニ反応シテ、逆ニ生物トカガ少ナカラズ集マツテ
来タリスル筈ダガ…』

そう、だいぶ距離があるのにここまで血の匂いがするのがおかしい
んだよ

しかも、血の匂いはあの建物からみたいだしな…
とりあえず、マズいと感じた俺は建物の中に入ることにした…

『酷エナ、コレハ…』

建物に入った俺が目にしたのは真っ赤に染まった廊下、そして……
床に時々落ちているなにかの肉片だった

『コレハ、生き残ッテル奴トカ居ルノカ…？』

その時、肉片の近くにあった通信機から音声が届いてきた

「貴様！ここは管理局の研究S「違法研究してんだろが！知って
んだよ！！」グハッ！？」

「ひ、ひiiiiiiii！？」

「安心しな……てめえもすぐに送ってやるよ！」

グシヤリとなにかが潰れた音がした後、先程から喋っていた男と思われ、る音声が聞こえてきた

「にしても……本当にこんな所に居るのかよ？　〈無限の欲望〉ってのは……」

(無限の欲望……?)

あまり聞いたことの無い単語ではあったが、無茶苦茶嫌な予感がした俺は〈無限の欲望〉を探す為に急いで建物の奥に進んだ：

暫く建物の奥に進んだ俺は一つだけ真っ白な扉を見つけた

俺はとりあえず扉を開けることにした

扉の先には：

「おや？まさか人間ではないのが来るとは……」

紫色の髪の若い男が両手両足を鎖で縛られていた

更に男はとても痩せこけた体をしているから、数日間位この部屋で縛られていたと思う

『アンタ、誰ダヨ?』

「更に喋れるとは……興味深いね」

勝手に興味を持たないで欲しいんだが……

「…ああ、すまない。私の名前はジェイル。ジェイル・スカリエツ
ティだ」

…ちよつと待て、今ジェイル・スカリエツティって名乗ったか!?
あのリリカルな魔法世界にある管理局の最高評議会のメンバーの手
により、アルなんとかって技術によって造られた異能の天才児な人
造生命体で、開発コードネームみたいのがヘアンリミテッド・デザ
イア（無限の欲望）って名前のマッドサイエンティストのジェイ
ル・スカリエツティって名乗ったのか!?
…ってことは、この世界はへりりカルなのは∨の世界なのかよ!
あつ、だからさっきの通信機から管理局って単語が出たのか……完
全に無視してたから忘れてたな（汗）
そういや…

『ナンデ縛ラレテンノ?』

「私のことを知っても何も思わないのかい?」

『知ツタカラッテ、ナンカ問題デモアンノカ?』

俺の言葉を聞いたジェイル・スカリエツティは若干驚いた様な顔を
するが、俺はとりあえずジェイル・スカリエツティを縛っていた鎖
を鬼蓮華で斬っておいた

「（ブツブツブツブツ…）おや、鎖が…」

『黙ッテ斬ツタガ……良カッタカ?』

「別に構わない……いや、むしろ助かったよ」

ジェイル・スカリエッティはそう言いながら俺を観察する様に見てきた

『勝手ニ観察スルノハ別ニ問題無イカラ、サツサトコンナ場所出ヨウゼ。ココニ来ルマデ殆ド血ヤラ肉片シカ見テナイカラ長居シタクナインダガ…』

なんで鎖で縛られてたとかは、もう後でいいからさ…

「血やら肉片しか？ …確かに、そんな状況のこんな場所に長居は無用だね」

ジェイル・スカリエッティがそう言った直後、後ろにあった扉が開き…

「やっと見つけたぞ、無限の欲望！！」

『「ん（ン）？」』

俺が振り返ると、全身青色で、肘から剣が出てて、顔がWな髭っぽい奴が居た

まあ、この全身青色野郎は大体なにか分かるんだが…

「なっ、なんでアインストがいんだよ！？」

『ソノ言葉ハソノママ其方ニ返スゾ、イレギュラー』

俺は一瞬で全身青色野郎の首を鬼蓮華で刎ねる
全身青色野郎は何も出来ずにそのまま死んだ

てか、こいつが俺の好きなゲームのお気に入りの機体を使ってるのが苛つく

「おや、さっくり死んだね」

スカリエッティは思った以上に驚いてないようだし：

『怠イカラサツサトコンナ場所カラ出ヨウゼ』

「そうだね」

俺は全身青色野郎の死体をそのままにして、ジェイル・スカリエッティと一緒に研究所を出ることにした：

S I D E O U T

| | | | |

???
S I D E

私はとある世界の密林地帯にあった謎の研究所の近くで戦っていた相手は全身緑色で、両腕に持つてるガトリングを私に向けて撃ってくるけど、それを私は余裕で避ける……だけど、私からは攻撃が来ないのがさっきから歯痒いわね

「思った以上に粘るな……」

「それはどうも！」

全く、単独でこんな事件を調べてたのがヤバかったのかしらね……

調べておいた資料はデバイス（相棒）に預けてあるから、多分老け顔（もとい私の師匠）が見るわね……こんなだったら、もっとあの子と接していれば良かったかしら？

「ここまでだ」

「っ！？ 設置型のバインド！」

相手は設置型のバインドで私を捕まえた後、私の目の前にガトリングの銃口を突き付ける
その時、私は仲間達の顔を思い出した

（ああ、これが走馬灯って奴ね……師匠、クイント、メガーヌ、相棒……亮一、皆……ごめんね……）

私が目をつぶった直後、ガトリングの音が聞こえてきた……

だけど、一向に私にダメージが来ない
私が目を開くと、私の目の前に巨大な岩がいつの間にかあって、私を銃撃から守ってくれているみたいだった……
すると、ガトリングの音が止み、あの男の声が聞こえてきた

「この岩……なんだ？」

男の声が終わった直後、私の目の前にいつの間にかあった岩が突然動き出した

「な、何!？」

私が驚いていると、目の前の岩の下から頭やら翼やらが出てきて、最後に足を出し、目の前にあった岩は岩を背中に背負っている龍種に姿を変えた

「その姿は…」

『主^{ぬし}から感じるこの感覚は……成る程、我と同じくイレギュラーの様じゃな』

「り、龍種が喋った!？」

喋れる龍種って存在してない筈よね?!
まさか、新種の龍種!?
けど……イレギュラーってどういう…?

『人間、そこから動くなよ?』

龍種は私にそう言うのと、男に向かって行った…
そして、龍種と男がぶつかる直前…

『ナンデイキナリイレギュラーガコンナ多インダヨ、全ク…』

男のガトリングに刀を刺し、龍種の動きを素手で止めた一体の異形

が現れた…

SIDE OUT

霧夜SIDE

『ナンデイキナリイレギュラーガコンナ多インダヨ、全ク…』

なにやら激突な戦闘をしようとしている両腕にガトリング持ちの緑ガンダムと岩に擬態化するのが得意そうな龍の真ん中で動きを止めることにしたのは良かったんだが…

「…?」

『なんじゃ、主もイレギュラーか』

こいつらの対処がなんだか面倒な気が…とりあえず

『オイ、スカリエッティ。悪イガアソコニ立ッテル女性ニ説明ヲ頼ンダ』

「一体何を説明すればいいのかい？」

建物から出てくる最中に俺のことを色々話しておいたから、スカリエッティもイレギュラーについて説明が出来る筈なんだが…

『イレギュラー関連』

「まあ……期待しないでくれよ？ 私とて理解が追い付いていない

のだからな」

スカリエッティはそう言いながらも女性に色々説明を始めてくれた
てか、天才科学者みたいな存在なのに理解が追いついてないって…
まあ、別にいいかな
んじゃ、次はこっちな…

『…ンデ、アンタラモイレギュラー関連ツテコトデOKカ?』

「…ああ」

『間違っておらんよ』

あっさり認めたな…逆に認めなかったら、こいつら斬るつもりだ
ったしな（峰打ちで斬るの、大丈夫なんだろうか?）

『トリアエズ、話ヲシヨウゼ? イレギュラー同士』

『別に構わんよ』

「同意」

へイレギュラー達話し合い中・・・

いきなりだが、話し合いの結論から言うと……龍（姿がバサルモスのイレギュラーとガトリング大好き緑ガンダム野郎は世界を壊すつもりはなく、龍の方はただ平和に生きていきたい……ガンダム野郎の方はこの世界にあまり興味が無いらしい

リリカルなのは

『ンジャ、ナンデオ前ハコノ世界ニ居ンダヨ？』

「それは……俺も知りたい」

なんだろう……こいつらと話し合っていると胃が痛くなる気がするのは……とりあえず2人（正確には1人と一体）で色々話をしてもらってる間に、俺はある事をしてみた

（確か〈念話〉ってのは……《おい、アルテミス》）

そう、リリカル等でお馴染みの念話だ。これで神関連に連絡が取れればイレギュラー達の対処とか色んな意味でこれから楽になる筈だからな

《なによ、念話で話して来ないでよ！ おかげでお昼ご飯の醤油ラ

ーメン落としちゃったじゃないの!!」

いや、知らんし……てか、アルテミスにいきなり怒られたのが理不尽だと思えないのは何故だ…?

《というか、ポーチの中に携帯あったでしょう?! なんて携帯で連絡してこないのよ!!》

無茶苦茶過ぎだし、携帯なんぞ知らんがな…

とりあえず、アルテミスが言ってた携帯をポーチの中に手を入れて探してみた。すると……確かにポーチの中に携帯があった
しかも、俺が前世で使ってた黒と赤の2色のスライド式だった

《なんで俺の携帯がポーチの中に入ってたんだよ……ところでコレ（携帯）で神に連絡とか出来るのか?》

《ただ単に私が気に入ってる携帯がソレだけで、偶々霧夜君の携帯と一緒にあったってわけよ。それと、神様達や色んな人達に電話したいなら、電話帳に入ってるからね?》

電話帳に登録してあるのかよ!?

《まあいい。それより、今から用件を話す》

俺はイレギュラー達について等を話した

《…ってことなんだが》

《成る程ね……なら、とりあえずそのイレギュラー達は此方で回収するわね》

《了承》

俺は念話を切ると、イレギュラー達に言う

『ウチノ神ガ、アンタヲ回収シテクレルソウダ』

「…俺は別に問題ない」

『我は嫌じゃ』

ガンダム野郎はとりあえず了承したとして……龍は何故だ？

『我は数百年前にこの地、この世界に生を受けた。それに、この世界は本来、無人世界。我が静かに生きていくのはこの世界以外嫌なのじゃよ』

龍の言いたいことは把握した

とりあえず、龍の言いたいことをアルテミスに念話で話した
すると…

《別にそれでも構わないわよ。だって、世界を壊すつもりは無いんでしょ？
なら、全く問題無いわ》

《…んじゃ、ガンダム野郎だけを頼んだ》

《分かったわ……醤油ラーメン食べた後でね？》

また醤油ラーメンかよ！？
醤油ラーメン好きな神様ってどうよ…？

まあ、とにかく…

『残り17カ…』

暫くは戻れそうにないな……紅き翼の皆に早く会いたいな

S I D E O U T

| | | | |

天使「どうも、天使です。本日は第2回『天使ちゃん発表会』の間です。今回は霧夜さんの新技の紹介です。それではどうぞ♪」

「らいごうえ
雷迎枝」

正式名称「鬼牙流・殲滅ノ型：雷迎枝」

へスパロボでペルセイン等が使っていた技を霧夜がアレンジした技で、元の技の名前はライゴウエ

本来は体中の鬼面から多数の光線を発射する技だが、霧夜の場合は、鬼墓参から光線や魔力弾等が多数発射する技となっている

「まぶいたち
眩異断血」

正式名称「鬼牙流：眩異断血」

へスパロボでペルセイオン等が使っていた技を霧夜がアレンジした
技で、元の技の名前はマブイタチ

本来の技同様、鬼蓮華オニレンゲを振るい、衝撃波を放つ技
ただし、霧夜の場合は魔力等も鬼蓮華に纏わせて放つことが可能

天使「第2回はここまでです。これから『異形の魂を宿す者』を
よろしく願います。それでは、失礼します」

【第漆話】 原作に極めて近く……そして、限りなく遠い世界（後書き）

さて、今回は新世界&新技ちょこつと登場！
更に、謎のキャラクター登場の回でした！！

霧夜「あの女性誰だよ」

次回分かる

霧夜「ふーん……んじゃ、俺はもう行くからな」

行くって……ああ、前回のラオシャンロンか

霧夜「そういうことだ。行くぞ、猫共」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」
「合点にゃ！」」

むっちゃ猫多い……って、アルテミス？

アルテミス「な〜に？」

お前が抱いてるそれは…

アルテミス「これ？」

「ここでも姉御の時と同じ扱いにゃ！？離してくれにゃいと、仕事
が出来ないにゃ〜！！」

アルテミス「お持ち帰りしてOKよね？ 勿論、反論は認めないわ
！！」

「助けてくれにゃー！！」

マジで猫一匹、お持ち帰りされた：

天使「アルテミス様…」

：まあ、いいや

天使、頼んだ

天使「分かりました。時空の旅人様、faku様、レティウス様、
感想ありがとうございます。faku様に致しましては、指摘あり
がとうございました。それと、申し訳ありませんでした」

アルテミス「あつ、それと霧夜君達とラオシャンロンの結末は次回
をお楽しみにね♪」

では、また次回も

天使「よろしくお願いします♪」

【第捌話】霧夜の微妙な日…？（前書き）

SAOの最新巻を買いたいのにマネーが…

霧夜「頑張れ」

うう…（ん、ん）

霧夜「…んじゃ、本編どうぞ」

【第捌話】霧夜の微妙な日…？

霧夜SIDE

ジェイルを助けてから数日が過ぎ……俺は今、ジェイルの隠れ家にやっかいになってる

それと、ジェイルをスカリエッティと呼ばなくなった理由は…

「霧夜、ちよつといいかい？」

「その気持ち悪い発明品を壊した後なら……な！」

「なっ、酷いじゃないか。私と君は友達の間ではないか」

「いつの間に俺がお前と友達の間になってるんだよ……まあ、別にいいがな」

そう、俺とジェイルがいつの間にか友達の間とやらになっていたからだ

「…にしても、だ」

「ん？ どうしたんだい？」

「何故俺は縛られていて、お前はビデオカメラを持っているのだろうな？」

ジェイルが先程持って来た気持ち悪い発明品（形がイソギンチャクっぽい）を破壊して数秒としか経っていない筈なのだが、俺は先程

の気持ち悪い発明品から伸びていたコード（若干触手っぽい）にいつの間にか縛られていた

「フム、上出来だ。流石、私の作った発明品だ……破壊された後の捕縛機能が正常に作動している様だね」

また発明品か……あつ、そういや1つ思ったことが…

「…俺を縛って、なんか需要なんかあるのか？」

俺がジェイルに聞くと、ジェイルが一瞬驚いた顔をした後、笑顔で俺に言った

「霧夜、君が縛られている画像や写真、動画等はその手の相手に売るとね……私の研究費が面白い程増えるのd…」

ジェイルは喋っている途中でいきなり目の前から姿が消え、代わりにウェーブがかった薄紫の長髪の女性が俺の目の前に立っていた

「霧夜君、大丈夫！？　ドクターになにか変なことされt……霧夜君が縛られてる！？」

「お、俺は大丈夫だから、とりあえず落ち着いて…」

「う、ウーノ…？　何故君がここに…？」

いつの間にか壁に埋まっていたジェイルに訊かれたウェーブがかった薄紫の長髪の女性……ウーノがジェイルを見ると、何処から取り出したバットを持ち…

「ドクター？ いい加減反省という言葉覚えましようね？」

「う、ウーノ、バットはあb…」

「申し訳ありませんが、暫くお待ち下さい・・・」

「ドクター、ちゃんと反省してただけましたね？」

ウーノがジェイルに訊くがそこにジェイルは居らず、代わりに穴の開いている床があった

「…う、ウーノ？」

俺がウーノに恐る恐る声を掛けると、ウーノが俺に近づいて来て、俺を縛っていたコードを外してくれた

「霧夜君？　もう大丈夫ですから……とりあえず、この部屋を出ましょう」

ウーノの言葉に頷くと、俺はウーノと一緒に部屋を後にした……何故かウーノが笑顔で俺を後ろから抱き上げながら…

「おーい、誰か私を助けてくれ」

更に、ジェイルの助けの声のBGMとともに…

部屋を後にした俺はウーノさんと別れ（その時に俺を抱きおろしていた顔が残念そうに見えたのは気のせいかな）、通路を散歩し

ていた

すると、視界の端から誰か出てくるのが見えた

「ん？ドゥーエと雪恵さんじゃねえか」

「あら、霧夜。一体こんなところで何をしているのかしら？」

「どうも♪」

ドゥーエと雪恵さんは俺に気付くと、俺に近づいて来た

雪恵さん……本名は〈伊藤雪恵^{いとうゆきえ}〉。俺がジェイルを助けた時に一緒に助けた女性で、管理局のとある部隊に所属しているらしい。管理局の〈鎌鼬〉という二つ名が犯罪者達には有名らしく、ジェイルが面白そう（実際面白かったんだろうが……）に話していたが、雪恵さん自身がジェイルと上手く話とかが出来てない
ちなみに、一児の母なんだそうだし
……おっと、ちゃんと質問に答えないと

「ジェイルからウーノさんに助けてもらってたな」

「ドクターからウーノ姉様に助けてもらった？ ……ああ、そういうことね」

「またスカリエッティが霧夜君になにかしたのね？ ……全く……」

その後俺はドゥーエと雪恵さんの2人と少し話をし、別れて再び通路を散歩し始めた……

（そろそろ昼か……食堂に向かうか）

俺はそう思うと、食堂に向かって歩き始めた

その途中、何故かウロウロしている灰色のコートを着込んでいる小柄な銀髪の少女を見つけた俺は声を掛けた（今俺のことをロリコンと思った奴……後で学校の屋上に来い）

「チンク、なにウロウロしてんだ？」

「ああ、霧夜か……実は、ドクターを捜しているのだが……霧夜、なにか知らないか？」

小柄な銀髪少女……チンクに訊かれた俺はどう答えればいいかちょっと考えた

（ジェイルは俺の部屋の床に埋まってるなんて、言って大丈夫……だな）

思った以上に早く考えがまとまった（？）霧夜はチンクに答えた
すると、チンクは…

「またドクターは……霧夜、済まなかったな」

頭を下げ俺に謝ってきた

「まあ……別にいいがな」

「本当に済まなかった」

未だに頭を下げて謝ってくるチンクを見て俺は…

「とりあえず……ジエイルを捜しに行くか」

「!? ……あ、ああ」

俺の言葉に一瞬驚いたチンクだったが、すぐに微笑し、一緒にジエイル（穴）の居る部屋に向かった…

SIDE OUT

三人称SIDE

ここは第23管理世界ヘルヴェラ……この世界は文化保護区に指定された世界であり……そして、古き良き暮らしを愛する者達が暮らす地区にして、豊かな自然と過ごせる土地……そんな土地にある静かな街の路地裏に、2人の人物が無言で居た

片方は男物の服装……顔つきからして、性別は恐らく男性……もう片方の服装は服……というより、軽装な鎧の様な服装で、顔つきが男性にも見えるが、女性にも見え、性別は全く分からなかった…

その時、路地裏に1人入って来た

服装からして女性

そして、女性が2人に近づいた後……性別の分からない者が喋り始めた

「集まったな……首尾はどうなってる」

性別の分からない者の言葉に、2人は答えた

「此方の準備は問題無い。後は時を待つだけだ」

「うちも、いつでもOK」

2人の言葉に性別の分からない者は「…そうか」と答えた後、男性と女性にそれぞれ違う物を手渡した

男性に渡されたのは一冊の本、女性に渡されたのは一本の短剣だった
男性は渡された本を読み、女性は渡された短剣を懐にしまった

「では……頼んだぞ」

本を一度閉じた男性と懐をちゃんと確認していた女性は頷いた後、
路地裏から広場へと出ていった

残された性別の分からない者はその場で空を見上げながら呟きながら、一瞬にして姿を消した

その時、奴が呟いていたことは…

「この物語（世界）にもうすぐ永遠の終焉を……そして、この物語（世界）の中心……貴様がこの物語（世界）から永遠に消える手筈は既に、我が台本で決ま^{シナリオ}っているが故……覚悟しておけ…

…〈世界を渡りし月天の騎士〉……いや、〈偽りの騎士〉よ…」

この物語（世界）を終焉に導く始まりの合図だった…

【第捌話】霧夜の微妙な日…？（後書き）

微妙に平和な霧夜の1日をお送りしました！

天使「えっと、今回本編の最後の方に出てきていた世界『第23管理世界ヘルヴェラ』については、『魔法戦記リリカルなのはFolge』の1巻目をご覧ください」

そのまま天使、謝辞を頼んだ（^・^）b

天使「分かりました…：時空の旅人様、竜華零様、レティウス様、感想ありがとうございます」

…とまあ、言いたいことは言い切ったわけだが

天使「まだありますよ？」

なにが？

天使「前回の後書きのアレですよ」

前回の後書き…：ああ、アレ（贈り物のラオシャンロン）か

天使「結果は霧夜さん達猫隊がラオシャンロンに勝ちました」

猫が空から奇襲したのは面白かったなwww

天使「全くです。アレは萌えますが、ラオシャンロンの背中も（猫達の爆弾によって）燃えていたのでちょっと面白かったです♪

それと、今回も時空の旅人様からの贈り物で、ヘリオレイア、リオ
レウス、リオレイア亜種、リオレウス亜種、リオレイア希少種、リ
オレウス希少種」の陸の女王達と空の王者達です！」

現在進行形で霧夜が戦ってる奴等か

天使「作者、その発言は……狙われますよ？」

そんな時はお前を生け贄にするだけだから

天使「酷ッ!？」

では、次回もよろしくお願いします（^^ゞ

【第玖話】約束という名の枷（前書き）

脳内予定より内容の展開が早いのに対し、更新が遅いのは何故…

霧夜「お前がノロマなだけだろ…」

否定はしない

霧夜「ったく……んじゃ、本編スタートってことで」

【第玖話】約束という名の枷

霧夜SIDE

今は朝、時間帯的には朝飯の時間帯だが…

「…なあ、ウーノさんや」

「いつも呼び捨てなのにどうしたのかしら？ 霧夜君」

「何故俺の髪を弄ってるんですか…？」

俺が起きて寝呆けていた時から髪をウーノに弄られているから、いい加減朝飯とか着替えとか色々したいんだが…
すると、部屋の扉が開き…

「霧夜君、スカリエッティが渡したいもn…」

部屋に入って来たのは雪恵さんだった

雪恵さんもだいぶここ（スカリエッティの隠れ家）に慣れてきた所為で、スカリエッティと普通に会話出来たり、ウーノ達を手伝ったり…意外に今の状況を楽しそうにしている

「雪恵さんどうs「動かないで！！」はい…」

雪恵さんにどうかしたのか訊こうとしただけが、何故かウーノさんに動かない様にと怒られた
そこまで俺の髪を弄りたいですか…まあいいか

俺は雪恵さんに念話で話し掛けることにした

《んで、雪恵さん……どうしたんです？》

《えっとね……スカリエッティが貴方に渡したい物があるから呼んで来てって頼まれたの》

《ジェイルが？》

一体俺に渡したい物ってなんだy「よし、出来たわ」何が出来たんだよ…

「ウーノ…」

雪恵さんが俺を見た後ウーノを見る
そして…

「GJ!!」

ウーノに向かって言った

(…てか、何がGJなんだよ)

俺はそう思いながら近くにあった鏡を覗くと…

(何で俺はポニーテールになってんだよ…)

何故か俺の髪型がポニーテールになっていた
とりあえず…

(さつさとジェイルのそこ行くか…)

「―という感じで、俺はポニーテールの髪型にされたんだが…」

「うむ、服装と器用にマッチしている…：ウーノ、君は何を目指しているのか非常に気になっていたよ…」

ジェイルの部屋に着いた後、ジェイルに何故ポニーテールになっているのかを説明(もとい愚痴ってた)をすると、ジェイルは呆れる様に俺の話を聞いてくれた

「そういや、俺に渡したい物って？」

俺が訊くと、ジェイルが白衣のポケットから赤…：というより、紅色に近い赤色のイヤリングと、狼の顔のマークの付いたカードを出してきた

「イヤリングの方の名が〈神夜^{かぐや}〉、カードの方の名が〈ベーオウルフ〉…：私が君に作ったデバイスだ」

「デバイス…」

ジェイルは俺にイヤリング型とカード型のデバイス…：神夜とベーオウルフを渡して来た

俺は2つに触れようとするが、その直前で手を引っ込めた

「どうしたんだい？」

「…受け取れねえ」

俺はジェイルにそう言うと、部屋を出ていった…

俺がジェイルから受け取れない理由…それは、俺が前世で契った約束が故に…約束を果たせなかった俺が、受け取るべきではないから…

S I D E O U T

?? ? S I D E

ここにあの子が居る…うちが枷を与えてしまったあの子が…

うちは手元にある一本の短剣の柄を握る

〈アイツ〉が言う事が本当なら、この短剣であの子から枷を外すことが…

「貴方の枷は、うち自身が必ず解き放つてみせる…だから…」

其処で待っててね…

…うちの可愛い霧夜

SIDE OUT

霧夜SIDE

ジェイルの部屋を出ていった後、俺は隠れ家の近くにある泉の縁に居た隣には：

「良い風が吹く場所だな…」

…何故かチンクが居るとりあえず俺はチンクの言葉に「ああ」と答えた後、芝生の上に寝転がったチンクの言う通り、いい風が吹いている……まるで、今の俺を慰めている様に…

「……………」

「……………」

俺もチンクも一言も全く喋らず、時間と風が俺の周りを過ぎていく…

「……………霧夜」

「…なんだ」

「…お前は一体、何を抱えているんだ？」

チンクは俺の目を見ながら、ジェイルの作ったデバイスのことを訊かずに、何故か俺が何かを抱えていることを前提に訊いてきた

「お前のことはドクターが教えてくれた……お前がドクターをあの研究所から助けてくれたことや、転生者という存在ということ、この世界のイレギュラーについて色々な……だからな……その、だな……」

「……?」

いきなりチンクの声が段々小さくなっていく……ところでチンクは、俺になにを言いたいんだ……?

とりあえず俺はチンクを落ち着かせる為に声を掛けようとしたが、それはある声によって遮られた……

「あらあら、そんなに可愛いお嬢ちゃんを困らせるなんて……霧夜もまだまだ駄目ね」

俺は急いで起き上がり、声のした場所……泉の反対岸を見た
そこには本来この世界に存在しない存在であり……

「なんであんたがこの世界に居るんだ……」

……椿姉つばき!!」

……前世で俺が12歳の頃に、とある事件に巻き込まれて亡くなった
俺の実の姉……遠坂椿が微笑みながら立っていた……

【第玖話】約束という名の枷（後書き）

まさかの霧夜の姉が本編&後書き登場！

椿「皆さんこんばんは（？）、霧夜の姉……遠坂椿です」

さて、今回から椿氏には後書きに度々来ていただきたいのですが…

椿「うちは別に構わないけど……霧夜とは、ね？」

勿論了解……んじゃ、椿氏よろしく

椿「ええ。レティウスさんと時空の旅人さん、感想ありがとうございます
いました。これからもこの作品をよろしく願いますね」

では、また次回もよろしく願います！

【第拾話】 俺（うち）と椿姉（霧夜）（前書き）

思った以上に展開が：

天使「作者が何か言ってますが、本編をどうぞ」

【第拾話】俺（うち）と椿姉（霧夜）

霧夜SIDE

「なんであんたがこの世界に居るんだ……椿姉!!」

俺は泉の反対岸で微笑みながら立っている椿姉に向かって叫んだ
椿姉は俺が12歳（前世の年齢）の頃に、とある事件に巻き込まれて亡くなった俺の実の姉で……この世界に本来存在しない存在……
そして、俺が約束を交わした（果たせなかったが……）人、本人でもある

俺の声を聞いた（と思われる）椿姉は微笑みを浮かべたまま後ろの空間から、一振りの刀を出し、その直後、謎の化け物が姿を見せた
椿姉は化け物の頭を撫でた後、化け物の背中に乗り、此方に向かって来た

俺は驚きながらも急いでチンクを抱き締め、すぐに横へ飛び退いた

「チンク！大丈夫か!!」

「私は平気だ」

チンクが大丈夫か確認した後、俺は落ち着いて椿姉について、思考をフル回転し始めた……

―死んだ筈の椿姉が何故生きているのか

―何故椿姉がこの世界に入るのか

―椿姉の後ろの空間は一体なんなのか

―椿姉の持つ刀はなんなのか

―椿姉があのだを出した後に現れた化け物はなんなのか

俺がフル回転させた思考が行き着いたのは、最も簡単な答えであり……最も残酷な答えだった

その答えこそ…

「転生者…」

俺は呟きながらも、その答えによって繋がっていく疑問が、恨めしかった……全ての疑問は、転生者で結び着いたのだから…

―死んだ筈の椿姉が何故生きているのか……転生者として転生したから

―何故椿姉がこの世界に入るのか……転生先だから

―椿姉の後ろの空間は一体なんなのか……〈f a t e〉に出てくるギルガメッシュの持つ宝具〈^{ゲート・オブ・バビロン}王の財宝〉の能力を転生者として得たから

―椿姉の持つ刀はなんなのか……〈喰霊〉というアニメやマンガに出てきていた日本刀で、名前は〈^{ししおう}獅子王〉。恐らく王の財宝と同様、能力として得たか……それとも、別の方法で得たか…

―椿姉があのだを出した後に現れた化け物はなんなのか……獅子王に宿る霊獣で、種族(?)は^{ぬえ}鵜。名前はアニメで出ていたが、覚えてない

すると、俺の呟きが聞こえたのか……椿姉が鵜の上から俺を見て言った

「そう、うちはやりたいことがあったから転生者になった……ある条件の代わりにね……」

「ある条件……」

椿姉の言った〈ある条件〉がもし俺の考えていることと同じなら……本当に最悪の展開が起きるな

「チンク、お前は隠れ家に急いで逃げろ」

「なっ!?! 何故だ!?!」

「椿姉は……あの人は、お前じゃ全く相手にならないし、お前はまだ〈スティングー〉が出来ていない」

「っ!?!」

〈スティングー〉は、チンクの投げナイフ型の固有武装なんだが、未だ完成していない
チンクは俺の言葉で悔しそうな顔をした

「……ただし、約束しろ……必ず、私達の所に帰って来い」

「分かった」

俺が答えると、チンクは隠れ家のある方へ走って行った

俺はチンクの姿が見えなくなった後、椿姉を見る

「条件ってのは……この世界（物語）を破壊するってことか？」

「ええ」

即答かよ…

俺は鬼蓮華を出すと、抜刀の構えをとった

「そんな物騒な物で構えたら駄目よ、霧夜」

「椿姉が言えることじゃないよな！？」

生前の椿姉は……ある意味天然だったから、いつも俺や妹が苦勞してたな…

「ん？…ああ、確かにね。なら、ありがとう。もう戻ってくれるかな？…〈乱紅蓮〉」

椿姉の言葉に鵠は頷いた後、段々姿が消えていき…

「なら、これでいいわね？」

椿姉自身も、王の財宝に獅子王をしまった

だが俺は、鬼蓮華を構えたまま動かなかった

「全く、そんなに気張らなくてもいいのに……霧夜、今日は私が転生者になってまでしたかったことをしに来ただけなの？」

「椿姉が転生者になってまでしたかったこと……？」

俺は椿姉の言葉を聞いて、少しだけ気が抜けた
俺から気が抜けたのを見た椿姉は頷いた後、一歩ずつ俺へと歩み寄
って来て…

「なっ!?!」

俺を優しく抱きしめた

「つつ、つばきn「霧夜……ごめんね」なっ、なんで泣いてんだよ、
椿姉…」

椿姉は両手で俺を優しく抱きしめながら……泣いていた

「うちが死ぬ前に霧夜と約束した事……覚えてる?」

椿姉の言葉に俺が頷くと、椿姉は俺の頭を撫で始めながら言葉を続
けて言った

「あの時、うちは『約束は必ず守り、果たす事』って言ったよね?」

「だけど……俺はその約束を果たせなかった。そのせいで、椿姉は
…「それは違うよ」えっ…?」

違うって、一体何が…?

「霧夜はあの時、ちゃんと約束を果たしてた。約束を果たしてなか
ったのは……うちの方なんだよ」

あの時って……椿姉が亡くなった日で、俺が約束を果たせなかった

日のことだよな…？
あの日は、椿姉と…

【第拾話】 俺（うち）と椿姉（霧夜）（後書き）

いきなりだが、新しく二次創作の小説を書くことにしも…グハッ!?

霧夜「よし、逝ったな」

アルテミス「南無」

後は……たの……む…

天使「仕方ないですね……では、作者が言っていた新しく書く二次創作についてですが、初投稿は9月の初め頃を予定しているらしいです」

アルテミス「なんで、無謀なことをしたがるんだろうね？」

霧夜「知るか」

アルテミス「…ちなみに、本編の次回の更新は今月中よ」

天使「えっと……時空の旅人様、秋代様、レティウス様、雨季様、竜華零様、感想ありがとうございます」

霧夜「それと、お土産に色々モンスターが送られて来ていたが……全てアルテミスが保護（というより、ペット？）したからな」

アルテミス「では、また次回もよろしくね♪」

霧夜「んじゃ」

(※新小説は申し訳ありませんが、個人的な理由にて中止しました)

【第拾巻話】 Fate Day (前書き)

上手く書けたか心配な本話ですが…

椿「それでは、本編をどうぞ」

【第拾巻話】 Fate Day

チウンチウンと鳥の鳴き声が聞こえてきた朝方、とある民家の部屋……その部屋には何故か、一組の青年と女性が布団で眠っていた。すると、布団で眠っていた青年が目を擦りながら目を覚まし、隣で眠っている女性を見た

「またかよ……」

青年はそう言った後に布団から出ると、着替え始めた

青年が着替え終わった時、青年と女性が寝ていた部屋の扉が開き、1人の少女が部屋に入ってきた

「お兄ちゃん、おっはー……」

「^{かえで}楓、おっはーって古くないか……？ とりあえず、おはよーさん」

青年は少女……楓に答えた後、楓の横を通って部屋を出て行こうとした

すると、楓が未だに寝ている女性を見て……

「……お兄ちゃん。椿お姉ちゃん、またなの？」

と訊いてきた

青年は未だに布団で幸せそうに寝ている自身の姉、椿を見て「ああ」と答え、部屋を出て行った……

青年が部屋を出た後に向かったのはリビング
リビングでは楓より一回り大きい少女が居た

「もみじ 梶、おはよーさん」

青年が少女……梶に挨拶すると、梶は青年に気付いた

「あつ、兄ちゃん。椿姉さん知らない？ 朝から姿見てないんだけど……」

「椿姉は俺の部屋で寝とる」

青年の言葉を聞いた梶は「またなんだ……」と言った後、溜息をついた

「溜息つきたいのは俺の方なんだが……」

青年はそう呟いた後、梶の隣に置いてある一冊の本を見た

（その本を朝っぱらからリビングに持ち込むなよ……）

梶の隣に置いてあった本は、俗に言う剣術の本で、梶は中学2年で
剣道部に所属しているのだ

その本を見た青年は再び溜息をつきながら、台所へ向かった
理由は、青年が今から4人分の朝食を作るからだ……

（今日の朝飯のおかずは……目玉焼きとウインナーでいいか）

「梶、椿姉達を起こしに行つて来てくれ」

青年は出来上がった朝食を机に並べながら言った

「別にいいけど…椿姉さん達って?」

「俺が部屋出て来る時に楓が部屋に入って来た」

椿は「成る程」と言い、リビングを出て行った
暫くして、椿と楓、そして先程まで青年の布団で寝ていた椿がリビングに入って来た

「楓、椿姉、朝飯出来てるぞ」

「ありがとー」

「んー…」

そして、4人が机を囲んで座り…

「「いただきます」」

「んー…」

青年の作った朝食を食べ始めた…これが、いつもの〈遠坂家〉の始まり…

朝食を食べ終わった4人はそれぞれ独自に行動を開始した

椿は自室…ではなく、青年の部屋で二度寝を…

椿は庭で木刀を使い、剣道の素振りを…

楓は台所で食器洗いを…

青年は…

「毎度思うのだが……何故俺が…」

…洗濯していた

青年はブーツブーツと言いながら洗濯機から洗濯物を出し、ハンガー等に洗濯物を掛け、洗濯物に洗濯バサミを付けていく…

その時青年は、ある洗濯物にを見て、手が止まった

「また椿姉かよ…」

青年が目にしたのは女性物の下着であった

青年は本日3度目の溜息をついた

遠坂家には、青年1人と椿、椋、楓の3人の女性の計4人が住んでいる

そして、洗濯物は青年と女性3人で別々に洗濯するという家族内で決めている決まりがあった

その時に、この決まりを作ったのが…

「確か、俺と椿姉だった筈なんだが…？」

青年は自ら作った決まりを自ら無視している姉に再び溜息をついた…

――昼頃

皆で昼食を食べた後、青年は近所のショッピングセンターに来て、買い物をしていた

「これとこれで……後は、これと…」「あれ、霧夜。なんで居るの?」
ん? 椿姉か……どうした?」

かし、追加の買い物を済ませた霧夜は、椿を待たせた場所に向かったが……椿は何処にも居なかった……

更にその日は、椿が遠坂家に帰って来なかった……

| | | | | | |

椿が遠坂家に帰って来なかった次の日……

『遠坂椿の死体が廃工場で見つかった』と警察から電話が掛かってきた…

【第拾巻話】 Fate Day（後書き）

夜風が涼しい…

霧夜「現実逃避するな」

いや、だってさ…

アルテミス「まずは謝辞からね。時空の旅人さん、十六夜アミナさん、竜華零さん、レティウスさん、感想ありがとうね」

霧夜「時空の旅人さんからまたお土産で、時空の旅人さんの執筆してる作品の主人公の神威が特別編の時になっていた黒レウスなんだから…」

天使「黒さんはいい子ですね」

黒レウス「ギャア♪」

霧夜「…何故幼女に懐いているんだ？」

さあ？

アルテミス「んじゃ、次回もよろしくね」

【第拾弐話】明かされた事実／解き放たれた枷（前書き）

今話から“――SIDE”を無くしてみようと思います

霧夜「上手く書けてるか不安極まりないがな…」

それでは、本編をどうぞ

【第拾弐話】明かされた事実／解き放たれた枷

泉からの風を受けながら、霧夜は自身の姉……椿から少し離れた状態で、遠坂家に起きた〈運命（悲劇）の日〉を話し終えた

話し終えた霧夜の複雑そうな顔を見た椿は、少し時間が経ってから話し始めた……あの日（運命の日）、自身の身に一体何が起きたのかを…

「あの日、霧夜が追加で買い物に行ってすぐ後……うち、誘拐されたの」

「誘……拐……？」

「相手はうちのクラスメイトで……ほら、覚えてる？ あの前はまろ
院の娘さん」

椿の言葉に、霧夜は聞いたことの名を思い出した

（〈浜呂院〉って……前世で、ちょっと有名な財閥の名前だな）

霧夜は〈浜呂院〉について思い出した時、〈浜呂院〉について、もう一つ思い出した

前世で、椿のクラスメイトにも浜呂院の姓を持つ女性が居たことを…

「正確には、あの人の秘書と、その部下の人達数人が黒幕だったんだけど…」

椿の言った言葉は、自身を誘拐した者達を暴露したのも同然だった霧夜は、椿の暴露した誘拐犯の正体を知った後、右手を拳にし、心

の奥から沸き上がってくる怒りを我慢した
しかし、霧夜の怒りは一瞬だけ消えた

「それでね、うちは誘拐された後…

…犯されたの」

椿の一言によって…

(……は?)

霧夜は椿が何を言っているのが理解出来なかった……否、頭が理解は出来ているのに対し、心が認めようとしなかった
だが椿は、最後に言った

「沢山やられて、絶望の淵にまで堕ちた私は……そのまま殺された」
淡々と話した椿を見て、霧夜は哑然とした

「これが、あの日起きた……事実よ」

椿は話し終えた後、霧夜に向かって言葉を掛けようとした

[illegible]

しかし、霧夜は我を忘れたかの様に、地面を殴った……

「――椿姉の理不尽な死から救われなかったあの頃の俺が恨めしい……」

—あの頃の俺の弱さが憎らしい……

―椿姉が転生者になってまで、俺との約束に決着を着ける事態になったことが悔やしい…）

霧夜は生前の自身の腑甲斐なさや、椿に起きた真実に対し、怒り狂ったかの様に何度も何度も地面を殴り続けた……

そして霧夜は……自分という弱い存在に嘆いた

そんな霧夜を、椿は悔やむ様に見つつ、懷から一本の短剣を取り出した

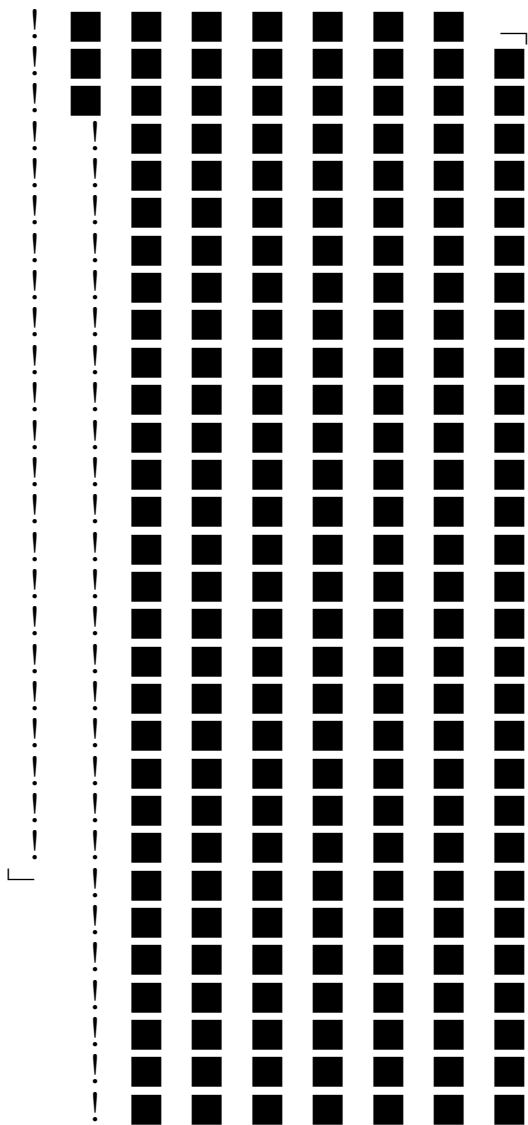
（この短剣が、母さんが亡くなる直前に言っていた霧夜の中に眠っている枷を……霧夜を救った〈異形〉を、霧夜から取り除くことが出来る……）

椿は何か覚悟を決めた様に頷いた後、一瞬で霧夜の背に回り、そして……

「ごめんね……霧夜」

霧夜に呟きの様な声で謝りながら……短剣を霧夜の背に突き刺した

その直後…



霧夜が声にならない様な叫び声を上げた

それを聞いた椿は、一瞬だけ顔を歪めたが、すぐに表情を戻し、
「王の財宝」から2本の刀を取り出す

取り出した2本の内、右手に持ったのは、一度しまった「獅子王」
……左手に持ったのは、この世界に居た転生者から倒して手に入れ
た刀……「爆碎牙」
ばくさいが

椿は2本を持ち、霧夜の背中に突き刺した短剣を睨む

暫くして、霧夜の背中から血の様に紅っぽい霧が出てきて、霧は段々形を作り始めた

そして椿の目の前には、自ら形を作った霧ではなく……紅い色の着物を着た、1人の女性が立っていた

「この姿になるのは、何年振りかな……」

女性は自らの姿を見て、懐かしんでいた

椿は女性に訊く

「貴方が母さんの言ってた……霧夜を救った〈異形〉で、合ってるかな？」

椿に訊かれた女性は目の前に居る椿を見る

「霧夜を救った〈異形〉？ ……成程、お前は桜さくらの娘か」

女性は椿の質問に対し、自己完結する

そして、女性は足下で倒れている霧夜を見た

（霧夜、か……久しい名前を聞いたな。まさか、こうして桜の息子を……私の半身となった者を見る時が来るとはね……）

女性が過去の出来事に耽っていると、椿が女性に言う

「霧夜を救ってくれた貴方には悪いけど……貴方を倒させてもらおうわ」

「私を倒す？ 倒せるものなら……やってみなさい」

突然女性の周りを先程の紅い霧が包み込み……霧が消えた後、女性の居た場所には〈人格〉の名の異形が……へperlゼイン・リヒカイト〈が、そこに居た…

【第拾弐話】明かされた事実／解き放たれた枷（後書き）

眠い…

アルテミス「私も…zzz」

天使「アルテミス様!？」

霧夜「面倒な…」

というわけで、後は頼んどzzz

天使「寝るの早っ!？」

霧夜「…まあ、いいか。十六夜アミナさん、時空の旅人さん、レテ
ィウスさん、竜華零さん、凹凸さん、感想ありがとうございます。
凹凸さんには、アドバイスもありがとうございます」

天使「レティウス様には、〈護りの小太刀〉という小太刀をいただき
きました。霧夜さん、色どうします?」

霧夜「黒」

天使「分かりました。それと、〈護りの小太刀〉も本編で出す可能
性があることをご了承下さい」

霧夜「んじゃ、次回もよろしく」

天使「お願いします♪」

【第拾参話】前哨戦（前書き）

微妙な内容な気が：

アルテミス「それじゃあ、本編どうぞ」

霧夜「あつ、後書きでちょっとしたお知らせみたいなのもあるから」

【第拾参話】前哨戦

泉の風が吹く中……椿は右手に〈獅子王〉を、左手に〈爆碎牙〉を持ち、ペルセインは右手に〈鬼蓮華〉を持って構えていた

そして、泉に若い青葉がユラリユラリと落ちて来て、泉の水面に落ち、水面に波紋が広がる

水面の波紋が椿とペルセインの居る縁にまで届いたのと同時に、2人（正確には1人と一体）の距離は縮まり、互いの得物がぶつかり、火花が散った：

「はあ！！」

『ンッ！！』

椿の獅子王とペルセインの鬼蓮華が高速に火花を散らしながらぶつかり合う中、椿は爆碎牙をペルセインの体へと振るった

しかし、爆碎牙はペルセインの体ではなく、ペルセインの左肩に浮いていた鬼菩薩を斬った

爆碎牙に斬られた鬼菩薩はその場で爆発を起こし、椿とペルセインは一度離れ、互いに距離を置いた

（爆碎牙の爆発は、正直に言えばうち自身にも被害が出る。それに、獅子王をしまったら、乱紅蓮が消え、霧夜が……それなら！）

椿は爆碎牙を王の財宝にしまうと、霧夜の近くの地面に獅子王を突き刺す

そして、王の財宝から新たに一振りの刀を取り出し、構えた

そして椿は、構えたままペルセインに近づき、刀を振るった
ペルセインは椿の新たに取り出した刀に注意しながらも、鬼蓮華で
流した

しかし、椿の持つ刀は切先からいきなり火薬の匂いと同時にガスを
噴出し、刀が素早く切り返してきた

『ナッ！？』

ペルセインは慌てて回避しようとするが、椿の刀から再びの火薬の
匂いがし、それと同時に、切先から二度目のガスが噴出し、先程と
同じ様に、素早い切り返しをしてきた為、右肩に浮いていた鬼菩薩
が斬られてしまった

（まさか、鬼菩薩を斬られるなんてね……それ程の力を持った刀っ
てこと？）

ペルセインはそう思いながら、自身の後ろの方に転移した
転移は、アインスト特有の能力ちからの一つで、本来は使った後も問題な
く活動出来る筈なのだが、ペルセインは何故か動かなかった…

（この距離の転移だけでこのざま、か……やっぱり、〈半身〉程度
じゃ仕方ないか…）

…否、動けなかった

ペルセインは転移で距離を置いた椿を見ながら、とある構えをとり
始めた…

ペルセインが転移した時、鬼菩薩を斬った直後の椿は少し肩で呼吸
していた

「やっぱ、これキツイね…」

椿は持っている刀を見ながら愚痴る様に言った

椿が今持っている刀は〈舞蹴拾参號^{まいけるじゅうさんごう}〉と名前で、本来は退魔刀と呼ばれる刀の一種だ

椿は一度大きく深呼吸をすると、王の財宝から〈ある物〉を取り出し、左手に付けた

理由は、先程転移したペルセインが何やら鬼蓮華を構え始めた為だ（これを使うんだったら……せっかくだし、あの（恐らく）有名な台詞言っておこうかな？）

椿はそう思うと、舞蹴拾参號を逆手に持ち返え、〈ある物〉を付けた左手を構えた
そして…

「〈ドリル〉は男のロマン……うちは女だけど」

ちょっとテンションが上がった感じの椿の言葉とともに、椿が左手に付けていた〈ある物〉……〈アタッチメントドリル（以後、ドリル）〉が回転し始めた…

椿のドリルが回転し始めた直後、ペルセインが先に動き出した

『…マブイタチ！』

鬼蓮華を振って、衝撃波を椿に放ってくるが、椿は回転しているドリルを衝撃波にぶつけた

「残念だけど……毎分6000回転のドリルの破壊力は伊達じゃないのよ!」

衝撃波を破壊した椿は、ペルセインに向かって一直線に走り始めた

『クッ……ソレナラ!』

ペルセインの胸部にいきなり黄色い光が集まり始め……

『……ハーデス・ウェイ!!』

集まった光は、向かって来る椿に向けて撃たれた

椿は走りながら左手のドリルを光に向けてぶつける

光とぶつかるドリルだったが、段々押されてきた

「(それだったら……) 撃ち抜く! 止めてみる!!」

椿の言葉と同時に、ドリルの部分から火薬の匂いがしてきて、その

直後にドリルの部分が噴出し、光を押し返し始めた

ドリルが噴出し、光を押し返し始めたのを見たペルセインは鬼蓮華を急いで構えた

そして……

『(あまり使いたくなかったんだけど……) ……千慄桜華ノ舞!!』

ペルセインは霧夜が使っていた技を椿に向けて放ってきた

霧夜の技だと知らない椿は、無数に飛んでくる斬撃を見て、左手のドリルの残った部分を左手から外し、上に投げるのと同時に再び爆砕牙を王の財宝から取り出し、落ちてきたドリルの残った部分を爆

砕牙で一瞬にして斬った

爆砕牙の効果により、二度目の爆発が起きる

椿は爆発が起こした後、急いで爆砕牙を王の財宝に戻し、地面に舞蹴拾参號を突き刺した後、一瞬の内に泉の中へ潜った

ペルセインは何かが泉に落ちた音を聞くと、泉から少し離れ、それと同時に再び胸部に光が集まり始め：

『コレデ終ワリ……ハーデス・ウェイ！！』

泉に向けて光を放った

しかし、ペルセインの放った光は、何かに吸われる様に消えた（・・・）

そして、ペルセインの視線の先には：

「流石にちょっとだけ危なかった……かな？」

右手に槍を持って、左手を前に突き出した椿が、泉の浅瀬に立っていた：

「流石にちょっとだけ危なかった……かな？」

椿は右手に槍を持ち、左手を前に突き出した状態で、泉の浅瀬に立っていた

（：けど、まさか出来ると思ってなかったな）

椿が右手に持っている槍は〈万寺巢^{バンデラス}〉という槍なのだが、とある原作でこの槍を持っていたキャラクターの持つ元々の能力：〈靈力を

喰らい、浄化し、力に変える」という能力を所持している
しかし、椿の場合は、椿本人ではなく、所持している万寺巢にへ相
手の力を喰らい、浄化し、力に変える」という能力として、何故か
に使えるのだった

「さてっと…」

椿は万寺巢を構え直し、一度息を吐く
そして…

「前哨戦はここまで。こっからが………本当の戦い！」

椿は万寺巢を構えた状態で、ペルセインに向かって走り始めた…

【第拾参話】前哨戦（後書き）

まずは謝辞を

椿「時空の旅人さん、竜華零さん、レティウスさん、感想ありがとうございました」

んで、お知らせです

椿「えつとですね……作者が、うちと異形との戦闘から1，2話後に、コラボを考えてるっぽいんです」

それで、良かったらコラボしても大丈夫という方は、コラボさせて下さい！

椿「ちなみに、今回のコラボ募集の理由は……なんでしたっけ？」

理由は、ユニークが5，000人&お気に入り登録数が30件突破したからです！

椿「だそうですから、これからもよろしく願います」

【第拾肆話】序章終幕（前書き）

遅くなって、すみませんでした!!

霧夜「とりあえず……本編スタートな」

【第拾肆話】序章終幕

椿とペルセインの戦いは、先程までの戦い（前哨戦）と比べてはならない程、格段に上がっていた

椿が万寺巢（槍）で突きを放てば、地面の表面に生い茂っている芝生が剥がれる様に吹き飛び…

ペルセイ人が鬼蓮華（刀）を振るえば、周りの木々が砕け、空気を裂く様な斬撃を放ち…

1人と一体の辺りは既に、戦場の跡地と化していた…

椿は一瞬でペルセイ人に近づき…

「せいやッ!!」

万寺巢を払う様に斬るが、ペルセイ人は紙一重に避けるのと同時に、鬼蓮華で椿の顔に突きを放つ

「ッ!!」

椿は自身の目の前に迫る鬼蓮華を、頭を斜め後ろに傾けることで回避しようとする…しかし、タイミングが悪かった所為か、鬼蓮華の刃が椿の頬を微かに擦り、椿の頬から、少量の血が流れた

椿はペルセイ人と距離を置く為、一度後ろに跳んだ後、自身の頬を袖で拭った

そして、距離を置いたペルセイ人に向かって万寺巢を突き出すよう

に構え：

「―穿て！万寺巢！！」

まるで白と黒の、二色の巨大な槍が交わったの様な形の砲撃を、万寺巢の刃先から放った

椿が万寺巢から放った砲撃は、先程（前哨戦の時）、ペルセインの技であるハーデス・ウェイをへ相手の力を喰らい、浄化し、力に変える能力で、自身の力に変え、椿はその力を砲撃として放ったのだった

『ッ！！』

ペルセインは椿の放った砲撃を回避しようとするが、ペルセインの回避より、若干砲撃の速度の方が速かった故に：

『クッ！？』

ペルセインの左腕が全て、砲撃に巻き込まれ、そのまま消し飛んだペルセインはすぐに自身の左腕を再生させようとするが：

「させないわよっ！！」

『グッ！？』

椿がいつの間にか万寺巢を構えた状態で、ペルセインに突っ込んで来ていた

ペルセインは迫りくる椿に対し、左腕の再生を一旦諦め、鬼蓮華で応戦した

そして、椿の万寺巢と、ペルセインの鬼蓮華の間合いでは、見えな

い程の斬り合いが起きていた…

しかし、そんな斬り合い……そして、この戦いも、突如終わりを迎えた…

「ッ!!」

『ナッ!?』

文字通り、イレギュラーによって…

椿は自身の身にいきなり襲い掛かってきた衝撃を受けながらも、ゆっくりと自身の左腕を見た

そこには……一本の矢が突き刺さっていた

椿は後ろを振り返ろうとするが、何故か体が言う事を利かず、その場で膝を着いてしまう

（体が自分の思い通りに動かない……この矢、まさか猛毒が?）

椿は自身の身に起きている状況の把握をするが、それと同時に、内心苦笑した

(…うち自身、呆れたものね。こんなにも冷静に状況把握出来るなんて、ね)

そして、段々と自身の意識が失われ始めた
そして、樁の意識が途切れる直前に、樁は聞いてしまった……

[illegible]

自身の弟が……霧夜が、自分の名前を叫んだのを……

霧夜が目を覚ますと、隣には、先程まで自身の姉……椿と共に居た筈の靈獸（乱紅蓮）が居た

（なんで、椿姉の乱紅蓮が俺の隣に…？）

霧夜は、ゆっくりと体を起こした後、辺りを見回す

すると、自分の倒れていたのは泉から近い場所で、近くには、乱紅蓮の宿っている刀（獅子王）が地面に突き刺さっていた

（…そういや）

気絶した直前に、なにか背中に刺されたような痛みがしたことを思い出した霧夜は、思わず自分の背中に手を回す

しかし、なにも刺さっていなかったことに、疑問を抱いた

（あの痛みはいったいなんだったんだ？ それに、あの痛みの直後に、奥底からなにか出てくるような感じがしたような…）

霧夜が色々と考えていた時だった

突然、何処からか爆発音に似た音が聞こえてきた直後、空から幾つもの水滴が落ちてきた

「冷たっ…：…てか、さっきの音って…！？」

なにやら嫌な予感がした霧夜は、鬼蓮華を出そうとするが…

「鬼蓮華が出て来ない…」

鬼蓮華が出て来ないことに、更に嫌な予感がした霧夜は、咄嗟に獅子王の柄を掴んだ

—グウルルル—

いきなり獅子王（自身の宿っている刀）を掴んだせいだろう、乱紅蓮が唸り声を上げてきた

霧夜は柄を一旦離した後、乱紅蓮を見る
そして：

「乱紅蓮、頼む……俺に、力を貸してくれ！」

霧夜は乱紅蓮に頭を下げた

すると、乱紅蓮は：

霧夜は、自身の頭に何かが当たっているのに気付くと、ゆっくりと頭を上げた

頭を上げて見たのは、乱紅蓮の顔で、乱紅蓮は霧夜に頭を擦り寄っていた

乱紅蓮の行動に気付いた霧夜は、乱紅蓮の頭に恐る恐る触れた
しかし、乱紅蓮はなにもせず、まるで霧夜に触れられたいかなかった

「乱紅蓮……ありがとう」

霧夜は乱紅蓮に礼を言うと、獅子王を地面から引き抜き、獅子王を持った状態で泉の方……椿の居る場所へ向かって、走り始めた：

霧夜が泉に到着した直後のことだった……何処からか飛んできた一本の矢が、椿の左腕に刺さったのは……

(椿姉……?)

霧夜が咄然としている時、椿がその場で膝を着いてしまい……

[illegible]

霧夜は咄嗟に自身の姉の名を叫んだ：

—そしてこの時、霧夜の物語の〈本当の始まり〉は、幕を上げた……

【第拾肆話】序章終幕（後書き）

変な所で終わってもうた…

椿「何やら、色々と大変そうな事態になっていきそうね…」

…新しい携帯が使い難いから、暫くは更新スピードが遅くなりそうだから、椿の言った大変そうな事態が書くのが遅くなるのですよ

椿「頑張って慣れようね、作者さん。それと、時空の旅人さん、レティウスさん、十六夜アミナさん、竜華零さん、感想ありがとうございます」

それと、1周年記念に、なにをするか決めました！

椿「確か、皆さんに座談会がどうか色々訊いてたけど……結局、なにをするつもりか決まった？」

それは、決まったが……詳しく(?)は、10月10日当日に判明します！

椿「うちのには、皆気になりそうな気がするんだけどね…」

言うわけねえよ…

というか、言ったら意味ないじゃん!!

椿「だよね? では、次回もよろしくお願いします」

【第拾伍話】役割／約束（前書き）

すみませんが、今回は短いです！

霧夜「んじゃ、本編開始」

【第拾伍話】役割／約束

霧夜は自身の姉、椿の名を叫びながら、握っていた刀…獅子王を、矢の飛んできた方へ無茶苦茶に振るう

霧夜が獅子王を振るった時に獅子王から無数ね斬撃が放たれ、斬撃が飛んで行った先から悲鳴が聞こえた

しかし霧夜は、悲鳴に全く反応せず、獅子王を投げ捨て、椿に慌てて近づく

しかし、椿に触れる直前に、椿の姿は突然消えた

「つば、き……ね、え？」

霧夜は目の前で突然消えた椿を見て、まるで壊れた人形のようにぐずれ落ちた

それを見たペルセインが、霧夜に近づく

『ヨク聞ケ、半身。アノ女ハ確實ニ生キテイル。恐ラク、アノ女ハコノ世界ニ何カシラノ役割トシテ〈取り込マレタ〉ノダロウ』

ペルセインの言葉の直後、霧夜は一瞬にしてペルセインの両腕をしがみつく様に掴んだ

「本当に！本当に椿姉は生きているんだな！？」

『アア』

ペルセインの言葉を聞いた霧夜は、安心した事で、そのままペルセ

インを掴んだ状態で眠ってしまった

『ヤレヤレ…』

ペルセインはゆっくりと霧夜と自分から離すと、地面に寝かせる
そして、ペルセインを紅い霧が包み込み、霧が消えた後には、女性
の姿となっていた

「……………」

女性の姿となったペルセインはしゃがみこみ、霧夜の頭をゆっくり
と撫でた

「…あの生意気な人間の少年が、こんなに成長するなんてね。これ
なら、桜との〈約束〉、果たせそう…かな？」

ペルセインは微笑みながらその場で立ち上がり、森の方を見ながら
言う

「出てきなさい」

すると、森から銀髪の少女…チンクがナイフを構えながら姿を見せた
ペルセインはチンクが警戒しているのを無視し、要件だけを告げた

「何時から見てたから知らないけど、貴女にお願いがあるのよ」

「…お願い、だと？」

「私の半身…霧夜が起きたら、こう伝えてほしいの。御姉さんは捜
してあげるから、貴方はもっと強くなりなさいってね」

ペルセインはチンクにそう告げると、先程の紅い霧とは違う黒い霧がペルセインを包み込み、そのまま姿を消した

チンクは霧夜に急いで近づき、隠れ家へと運んだ：

【第拾伍話】役割／約束（後書き）

霧夜「早速だが、レティウスさん、時空の旅人さん、朱神優希さん、感想ありがとうございます」

天使「にしても、久し振りの更新でしたね」

アルテミス「作者が1周年記念になにか馬鹿らしい事をする為と、テス勉つてのが遅くなった原因の主な理由ね」

さーせんした

霧夜「どうせ、あんま点取れねえ癖に」

うるせー

アルテミス「さて、次回からは少しコラボを予定してる……のよね？」

その通り

天使「では、次回もよろしくお願いします♪」

霧夜「んじゃ」

【第拾陸話】馬鹿（前書き）

今回から暫くコラボ話です

霧夜「初めはマーボーさんだな」

それではどうぞ

【第拾陸話】馬鹿

―ある日、天界にて―

1人の女性が溜め息をつきながら、資料が山積みにおいてある机に俯せていた

「色々調べたのに、該当する物が無いって、どういふことよ…」

女性：アルテミスが再び溜め息をつく

その時、アルテミスの部屋の扉をノックする音が聞こえてきた

「どーぞー」

「失礼するわよ」

「あつ、アテネっち。今日は何パン？」

「殺すわよ？」

「さーせんwww」

扉をノックした女性：アテネは部屋に入り、アルテミスの隣の椅子に座ると、机に置いてある資料に手をつけた

「あつ、この資料って…」

「アテネっち、まさか知ってるの…！？」

机に俯せていたアルテミスは頭を上げて、アテネに訊いた

「これ、うちの劉ちゃんの知り合いの資料じゃない」

アテネの言葉に、アルテミスが驚いた

「じゃあ、この人間についての資料って持ってたらしない!？」

「とりあえず、ね」

「流石アテネっち! 小さい時に縞パンだった事はあるね!！」

「いっぺん死んでみる? というか、よく憶えてたわね!？」

「写真残ってたから!」

「すぐに捨てなさい!！」

「だが断る」

「ネタに走らない!！」

暴走していた2人は一度落ち着くと、お互いに色々話始めた

「―って事ね」

アテネの知ってる事に、アルテミスは啞然となった

「…それ、アリなの？」

「さあ？」

アルテミスは再び溜め息をつき、机の引き出しから一枚の資料を取り出した

「それは？」

「実はね？」

アルテミスはアテネに自分の転生(?)させた存在について色々話した

「―って状態で、私どうすればいいか…」

アテネはアルテミスの言葉に対し、何を言えば良いのか考えると、ある事を思い付いた

「アルテミス。それなら、こういうのって、どうかしら？」

アテネはアルテミスに思い付いた事を話した

「…成る程。なら、お願い出来る？」

「それくらい、私に任せておきなさい！」

「流石アテネっち！伊達に隠れファンクラブがある事はあるね！！」

「ちょっと待って！？ その隠れファンクラブって一体何！？」

その時のアテネの叫び声が、天界全体に響き渡ったのは言うまでもない…

朝…チンクに隠れ家へ運ばれた霧夜は自分の部屋で目を覚ました

「…はあ」

霧夜は天井を見上げながら溜め息をついた

今の霧夜は、自身の身体から異形が…ペルセインが居なくなった事で、戦う為の力の殆どを失っていた

しかし、霧夜はそれに対して溜め息をついた訳ではないが、少なからず溜め息をついた理由の一つであった

「…起きるか」

霧夜が上半身を布団から起こすと、何故か布団がいつも以上に膨らんでいた

「……？」

霧夜は若干寝惚けている思考のまま、掛け布団を捲った

そして霧夜の思考から、眠気という二文字は一瞬に消え失せた

何故なら…

「すう…すう…」

見知らぬ少女が自分の布団の中で寝ていたのだから…

「どうしてこうなった…」

霧夜はウーノの作ってくれた朝食を目の前にして、頭を抱えながら
で呟いた

「それは、私の台詞だ…」

霧夜の呟きを隣で聞いていたチンクが、目頭を押さえながら言う
何故2人が朝からこんなに疲れているのは、自分達の目の前でウー
ノの作った朝食を今か今かと心待ちしている少女が、とりあえず原
因と言えばそうなのだろう

「（そーいや…）おい、あんた」

「うにゅ?」

少女が霧夜の方を見た

霧夜は「えっと…」と小さく言った後、少女に訊いた

「俺の名前は霧夜だ。あんたの名前、教えてもらえるか？」

「私？ 私の名前は瑠璃」

少女：瑠璃は、霧夜に自分の名前を即答した

霧夜はそのまま色々瑠璃に訊こうとしたが：

「そろそろ朝食ですから、すみません」

「ん、分かった」

ウーノの言葉で訊く事を一旦中断し、皆で朝食を食べる事にした

朝食を食べ終わった霧夜は、瑠璃とともに隠れ家の外へ出ていた

「…んで、あんたは何故自分があるそこに居たか分からないって事だな？」

霧夜の言葉に「うん」と瑠璃は元気良く答えた

霧夜は瑠璃の元気っぷりに溜め息をついた

「なんで溜め息!？」

「いや、何となくな」

霧夜は瑠璃にそう言いながら、内心で自分を恨んでいた

（まったく、本当なら、こんな事してる暇なんか全くねえ筈なのに…
…俺は早く椿姉を助けねえといけないのに…）

「…辛そうだね」

突然瑠璃の言った言葉に、霧夜は慌てて瑠璃を見た
瑠璃はただ静かに霧夜を見ていた

「あんたにッ！？…あんたに、何が分かんだよ…」

「分からない。だけど、辛そう」

瑠璃の言葉に、霧夜は反論しようとしたが、何故か言い返せなかった

「っ……」

霧夜は瑠璃に顔を見られない様に俯いた
すると、突然背中に衝撃がきた

「……なにしてんだ？」

霧夜が振り向きながら瑠璃に向かって言う

瑠璃は霧夜に抱きつく様に霧夜の背中から霧夜を抱きしめていた

「こうしたら、少しは辛く無くなるかなって」

霧夜は瑠璃の言葉に咂然となるが、すぐに…

「……勝手にしろ」

頬を少し紅くしながら言った

隠れ家に戻ってきた霧夜は瑠璃を一旦自室へ向かわせた後、隠れ家のリビングへ来たのだが、目の前の風景を見て呟いた

「どうしてこうなった…」

何故なら、霧夜の目の前ではジェイルがミノムシよろしく的な状態で吊るされていて、そんなジェイルをウーノ達を取り囲んでいたからだ

そして、霧夜が咄然としてしていると水色の髪に愛嬌のある幼気な風貌の少女が霧夜に気付き、近づいてきた

「あっ霧夜、お帰りー」

「セイン、これはどうなっただんだ…?」

少女…セインは霧夜の質問に苦笑いをしながら答えた

「あの女の子……確か、瑠璃ちゃんだったかな? その子と霧夜を

写真に撮ったから、その筋つてのに……って、あれ？」

セインは目の前からいつの間にか消えていた霧夜を慌てて捜そうとした

その時：

「この馬鹿ジェイル！死に晒せえええええ！！」

「き、霧夜！？た、頼む！待つん…ぎゃあああああああああ！？」

霧夜がいつの間にか持っていた黒い刀身の両刃刀の平らな部分で、ジェイルを往復で叩いていた：

自室に戻ってきた霧夜は、瑠璃と色々話をしていた

「―ところで、さっき外が騒がしかったんだけど…」

「気のせいだろ」

「そうかな？」

瑠璃は布団の上でゴロゴロしながら言う

それを見ながら霧夜は溜め息をつく

「…よくそんなにのほほんと出来るな」

「だって、気持ち良いんだもん♪」

（そりゃ、ウーノに頼んで干してもらったからな…）

霧夜は瑠璃の馬鹿っぽい行動を見ると、不思議な感覚になっていた

（なんか、こいつがのほほんとしてるのを見ると、色々考え過ぎてた俺が馬鹿みたいだな…）

そして、霧夜は瑠璃の頭を撫でながら言う

「どうやら俺もあんたも、馬鹿らしいな」

「私馬鹿じゃないよ!？」

突然馬鹿と言われて驚いている瑠璃を他所に、霧夜は携帯を取り出し、何処かに電話し始めた

「……アルテミスか？霧夜だ。頼みたい事が……何？代わりを超越すだど？……分かった。んじゃ」

霧夜が電話を切って少しすると、突然空間に亀裂が入り、1人の女性が現れた

「瑠璃ちゃん、迎えに来たよ」

「あつ、アテネ！」

（アテネ？……ああ、アルテミスと同種の神か）

女性：アテネの出現に瑠璃は喜び、霧夜は若干酷い事を考えていた
すると、アテネが観察する様に霧夜を見る

「……なんだよ」

「貴方がアルテミスの言ってた男の娘か……成る程ね」

「今、男の子の字が何か違ってなかったか？」

「気のせいよ」とアルテミスは言うのと、瑠璃と一緒に亀裂へ入って
行く

その時、瑠璃がいきなり霧夜に近づいて来て…

「またね♪／＼／＼」

霧夜の頬にキスして、すぐに亀裂へと入って行った

そして、亀裂は音も立てずに消えた

暫くして…

「……Σ（。；）」

霧夜はやっと再起動したのだった…

「……とりあえず、ジェイルに八つ当たり決定だな」

【第拾陸話】馬鹿（後書き）

天使「騒がしい内容でしたね」

おっかしーな！

ほのぼのを書いてたつもりだったんだが…

天使「はあ……さて、気を取り直していきますよ。時空の旅人様、レティウス様、竜華零様、感想ありがとうございます」

レティウスさんに関しては、コラボしていただいた際にいただいた武器〈絶影〉をツツコミに使わせていただきました！

天使「…それでは、第3回『天使ちゃん発表会』。お題は〈絶影〉です」

〈絶影〉

刀身に影を纏わせることによって刀身の形を好きにすることが出来る刀

天使「以上、第3回『天使ちゃん発表会』でした」

はてさて、ペルセインの力の無い霧夜はこれからどうなっていくのか…

天使「次回m「じ、次回もよろしくね！♪」あ、アルテミス様！？」

アルテミス「ふう……ぎりぎり間に合ったわね…」

もう締めたいんだが：

アルテミス「んじゃ、またね♪」

：まあ、いっか（▽；）

【第拾漆話】何事にも余所見は厳禁（前書き）

遅くなった挙げ句、短くなってすみません…

霧夜「本来なら完全に戦闘な内容だったんだが、メモの消失により、こんな感じになった」

天使「誠にすみませんでした…」

アルテミス「ちなみに、今回のコラボ相手は雨季さんよ？」

それではどうぞ

【第拾漆話】何事にも余所見は厳禁

ある朝、スカリエッティの隠れ家は慌ただしかった
何故なら…

「まさか、風邪をひくとはな…」

咳き込みつつも布団に寝転がっている霧夜が、マスクを着けながら
呟いた

実は霧夜が風邪をひいた為、ジェイルやナンバーズ達が霧夜の看病
に慌ただしく動いていたのだ

「霧夜、お前大丈夫なのかよ？」

「悪いな、ノーヴェ」

霧夜は自分の隣に座って心配してくれている赤い髪に少年的な容姿
の少女：ノーヴェに言った
すると、霧夜の目の前の空間に突然穴（？）が現れ、1人の青年が
穴から出てきた

「よっ、霧夜。って、どうしたんだ？」

「エリオか。悪いけど、風邪ひいた」

霧夜は青年：エリオにそう言った直後、咳き込んだ
ノーヴェは慌てて霧夜の背中を擦る
そんな光景を見たエリオは溜め息をついた

「……とりあえず、なんか作ってやるよ」

エリオはそう言うと、丁度部屋に入って来たウーノに色々説明し、調理場に案内してもらった

| | | | |

「さて、なに作るかな？」

調理場に着いたエリオは材料を見ながら言った

（看病食の定番は雑炊とかその辺りなんだがな…）

エリオが何を作るか悩んでいると、突然警報が鳴り響いた

「……すまないが、頼んだ」

「分かりました」

エリオはウーノに霧夜の看病食を頼むと、溜め息をつきながら隠れ家の外へ向かった…

〈数分後…〉

「面倒な相手ばかりで疲れたな…」

エリオは溜め息をつきながら霧夜の部屋へ向かって歩いていた（※ちなみにエリオの相手は転生者数名で、戦闘描写は省略しました）

すると、ウーノがエリオの目の前に現れて言った

「すみませんが、手伝ってもらってもいいですか？」

「何を…？」

ウーノに連れられエリオがやって来たのは、何故か部屋の隅々が真っ黒になっていた調理場だった

「どうしたらこんなことになるんだ…」

「実は、ちょっと余所見したせいで…」

（おいおい、料理中に余所見するなよ…）

エリオは内心愚痴りながらも、ウーノと一緒に調理場の掃除を始めた…

「さて、掃除が終わったわけだが…」

エリオは少なくなった材料を見ながらウーノに言うと、ウーノは「本当にすみません…」と頭を下げながら答えた

「（残ってる材料で看病食を作るんだったら、やっぱり雑炊か…？）……とりあえず作るか…」

〈数時間後…〉

「作りすぎた…」

目の前に広がる料理を見ながら、エリオは溜め息をついた

「すみませんが、コレを霧夜君に…」

「…分かった」

ウーノに雑炊の入っている土鍋を渡されたエリオは、霧夜の部屋に向かった…

| | | | |

「エリオ、さんくす」

「ああ」

霧夜はエリオの運んできた雑炊を食べながら言った
その時、霧夜とエリオの目の前の空間に穴…スキマが現れ、1人の女性がスキマから姿を見せた

「エリオ、そろそろ」あつ、あん時の「あら、美味しそうね」

「紫さん、時間ですか？」

「ええ」

「んじゃ、またな。霧夜」

「あ
あ」

【第拾漆話】何事にも余所見は厳禁（後書き）

本当にすみませんでした！！

アルテミス「今回は畏無自身予想外だったから、雨季さんにはまたいつかコラボをやらせていただきたいわね」

霧夜「後、時空の旅人さん、レティウスさんは感想ありがとうございます」

天使「では、次回もよろしくお願いします」

【第拾捌話】○装は○シ○レだ…!?!? (前書き)

更新遅くなりました

霧夜「ほんとだよ」

アルテミス「最低」

天使「このロリコンやろー」

ちよつと待て!?!?

俺はロリコンじゃねえ!!

天使「これでいいんですか?」

アルテミス「ok」

貴様か!?!?

霧夜「んじゃ、今回はメガネ様だ」

天使「このロリコンやろーめ♪」

俺はロリコンじゃねえええええええええええええええええ!!

【第拾捌話】○装は○シ○レだ…!?

―とある無人世界

本来なら無人であるべきなのに対し、爆発音が何度も響き渡っていた…

爆発音がした場所では、2人の人間がいた

片方のは、黒髪の少女で、もう片方は金髪の女性だった

しかし、少女は両手で大剣を軽く構えていて、女性は右手でナイフを逆手に持って構えていた

「……いくぞ、神夜^{かぐや}！」

【お任せです！】

少女が男性っぽい口調で呟くように言うと、大剣から女性の声が反応した

そして少女は女性の懐に入り込むと、大剣で女性を斬ろうとする

それに対し女性は逆手に持っているナイフで少女の大剣をまるで線をなぞっている（……）ように斬った

すると、少女の持っていた大剣は女性のナイフが斬った場所から真っ二つと化した…

「残念♪」

…筈だった

少女の右耳にいつの間にか（・・・・）付いていた紅色に近い赤色のイヤリングが光り、少女の両手に再び先程の大剣が現れる

「食らえよ……斬空閃！」

少女は女性に向けて斬撃を放つが、女性の真下から突然現れた無数の鎖により、斬撃は女性に届かず鎖を断ち切る結果となった

「ちっ……外見からしてまさかと思っていたが、やはり空想具現化マーブル・ファンタズムが使えるのか……しかも、直死の魔眼付きとはな

「それなら、いい加減……諦めて消えなさいよ！」

「だが断る！ いけ、刃月はげつ！！」

【刃月発射！！】

少女は大剣の峰に取り付けてあった2つの丸型の刃が神夜の声と同時に大剣から射出され、その後少女は女性の懷に潜り込む為に動き出す

女性はナイフで応戦しようとするが、その直前に少女の放った2つの丸型の刃が女性の右肘と右肩を女性の体から切り離れた

女性は痛み集中してしまい、空想具現化が出来ず、そのまま少女に懷へ入り込まれた

「最後にこいつをくれてやる！ 神鳴流：五月雨斬り（さみだれぎり）！！」

そして少女は手首を素早く返し、女性の体を大剣で一瞬の内に切り刻んだ

少女は「……ふう」と息を吐くと、大剣が再びイヤリングになった

「……ほんと、ジェイルには感謝だな」

少女はそう言った直後、背後から嫌な予感がした為、慌てて右側に横跳びで移動し、自分の居た場所を見る

すると、少女が先程まで居た場所には、先程切り刻んだ筈の女性が無傷で居た

（まさか、俺が切り刻んだのは…）

少女は女性を切り刻んだ場所を慌てて見る
そこには、数本の糸みたいな物が残っていた

（糸…？ …まさか、アトラスの錬金術師の技か…！？）
レプリカント・コンダクター

少女は自分が切り刻んだ偽者の正体を知り、舌打ちをする

その時、視界の隅の方に何か見えたが、先程とは違う嫌な予感がしたので、今度は左側へ横跳びで移動する

その直後、銃声が聞こえたのと同時に女性がその場で倒れた

（一体どういう…？）

少女は先程銃声の聞こえた方を見る

すると、そこには銃をコートに仕舞っていた1人の女性が居た

(……誰?)

少女はとりあえず女性に近づく事にした…

「あの…」

少女が女性に話し掛けると、女性は少女を見た

「どうした?」

「えっとですね…」

少女は女性に色々説明をしてみた

すると、女性は少女の全てを見透すように見ながら少女に言う

「お前、俺と似た感じがするな」

少女は女性の言葉に一瞬時が止まったような感じになったが、少女はとりあえず女性と一緒に隠れ家へ向かうことにした…

隠れ家に着いた直後、少女は女性に言った

「…まずは自己紹介を。俺は霧夜。霧夜・T（遠坂）・ゼクト。貴方は？」

「俺はコダイ・T・ベアトリス。コダイでいい」
トキガワ

少女と女性：霧夜とコダイは互いに自己紹介した後、霧夜の案内で隠れ家の中へ入って行った：

「何故ただの案内がどうしてこうなった？」

霧夜はorzな状態の中、ボソツと呟いた
理由は霧夜の現在の服装だろう
今の霧夜の服装は簡単に言えば、白ゴスである
そして、霧夜の正面では：

「コダイ君、すみませんがその野菜を鍋にお願いします。ダイエットはその魚を切った後、次にハムを切ってくれる？」

「分かった」

「うん」

コダイが霧夜の着ている白ゴスとは色違いである黒ゴスを着た状態で、白いエプロンを着けたウーノとで茶色の長髪を薄黄色のリボンで結わえて黒いエプロンを着けた少女：ディエチと一緒に料理をしていた

何故このような事態になったかは、コダイとウーノが会った次の瞬間には握手をしていた直後の事、風呂に行っていた霧夜の着替えが何故か今着ている白ゴスだったのだ

それよりも、霧夜は違うことに驚いていた

「…てか、なんで普通に女装出来るん!？」

霧夜の言葉に、コダイとウーノが反応した

「「女装はオシヤレだぞ（なんですよ）」」

「いや、違うね!？」 寧ろそんな名言を言えるコダイとウーノが色んな意味で凄えよ!？」

コダイの名言（迷言?）を霧夜がツツコミを入れながらも、着々と料理が出来ていった

そして、一緒に晩御飯を食べた後、コダイはアルテミスによって元の世界へ帰って行った…

その際に、いつの日かの再会を約束したのは何故だったかは、約束した本人達のみぞ知っている…

「俺まだ白ゴス着たまんまじゃねえかよ!?!」

「霧夜君、次はこの巫女服をお願いね?」

「い、嫌だあああ!!」

「ディエチ、それは何かね?」

「あつ、ドクター。実はウーノ姉さんにへ女装はオシャレって名言を大事に残しておいてって頼まれたから、こうやって霧夜の写真に名言を残してる」

「ウーノ、君は何処へ向かっているんだ…」

【第拾捌話】○装は○シ○レだ…!?!? (後書き)

〔後書き座談室〕

霧夜「なんだこれ？」

今回から始めて見た

ちなみにパーソナリティーはこいつら

響介「何故俺らなんだ…」

亮一「イヤッホォウ！」

自分の前作『魔法少女リリカルなのは〜偽リノ騎士〜』から、主人公で他作品の主人公とリア充な感じの安藤響介と、天然馬鹿でお馴染みの伊藤亮一です

天使「ちなみにこのコーナーは私とアルテミス様、霧夜さん等の本作メンバーは入れ替わりでパーソナリティーのお二人と座談です」

アルテミス「偶にはゲストを呼ぶ予定よ」

霧夜「んで、今回は全員集合みたいな感じか」

響介「らしいな」

亮一「基本はこんな感じの3人か、3人+αのメンツでやるらしい。ちょっと燃えてキタWWW」

響介「お前は一言多いんだよ」

霧夜「てか、大丈夫なのかよ？　こんな事して」

アルテミス「大丈夫なんじゃない？」

響介「それと、時空の旅人さんと雨季さんは感想ありがとうな」

天使「では、次回もよろしく願います♪」

【登場キャラ編?】その他のキャラクター達・その巻(前書き)

ちよつとキャラ設定を…

【登場キャラ編?】その他のキャラクター達・その巻

名前…伊藤雪恵

(いとうゆきえ)

年齢…ノーコメントよ♪ (by雪恵)

《特徴》

髪色…黒色

髪型…ロング

瞳の色…青色

《服装》

黒のジャージ (上下共に)

《説明》

霧夜がジェイルを助けた時に一緒に助けた女性で、管理局のとある部隊に所属している女性局員

とある事件を単独で調査をしている最中に、イレギュラー (転生者) から襲撃された

犯罪者達には〈鎌鼬〉いう二つ名が有名で、更に、一児の母でもある

《武装》

- ・管理局支給の杖型ストレージデバイス

《能力》

- ・魔力変換資質…風

名前…遠坂椿

(とおさかつばき)

年齢…秘密♪(by椿)

《特徴》

髪色…黒色

髪型…ポニーテール

瞳の色…群青色

《服装》

喰霊の〈諫山黄泉^{いさやまよみ}〉が着ていた着物

《説明》

霧夜の実の姉で、前世では既に死去している
現在は転生者として色々と活動していたが、ペルセインとの戦いで意識不明の重症を負い、行方不明

《主な武装》

・王の財宝
ゲート・オブ・バビロン

・獅子王

椿が主を使う刀で、原作では諫山黄泉が使用している日本刀
霊獣〈鵠^{ぬえ}〉を宿している

※鵠

獅子王に宿る霊獣

赤い獅子のような巨大な獣の姿で、尾は無数の蛇
ちなみに乱紅蓮^{らんぐれん}という名前が付けられている

・爆碎牙^{ばくさいが}

椿が他の転生者を倒して得た刀で、原作では殺生丸が使っている刀
斬った対象を凄まじい爆発で打ち砕く効果を持つ刀で、斬った後も効果が持続して破壊を続ける

《能力》

上記同様

名前…???(ペルゼイン・リヒカイト)

年齢…??歳

《特徴》

髪色…白髪

髪型…ロング

瞳の色…赤色

《服装》

赤色の着物に白の法被

《説明》

『スパロボOG』でお馴染み(?)のペルゼイン

だが、本作では色々と秘密の多い存在

本作の重要キャラの1人でもある

《主な武装》

- ・ 鬼蓮華&鬼菩薩

原作（無限のフロンティアEXCEED）でアルフィミイが使っていたのと同じ物

霧夜の時と同様に、使いたい時に姿を現す

《能力》

- ・ アインスト化

そのまんまペルゼイン・リヒカイトになる
体もアインストそのもの

- ・ ????

謎に包まれている能力で、詳細不明

【登場キャラ編?】その他のキャラクター達・その壱(後書き)

〔後書き座談室〕

亮一「オイッスウ!」

響介「この企画マジだったのかよ…」

亮一「いいじゃん×2。 んじゃ、ちゃっちゃんと始めよう!」

響介「勝手にしろ…」

天使「今回は私の番らしいです」

亮一「あっ、幼女……幼女だとっ!?!」

天使「幼女って連呼しないで下さい!」

響介「うるさ…」

亮一「(´・ω・｀)」

天使「すみません…」

響介「はあ……んじゃ、どうすんだ?」

天使「えっとなですね……今回は次回予告だけでいいのでは?」

亮一「おk」

響介「つつても、次回予告もへったくれもないが」

天使「すみません…」

亮一「Σ（◇、＊）エエッ」

響介「面倒くさ…」

亮一「んじゃ、次回もよろしく（^ー^）b」

天使「ちなみに次回は霧夜さんです」

【第貳拾話】少女とあんぱんと漆黒な鋼鉄の孤狼（前書き）

コラボの途中ですが、本編を少々進ませていただきます

霧夜「んじゃ、本編スタートな」

【第貳拾話】少女とあんぱんと漆黒な鋼鉄の孤狼

ここは第1管理世界である〈ミッドチルダ〉の西部の地区へエルセア

そこに、変わった型をしている黒いバイクに乗った霧夜が居た

（思ったより結構快適で驚いたな……まあ、快適なんは良いんだが…）

本来なら1人で気分転換のつもりだったのだが、とある事情により1人ではなかったが故に、バイクの後部座席辺りに座っていた霧夜は念話を使って、自分の前…運転席に座っている人物に話し掛けた

《ねえ、ホントにその場所に行くんですか？ てか、運転してるの俺ではないんですけど…》

《知り合いの様子をチラッとだけ見ただけなのよ？ それに、霧夜君みたいな子がバイクを運転してたら色々とヤバイでしょ？》

《（確かに、今の外見ではしゃあないしな…）…分かりましたよ、雪恵さん。すみませんが、運転お願いします》

バイクの運転席に座って運転している人物である雪恵が霧夜に「任せなさい」と念話で伝えると、霧夜は溜め息をつくのだった…

2人が着いたのはとある小さな公園で、雪恵は何故か滑り台のてっぺんから双眼鏡を使ってある民家を見ていた
その様子を霧夜は地面に設置型のベンチで先程雪恵に奢ってもらっ

た缶ジュース（ヘップシ…120円）を飲みながら内心溜め息をついていた

（雪恵さん、あんた完全に不審者だよ……にしても、この○プシ紛いの飲み物……結構旨いな）

その時、突然世界が止まった

否、世界が止まったのではない

霧夜を中心に、一定の空間の時が止まったのだ

「（この感じは……）……まさか、転生者か!？」

霧夜は未だ中身の残っているヘップシを投げ捨てると、ベンチを蹴り、その場から跳んだ

その直後、上空から一筋の桃色の光が霧夜の居たベベンチに降り注ぎ、ベンチは跡形も無く消え、地面がまるで超小型隕石による落下跡のように陥没した

（今の光って、まさか管理局の白き魔王な砲撃!？ ……いや、あり得ないな。今はまだ管理局に入局してないし、魔法すら知らない筈だ。すなわち……っ!？）

霧夜は嫌な予感がした為、後ろへ跳んだ

すると、今度は雷が落ちてきて、先程以上に地面を陥没させた

（今のは、ナギさんの!？ ……どうやら、今回ののは色々面倒くさい奴みたいだな。さつきから見た感じ、多分この空間は転生者とかを隔離する為の空間……確か似たようなのが生前にアニメであった気が……そうだと「ふうぜつ封絶」っていう因果孤立空間のやつだった筈……）

その時、霧夜は視界の端にあり得ないものを見てしまった

（この空間内に人！？）

そう、霧夜が見たのは空間内を歩いている少女だった

（あの少女も転生者…？）

霧夜が色々考えていた時、上空から巨大な魔力を感じとった

「（…どうやら、考えてる余裕は無さそうだな。それなら…）ベーオウルフ！アーマーモード起動だ…！」

【応！】

バイク…ベーオウルフから返事がした直後、ベーオウルフが独りで霧夜に近づいて来て、霧夜とぶつかる直前にベーオウルフは変形し始めた

変形途中、霧夜がベーオウルフに取り込まれ、その時に霧夜を取り込んだベーオウルフが黒い光に一瞬だけ纏われ、すぐに破裂するよう光は消えた

そして、光が消えた場所には、漆黒の鎧のようなロボットが居た…

『（まさか、本当に変形した姿が真っ黒なアルトアイゼン……しかも、リーゼとはな……ジェイルの奴、後で覚えてろよ…）頼むぞ、ベーオウルフ！』

【応！】

背中に付いているブースターが点火し、ロボットのような鎧(?)を纏った霧夜は少女に向かって一直線に動く

そして、少女の前に移動すると、上空に向けて左手を突き出す

『障壁展開!』

【Round Shield!】

ベーオウルフが答えた直後、突き出した左手から真っ黒な魔方陣が現れる

その直後、上空から来たのは魔力による砲撃……ではなく……

【なんじゃアレ!?!】

『マジかよ……っ!?!』

魔力を纏い、左手に一冊の本を所持した男性による上空からの蹴りだった

霧夜はこのままでは障壁が保てないと思い、蹴りを反らすように障壁をずらす

すると、男性は蹴りを反らされ、そのまま霧夜の後方へと蹴りのポージングのまま飛んでいった

霧夜が障壁を消した後、ベーオウルフが訊いてきた

【兄貴!アレは一体なんすか!?!】

『あれは……まさか、今のはネギま!の〈闇の魔法〉!?!?』
マギア・エレベア
「ん……?」

霧夜は少女をちゃんと見た直後、啞然としたが、恐る恐る少女に言ってみた

『……フランスパン』

「えっ!?! あ…あんパン!?!」

まさかの少女の返しに霧夜は思わず呟いた

『まさか、中の人ネタに引っ掛かってくれた……だと……!?!?』

【兄貴、中の人ネタってなんスか?】

「あ、あの……貴方は一体……?」

霧夜は少女に色々聞こうと思ったが、それどころではない事を思いだし、少女にいつぞやの紅色に近い赤色のイヤリングを渡した

「えっ!?!?」

『すまん、それをやるから逃げてくれ』

少女から離れた霧夜は後方に向かって動きながら、左腕を突き出す

『食らいな!』

【乱れ撃つぜえ!?!】

(このタイミングでネタに走るか普通!?!?)

霧夜はベーオウルフに若干不安になりながらも、左腕に装備されて

いる機関銃：へ5連チェーンガンを撃つ
しかし、今度は相手の障壁により銃弾は防がれる

『それならな…！』

【Plasma Horn！】

霧夜が前方に頭を少し傾けると、頭部に装備されているブレード…
へプラズマホーンに黒い電撃が発生する

数秒後にプラズマホーンと相手の障壁が激突するが、すぐにプラズマホーンが障壁を破壊した

その直後、霧夜の背中の腰辺りから2つの黒い箱が射出されたかと思うと、箱から幾つものミサイルが相手に向かって射出され、更に両肩に装備されている重たそう（実際重い）な物から無数の弾が放たれる

『へスプリットミサイル』とへアヴァランチ・クレイモアによる
弾幕か…！』

【兄貴、迷惑でしたか？】

『寧ろ助かった。ありがとうな』

ベーオウルフにお礼を言いながら霧夜は右腕を構える
そして、相手との距離が零になり…

『【撃ち貫くのみ…！】』

右腕に装備されているステークを相手に撃ち込んだ

―オマケ1―

「んで雪恵さん、知り合いはどうだったんです？」

「…彼女、息子なんて居たっけ？」

「知りませんよ…」

「うゝん…」

―オマケ2―

「あっ、お兄ちゃん！」

「ティア！やっと見つけた！全く、どこ行って…」

「どうしたの？」

「ティア、そのイヤリングはどうしたんだ？」

「知らない人がくれたの」

「そうか。んじゃ、帰ろうか」

「うん♪（またね、ロボットなお兄さん♪）」

【第貳拾話】少女とあんばんと漆黒な鋼鉄の孤狼（後書き）

〔後書き座談室〕

響介「まずは謝辞を。時空の旅人さん、レティウスさん、感想ありがとうございます」

亮一「今回は本編再開だが、コラボの続きはちゃんとやるからつてよ」

霧夜「全く、迷惑な話だ」

亮一「いや、あんたの物語だから（汗）」

霧夜「ちなみに今回本編に出てきてた属性カートリッジはレティウスさんの『神々のゲームと転生者』に出てたやつをうちのジェイルが弄くったやつだ」

響介「ちなみにちゃんと許可はもらってるからな？」

亮一「んじゃ、次回もよろしく」

霧夜「今回はアルテミスの登場だ」

亮一「にしても、そろそろゲストが欲しいな…」

響介「無茶言うなよな…」

【第貳拾壹話】まさかの…（前書き）

後4，5話程本編やらなんやらありますが、その後にコラボの続きを

アルテミス「それじゃ、本編スタートね☆」

【第貳拾壹話】まさかの…

隠れ家に戻って来た霧夜はジェイルに神夜を無くしたと嘘をつきながら、ベーオウルフの調節を頼んだ
そして自室に向かう途中にノーヴェと会った

「霧夜。いつ帰って来たんだ？」

「ついさっきだ……あつ、ノーヴェ。前に借りた本返したいから、部屋まで一緒に来てくれないか？」

「ああ、分かった」

2人は霧夜の自室へ向かった…

| | | | |

自室へ入ると何故か布団が膨らんでいた

「「……はあ」」

霧夜とノーヴェは同時に溜め息をつく、掛け布団を捲った
すると…

「zzz…」

知らない女性は何故か眠っていた
ノーヴェは女性を見て驚くが、霧夜は二度目の溜め息をつく
そして霧夜はポーチからハリセンを取り出し…

「起きろ、アルテミス」

女性の頭を叩いた

すると、女性：アルテミスが「いったあゝ！」と言いながら頭を押さえつつ目を覚ました

「何が痛いだ。てか、何故俺の布団で寝とるし」

「気持ち良さそうだから、つい…」

霧夜は黙ってアルテミスにもう一度頭をハリセンで叩く

「神様もこんな調子で大丈夫なのかよ…？」

「大丈夫だ問題な、って痛いよ霧夜君!？」

「だったら下らない事^{ネタ}を言うな」

「はゝい…」

霧夜は三度目の溜め息をつく、ノーヴェに説明を始めた

「—とまあ、こんな感じなんだが…分かったか？」

霧夜の説明を終え、ノーヴェを見ると、ノーヴェはいつのまにか頭から煙を上げていた

霧夜は何度目か憶えていない溜め息をつく

その直後、霧夜の不注意が原因だったのか、ただタイミングが悪か

っただけなのか分からないが…

「おわっ!？」

霧夜は後ろからの衝撃を突然受けたと思ったら、目の前で未だ頭から煙を上げているノーヴェに向かって倒れていき…

「んっ!？」

「…んんっ!？」

霧夜の唇とノーヴェの唇が接触…すなわち、キスをしてしまった…その時床が突然光出し、2人の間に一枚のカードが現れた

「えっ!？」

アルテミスは慌てて現れたカードを手にとった

すると、カードには半袖の黒いTシャツに黒のジーンズを着た霧夜が描かれていた

ただし、本来は〈ウイングロード〉という先天魔法で、ノーヴェの

インヒューレントスキル

〈IS〉である黄色のウイングロードの〈エアライナー〉に乗り、

ノーヴェの持つ武装の一つである〈ガンナックル〉と呼ばれる籠手が赤色になっていて、更に肘から刃の出ていると外見が変化している物を装備し、ノーヴェのもう一つの武装の〈ジェットエッジ〉と呼ばれるナックルスピナーを備えるローラーブーツも赤色に変色した物を装備した姿で…

(これって、まさか〈パクティオーカード〉!？ けど、契約魔法陣はどこにも書いて…!)

アルテミスは先程光っていた床を目を細めながら見る
すると、床には奇妙な円が描かれていた

（あった、契約魔法陣！　けど、何故この世界に…）

その時、誰かがアルテミスに声を掛けてきた

「おや、君も転生者の類いかい？」

アルテミスは声を掛けてきた人物に対し、床の魔法陣を指差しながら言う

「まさか、この魔法陣を描いたのは貴方かしら？　ジェイル・スカリエッティ？」

するとアルテミスに声を掛けた人物：ジェイルは「ん？」と言いな
がらアルテミスが指差した床を見る

そして、ジェイルは何故か溜め息をついた

「恐らく、これは私の娘のクワットロが描いた試作魔法陣だろう。
全く…」

アルテミスはジェイルの言葉を聞くと、啞然とした

（試作魔法陣って…この世界、本当にどうなってるのかしら……
アテネっちに貰った資料でも結局核心には至ってないし…）

アルテミスは呆れて盛大な溜め息をついた…

| | | | |

―アルテミスが盛大な溜め息をついていた頃

辺りが漆黒と言っても過言ではない空間に、赤色の着物に白の法被を身につけた女性：霧夜に宿っていたペルセイン・リヒカイトが居たそして、彼女の目の前には丸い球体が浮かんでいる

「微かに感じた霧夜の御姉さんの反応を追っかけて来てみれば……一体これはどうなってるのだ……」

先程から球体の中から見えて（・・・）いるのは、1人の女性が十字架に縛られている姿

しかし、ペルセインが驚いているのは縛られている事ではなかったペルセインが驚いていたのは、十字架が脈打って（・・・）いて、更に縛られている女性の爪先から十字架に沈んでいっている事だった（どうやらこの世界……というより、この物語はかなり歪んでるよね。この球体……いえ、〈世界〉と呼ぶべきね。この世界は今の私では太刀打ちするなんて不可能。こうなったら、一刻も早くもう半身を見つけないと……）

そしてペルセインは球体の前から消える

霧夜の姉にして、十字架に縛られていた女性：椿を助け出す約束を果たす為に……

【第貳拾壹話】まさかの…（後書き）

〔後書き座談室〕

アルテミス「あら、もう始まったの？（オレンジジュースを飲みながら）」

響介「らしいな（芋かりん糖を食べながら）」

亮一「あんたらなく……とにかく始めるぞ！　まずは竜華零様、レティウス様、秋代様、感想有り難うございました！」

ちなみに今回本編で出てきた契約魔法陣ってのはクワットロが試作版として描いたの魔法陣なので、本来パクティオカードに描かれるべきノーヴェの装備が霧夜のとなりました

響介「装備の名前は後々本編で発表されるそうだから、とりあえず楽しみにしといてくれ」

アルテミス「そう言えば、さっきの子って誰？」

亮一「よくぞ言った神様！　遂に、ゲストが来てくれました！！」

響介、紹介よろ！」

響介「いや、俺今知ったから分かるわけないから」

亮一「…ということで、紹介します！　レティウス様の作品『神々のゲームと転生者』から、赤羽飛鳥ちゃんです！」

飛鳥「お願いしまゝす」

アルテミス「あら、さっきの子じゃない」

響介「…やるよ（芋かりん糖を渡す）」

飛鳥「有り難うございます！えっと…」

響介「俺は安藤響介だ。よろしく」

飛鳥「よろしくお願いします、響介兄様」

アルテミス「（兄様ね…：…それなら…）飛鳥ちゃん、私の名前はアルテミス。このリンゴジュースあげるわ」

飛鳥「わぁ〜いい♪有り難うございます、アルテミス姉様」

アルテミス「喜んでもらえて良かったわ♪（陰でガッチポーズ）」

響介「（ガッツポーズって…）ところで天然馬鹿。なにをしてるんだ？」

亮一「ちよつとこz…じゃなくて、記念写真を撮ろうかと」

響介「ダウト」

アルテミス「飛鳥ちゃん。この馬鹿さん（亮一）が遊んでくれるそうよ？」

飛鳥「飛鳥と遊んでくれるの？」

亮一「あ、ああ…」

飛鳥「有り難うございます！馬鹿兄様」

響&アル「馬鹿兄様って…（笑）」

亮一「orz」

飛鳥「いくよーとーるはんまー」

亮一「グボオラァ!？」

響介「凄いな…」

アルテミス「（もうツツコミはしないわよ…）それでは、次回もよろしく」

響介「次回は天使の順番だ」

飛鳥「またね」

【第貳拾貳話】次なる世界への旅立ち（前書き）

本来の原作が『ネギま!』なのに、全く関係ない話が多いのは何故…

アルテミス「作者がちゃんと必要な資料を集めきれてないからでしょうが…」

面目ない…

天使「よしよしですよ」

アルテミス「……ロリコン（ボソツ）」

違うよ!?

霧夜「ハァ……んじゃ、本編開始な?」

【第貳拾貳話】次なる世界への旅立ち

アルテミスが何故か現れた日から1日が経ち、霧夜は自室でアルテミスに正座させていた

「何故私は正座させられているのかしら…？」

「なんとなく」

「酷くない！？ 昨日はあんなに親切に〈パクティオカード〉について説明したのに…」

「酷くない。……まあ、説明は感謝してるがな…」

昨日はアルテミスに〈パクティオカード〉に関して色々説明等をしてもらった後、霧夜とノーヴェによるクワットロの公開処刑がされた事で、丸1日経ったのだ

「…んで、結局何の用なんだよ？」

霧夜は何故か自室に一緒に居たジェイルと共にアルテミスに訊いたすると、アルテミスがポケットから7つの青い石の付いたブレスレットを取り出し、霧夜に手渡した

「なんだよコレ？」

「アポローン兄様特製。確か名前は〈セブンス〉」

「…はあ？」

霧夜は手渡されたブレスレット：セブンスを見る

「何故にブレスレットだよ……というか、効果は？」

「アポローン兄様曰く、お楽しみだそうよ」

アルテミスは溜め息をつくと立ち上がり霧夜に指差した

「それと、アポローン兄様からのお願いで、貴方を次の世界へ送るわ」

霧夜はアルテミスの言葉に「ちょっと待て」とツツコミを入れた

「んじゃ、イレギュラー達はどうすんだよ」

「そうなのよね……」

アルテミスが再び溜め息をつくのを見ながら（意外にアルテミスも色々大変なんだな…）と霧夜は内心同情した
その時、隠れ家に警報が鳴り響き始めた

「ウーノ、何事だい？」

ジェイルが立体映像の出る通信機でウーノに確認をした
すると、ウーノから返ってきた言葉に、霧夜は何故か溜め息をついた
何故なら…

『ドクター、隠れ家に真っ直ぐ接近している反応が3つあります！』

（人数的にもタイミング的にも気持ち悪い程だな…）

数分後、ウーノから映像が送られてきた
その映像には…

「何故にストフリとプロウヴィデンスがセット！？ しかも、アルトアイゼンもってどんなんだし…」

そう、ウーノから送られてきた映像には、略称が〈ストフリ〉でお馴染みの〈ストライクフリーダム〉と、ストフリのパイロットの因縁的なパイロットの機体である〈プロヴィデンス〉、更に何故かスパロボで恐らくお馴染みの〈アルトアイゼン・リーゼ〉の3機が映し出されていた

それを見た霧夜は内心焦って（？）いた

（アインスト化の出来ない俺で3機……いや、この感じは転生者だから3人か…？ まあ、別にカスミ師匠から魔法や魔術を教えてもらってたから余裕に勝てる気がするが……しゃあない。ちゃつかと片付けるか）

すると、霧夜の内心を見透かしたように、ジェイルが「まあ待つんだ霧夜」と霧夜の右肩を掴んだ

「…なんだよ」

「まあコレを見るんだ」

ジェイルがウーノに「例のアレを」と言うとうーノとの通信が切れ、その数分後……転生者達3人の映し出されていた映像に、新たな機

体が姿を見せた

霧夜は新たに現れた機体を見て驚いた

「〈ハイペリオン〉に〈Xアストレイ〉！ 更に〈ビレフォール〉だと！？」

転生者達の前に現れたのはスーパーコーディネイターの失敗作の機体に、プロヴィデンスの試作機をカスタムした機体、更に青き修羅神だった

その時、ジェイルに通信が来た

『此方はトーレ。 ドクター、聴こえますか？』

「聴こえているよ、トーレ。 3機の調子はどうだい？」

『ハイペリオンは問題ありません。：ノーヴェとディエチ、そちらはどうだ？』

ジェイルと通信していた女性：トーレが声を掛けると、新たに2つの通信が繋がった

『此方ディエチ。Xアストレイは今のところは問題ないよ』

『ビレフォールも同じく！』

霧夜は新たに通信の繋がった2人：ディエチとノーヴェに驚く

「ジェイル！？ アレは一体なんだ！？」

「落ち着くんだ霧夜。 3人のアレは君のベーオウルフのアーマーモ

ードだけの改良型だよ」

「ベーオウルフの改良型だと…?!」

ジェイルは霧夜に狼の顔のマークの付いたカード…デバイスのベーオウルフを手渡した

「…既に調節は終わった。 持って行きたまえ」

霧夜はベーオウルフを無言で受け取った
その直後…

『き、霧夜！ わ、私とのふ、ファーストキスしたんだ！！ 必ず
帰って来い！ 約束だ！！／／／』

突然ノーヴェからの通信に霧夜はポカンとなったが、すぐにいつもの表情（ちよつと頬が紅く染まっているが…）へと変わり…

「…ああ！」

…元氣良く頷いた
そして霧夜は、アルテミスにより次なる世界へ旅立った…

【第貳拾貳話】次なる世界への旅立ち（後書き）

〔後書き座談室〕

亮一「掛かったな！罨カードオープン！奈落の落とし穴！！」

天使「神の宣告で無効にします」

あんたら、もう始まってるよ

響介「暫く続きそうだから、こっちでさっさとやる」

ok

響介「まずは謝辞を……だな。レティウスさん、秋代さん、感想有り難うございました」

ました

響介「んで、次は霧夜が次の世界へ……って感じか」

本来ならもう少し後の予定だった世界だな？

響介「それはお前が悪い」

さーせんwww

響介「…んじゃ、次回もよろしく願いします」

ちなみに次回は誰を呼ぶか未定ですの〜

「おまけ(?)」

亮一「いくぞ、天使！サイバーエンドで伏せモンスターに攻撃！」

天使「甘いです。速攻魔法！月の書！」

亮一「なに！？ ……ターンエンドだ」

天使「いきます。ドロ〜……大嵐発動。更に、魔法カード死者蘇生の効果で墓地からサイバードラゴン等特殊召喚。更に手札からダーク・リゾネーターを通常召喚。サイバードラゴンにダーク・リゾネーターをチューニング！いでよ、レッドデーモンズ！」

亮一「んな！？」

天使「まだまだいきます。墓地から光属性と闇属性のモンスターを3セット除外し、カオス・ソーサラーを3体特殊召喚！更に、伏せモンスターを表側に…」

亮一「い、異次元の女戦士だと！？」

天使「参ります……伏せモンスターに異次元の女戦士で攻撃。異次元の女戦士の効果により、お互い除外します」

亮一「Σ（。Δ。;）」

天使「そして、ソーサラーズで直行！止めはレッドデーモンズです！！！」

亮一「参りましたm（　　）m」

天使「O（≡▽≡）O」

亮一「…そーいや、座談会ってどうなった？」

天使「……」

亮一&天使「わ、忘れてた（ました）……orz」

【第貳拾参話】占いと流星（前書き）

第2編の開幕です！

椿「それじゃ、本編開始」

【第貳拾参話】占いと流星

―とある街の外れに、2人の女性が居た

1人は桃色の髪に露出の多い服装で剣を鞘に収めた状態で所持していて、もう1人は白髪で、桃髪の女性の服装と若干似ているが、此方の服装は露出が多少減った感じの服装で（それでも結構露出の多いが…）、腰に沢山の矢の入った筒を提げ、弓を所持していた
すると、白髪の女性が桃色の髪の女性に呟くように言う

「ふむ……もう春じゃと言うのに肌寒いのう」

「氣候が狂っているのかもね。……世の中の動きに呼応して」

白髪の女性は何か困ったような表情をする

「…確かに、最近の世の中の動きは、少々狂ってきておりますからな」

白髪の女性の言葉に桃色の髪の女性は苦笑いをしながら言う

「官匪かんぴの圧政、盗賊の横行。飢饉の兆候も出始めているようだし。

……世も末よ、ホント」

「うむ。しかも王朝では宦官かんがんが好き勝手やっておる。……盗賊になってもなっって好きに生きたいと望む奴が出るのも、分かんんでもないな」

「真面目に生きるのが嫌になる、か。……ま、でも大乱は望むところよ。乱に乗じれば私の野望も達成しやすくなるもの」

桃色の髪の女性の言葉に白髪の女性は「全くじゃな」と答えた

「今は袁術えんじゅつの客将に甘んじてるけど。……乱世の兆しが見え始めた今、早く独立しないとね」

「堅殿が死んだ後、うまうまと我らを組み入れたつもりだろうが……いい加減、奴らの下で働くのも飽きてきたしの」

桃色の髪 of 女性は「そういうこと」と白髪の女性の言葉に同意した

「……だけどまだまだ私たちの力は脆弱。……何か切っ掛けがあれば良いんだけど」

「切っ掛けか」

白髪の女性は少し悩み始めるが、突然思い出したかのように言う

「……そういえば策殿。こんな噂があるのを知っておるか？」

桃色の髪 of 女性は「どんな噂よ？」と白髪の女性に訊いた

「へ黒天を切り裂いて、天より飛来する二筋の流星。その二筋の流星は天の御遣いかんろを乗せ、乱世を沈静す。……菅輅かんろという占いの師の占いじゃな」

「菅輅かんろって、あのエセ占いの師として名高い？ ……胡散臭いわね」

「そういう胡散臭い占いを信じてしまうぐらい、世の中が乱れとるということだろう」

「縫^{すが}りたいって気持ち、分からなくも無いけどね。……でもあんまりよろしくないんじゃない？　そういうのって」

桃色の髪の女性の言葉に白髪の女性は「妖言風説^{ようげんふうせつ}の類いじゃからな」と若干笑いながら言った

「じゃか仕方無からうて。明日がどうなるか。明後日がどうなるか。とんと見えん時代じゃからな」

桃色の髪の女性が「ホント、世も末だこと」と言うと、白髪の女性は「うむ」と答えた

「…さて策殿。偵察も終了した。そろそろ帰ろう」

「そうね。さっさと帰らないと冥琳に——」

桃色の髪の女性が喋っていた途中、何やら音が聞こえてきた

「…なにこの音？」

白髪の女性は所持していた弓を素早く構えると、矢の入っていた筒から矢を取り出した

「策殿！　儂の後ろに！」

「大丈夫よ。それより祭、気をつけて…」

桃色の髪の女性は剣を抜刀すると、呟くように言った

「盗賊か、妖^{あやか}かし……何にせよ、来るなら来なさい。殺してあげるか

ら…」

その直後、突然辺りが白くなり…

「なにこれ……視界が白く……っ！」

「策殿お！」

少しして、辺りが元に戻った事を不思議に思った2人だったが、白髪
の女性が何かを見つけたような声を出した
桃色の髪の女性が「どうしたの？」と訊くと、白髪の女性は…

「あそこに人が倒れておる」

と指差しながら答えた

それを聞いた桃色の髪の女性は驚いたが、白髪の女性が見つけた人
に向かって走り出した…

「…女の子？」

桃色の髪の女性は白髪の女性が見つけた人を見て呟いた

倒れていた人は顔つきからして女性っぽいのだが、何故か服装が見たこと無いが、恐らく男性っぽい感じだった
すると、白髪の女性がやっと桃色の髪の女性に追い付いた

「はあ、はあ、はあ……主よ。あるじあまり老いぼれをイジメんでくれ」

「あ、ごめん。…大丈夫？」

「久々に走って、心臓が壊れそうじゃ」

白髪の女性の言葉に「運動不足じゃない？」と桃色の髪の女性が言う
うと、白髪の女性は「そうかもしれんのう」と息を整えながら答えた

「…それにしても。この小僧…どこから現れたんじゃ？」

桃色の髪の女性は「女の子じゃないの？」と白髪の女性に訊く

「見た目は小娘かもしれんが、よく見てみると、小僧にしか見えんのじゃよ、策殿」

白髪の女性の言葉に桃色の髪の女性は「へえ」と関心するように言った後、何かを考えてるみたいに呟いた

「さっきは居なかった。だけど気がついたら居た。…さっきの光に関連づけるのが妥当でしょうね」

「光と共に現れた小僧、か。…菅輅な占いの通りということか？」

「占い通り、ねえ。…ということとは、この子が天の御遣いって奴の1人なのかな？」

「占いを信じるならばな」

白髪の女性は目の前に倒れている外見が少女っぽい少年の服装を見る

「…確かに、この世のものとは思えん服を着ておる。あながち外れとも言えんじやろ」

桃色の髪の女性は「…本当なら面白いんだけどね…：色々と」言う
白髪の女性は桃色の髪の女性に少年をどうすりか訊くと、「…連れて帰りましょう」と言った

「ほっ。妖がめしれんが大丈夫か？」

「本当に天の御遣いなら保護する。人に害を為すものなら私が殺してあげる。…一石二鳥でしょ？」

桃色の髪の女性が言うと、白髪の女性は考えるように言う

「名をあげるにはもってこいか。…：うむ、策殿の案に賛成しよう」

「ありがと。それじゃこの子の連行、よろしくね」

白髪の女性は「承った」と言うと、少年を背負おうとした
すると、少年の腕の中には鞘に収まった細長い剣があった
それを見た白髪の女性は少年から剣を取ろうとするが、まるで少年が剣にすがっているような感じがしたから、とりあえず少年に剣を持たせたまま背負う事にしたのだった…

【第貳拾参話】 占いと流星（後書き）

〔後書き座談室〕

早速だが、また新しい二次を書きたい

亮一「作者自重www」

響介「はあ……ちなみに原作は？」

とりあえず『なのは』を予定中

亮一「ただでさえ遅いのに大丈夫なのかよ？」

響介「挫折した作品もあったしな…」

面目ない…

響介「全く……秋代さん、レティウスさん、感想有り難う」

ちなみに無事に二次が書ける世間だったら、来年投稿予定

亮一「知らんしwww」

響介「はあ……んじゃ、次回もよろしく」

亮一「あつ、霧夜の次の世界は代々分かった人が居ると思うけど、正解は次回の本編と後書きで発表らしいんで。あしからず」

保険として一次も考えていたりいなかったり…

響介「どっちだよ…」

【第貳拾肆話】次なる世界は…（前書き）

風邪引いた挙げ句、若干熱があつたり…

霧夜「ザマァWWW」

（▽₁；）

天使「それでは、本編スタートです♪」

【第貳拾肆話】次なる世界は：

アルテミスによって次の世界へ旅立った霧夜だったが、突然強力な眠気に襲われたせいで、いつの間にか眠っていたらしい気がついた霧夜が最初に目にしたのは、何処かの部屋だった

「…は？」

霧夜が部屋を見回すと、自分はベッドで眠っていて、更に身体が生前と同じ位になっていて、何故か生前に通っていた高校で着ていた学ランを着ていた
それと、ベッドの近くには霧夜の姉：椿が使っていて、今は霧夜が所持している刀〈獅子王〉が鞘に収まった状態で置いてあった

「どうなってんだ？」

霧夜が自分の状況に対して考えていると、部屋の扉が開き、1人の女性が入って来た

「おっ？ 目を醒ましたか、小僧」

「へっ？」

「気分はどうだ？ 怪我はしとらんか？」

「え、えつと…」

部屋に入って来た女性はいきなり霧夜の心配をしてきた為、霧夜は少々戸惑っていた

(にしても、この女性……外見は綺麗だが、妙齡な気が…)

「今なにを考えた小僧」

「なにも考えてません!」

女性の言葉で霧夜は慌てて否定した(実際は考えていたが…)

「ところで……貴女はどなたですか?」

「ん? 儂か? 儂の名は黄蓋。字は公覆こうふくと言う。以後見知りおけ」

霧夜が女性に何者か訊くと、女性は自分の名前を霧夜に言った
霧夜は思わず「こ……なに?」と呟くと、女性が溜め息をつきながらもう一度名前を教えてくれた

「黄蓋じゃ。字は公覆。……お主、ちゃんと儂の言葉を理解しとるか?」

「えっと……今イチ理解出来てないですね、ハイ」

霧夜は女性に謝った後、恐る恐る女性に訊いてみた

「えっと……こうが……いさん?」

「なんじゃ?」

「ところでここって……どこなんです?」

「ここは荊州南陽^{けいしゅうなんよう}。我が主、孫策殿の館よ」

女性が答えてくれた場所を聞いた霧夜は、嫌な予感がした為、女性に再び訊いてみた

「：もしかして、黄色の黄と蓋って書いて、黄蓋さんって言ったりします？」

すると女性は「そうじゃ。良く分かったの」と言った

（：つまり、この世界は三国志の世界。だが、何故女性なんだ：？）

霧夜が色々考えているのも実は無理は無い

何故ならこの世界は〈恋姫＋夢想〉と呼ばれる作品の世界で、三国志に出てきている武将達が女性になっている世界なのだから：

すると、女性：黄蓋が「お主、名は」と霧夜に言ってきた

霧夜は突然だったので「へっ？」と言うと、黄蓋は「名前じゃよ、名前」ともう一度言ってきた

「あっ、はい。霧夜・T・ゼクトです」

「きりやていー……なんじゃ？」

「えっと、何でも無いです……俺の名前は遠坂霧夜です、黄蓋……さん」

黄蓋は「ほう：」と言った後、何かを確かめるように言った

「姓はどう、名はさか、字はきりやか」

「いや、違います。姓が遠坂で名前が霧夜で……字はありません」
霧夜が言うと、黄蓋は「字が無いだど？ ふむ……」と考え始める
少しして、黄蓋が霧夜に訊いてきた

「では更に質問じゃ。昨日の夜、あんなところで何をしていた？」

「あんなとこって？」

「この街の外れ。最近、盗賊が出ると噂が出ている場所じゃ」

黄蓋から自分の記憶に無い事を聞かされた霧夜は呆けながら言った

「…俺、そんなとこに居たんですか？」

「ふむ？ どういうことじゃ？」

黄蓋が訊いてくるが、霧夜は記憶の途切れる直前までを思い出して
いた

「（どういうことって……記憶が確かなら、俺はアルテミスによっ
て世界を旅立った筈だ。そして目を覚ましたらこのベッドで寝てい
た、と……）…考えても訳分かんねえな、これが」

「何をブツブツ言っとる。……儂の質問に答えられんのか？」

黄蓋の言葉に霧夜は「俺自身、今の状況が把握しきれてないので……」
と答えた

黄蓋は霧夜の答えに対し思わず「ううむ……」と唸り始めた
その時……

「おっ、起きてる起きてる。おはよう少年」

部屋の扉が開き、桃色の髪の女性が入って来た

霧夜はいきなり部屋に入って来た女性に「えっと、おはようございます」と無難な挨拶をした

桃色の髪の女性は黄蓋の隣に立つと、霧夜を見ながら言った

「…で、気分はどう？」

最初に部屋へ入って来た黄蓋同様、桃色の髪の女性は霧夜に訊いてきた

「とりあえず大丈夫です。ただし、現状の把握が混乱し過ぎている感じです…」

霧夜の答えに桃色の髪の女性は「へえ」と言った

「その割にははきはき答えるのね」

「自分でも何でこんなに落ち着いてるのか不思議なくらいですけど……ところで、貴女は一体…？」

霧夜が訊くと、桃色の髪の女性は答えた

「私は孫策。字は伯符^{はくふ}。この館の主よ。貴方の名前は？」

「俺は遠坂霧夜。えっと……姓が遠坂で名前が霧夜。字はありません」

霧夜が桃色の髪の女性…孫策に自分の名前を教えると孫策は「へえ？ 珍しい名前ね」と言った

「（日本ならちゃっかり居そうな名前だが…：にしても、アルテミスと言いアポローンって神と言い…）…意味分かん」

「私も意味分かん。…貴方何者なの？」

孫策に訊かれた霧夜は内心焦り始めた

（ジェイルの時みたいに転生者という事を話すべきなのか…：それとも生前の事を話すべきなのか…：この場合は、後者にしとくか）

何を話すべきが決まった霧夜は孫策に生前の事を話す事にした

「えっと…：尾乃田高校2年、遠坂霧夜。おのだ家族は姉妹含め4人家族で、両親は既に他界。得意科目は特に無し…：って感じですね（どうでもいいが、実は母親方の親戚が生活費等を援助してくれてたりしてるらしい…：俺自身、その親戚に会った事ねえが…）」

霧夜は話し終えると、2人の反応を見た
すると…

「…言っていることの半分すら理解できんな」

「だね。…もしかして狂人かな？」

結構な言われようだった

「至って普通な気が…」

霧夜が呟くように言うと、孫策は「ふくん」と答えた

「…ところで霧夜」

「なんすか？」

「貴方が倒れていた時の事、聞いた？」

「詳しい事は聞いてないです」

霧夜がそう言うと、孫策が「なら説明してあげる」と言ってきたので、霧夜は思わず「お願いします…」と言った

「じゃ、もう一度貴方に質問しましょう。…貴方は何者？」

孫策の質問（という名の訊問）に対し、霧夜はちよつと悩み始めた（全く、どう説明すりゃいいんだよ…手っ取り早く転生者って事話した方が楽な気がしてきたな…）

最終的に霧夜は「とりあえず…」と言って、2人に説明（？）を始めた…

【第貳拾肆話】次なる世界は…（後書き）

〔後書き座談室〕

という感じで、第2章〈恋姫＋夢想編〉の開始です

響介「恋姫＋夢想ってなんだ？」

亮一「確か、俗に言うギャルゲーってやつじゃないか？ 教えて偉い人！！」

響介「阿呆が」ハリセン所持

亮一「あべしっ！？」

相変わらず馬鹿な奴め…

響介「んで、コラボ再開が2～3話後だな？」

醤油う事

響介「はあ……あつ、忘れるとこだった。十六夜 白爛さん、レテ イウスさん、竜華零さん、朱神優希さん、ヴィスさん、感想ありがとうございました」

いきなり感動の数が増えたから感動したね（涙）

響介「そうかよ……では、次回もよろしくお願いします」

【第貳拾伍話】証明（前書き）

予想以上に長くなりそうなので、2つに分けました

霧夜「つまり、コラボ再開に間に合わないのか？」

そこは上手く調整する

霧夜「ふーん…」

ジェイル「では、本編の開始だ」

霧夜「何故ジェイルが居るんだよ！？」

【第貳拾伍話】証明

孫策と黄蓋の2人にあまり良いとは言えないが説明を終えた霧夜は夜にもう一度訊問される事になり、その間に自分自身の事等の整理をする事になったのだが：

（——にしても、説明してる時に「俺はこの時代の人間じゃない」って言ったからな……さて、どうしたもんな……とりあえずなんかこの時代に無い物ってねえかな……？）

霧夜は前にアルテミスから受け取ったポーチにあった筈の物を取り出す

「そーいや、こいつって俺の転生者（仮笑）になる前に持ってたやつ同型だよな……」

そう言っって霧夜が懐かしむようにポーチから取り出したのはアルテミスから貰った赤黒でスライド式の携帯だった

「……今思い出したが、こいつ（携帯）に誰か登録されてんのか？」

霧夜は興味本意に携帯の電話帳を見てみる事にした
すると：

「なんで、俺の中学時代の知り合いの名前が幾つかあんだよ……しかも、俺個人でも親しかった人達の名前も幾つかあるし……あいつ（アルテミス）って一体何者なんだ……？」

アルテミスに対し疑問を抱きながらも、霧夜は携帯で一体何が証明

が出来るか考える事にした

（電波は来てる……訳ねえか……ん？ 待てよ、確かへりりなの）
世界の時には電波が来てた筈だよな……なら、なんで今は使えな
いんだ……？ てか、この世界に疑問多過ぎ……孫策や黄蓋と言え
ば三国志で呉の武将の筈だよな？ なのに何で女性なんだよ……）

思っていた以上に状況把握が進まない霧夜は一度深呼吸をし、携帯
の機能チェック等を始めるのだった……

――――
悩みに悩んだ挙げ句、霧夜は携帯の写メ機能を使ってみるという事
しか浮かばなかったので、暇潰しをして時間を潰す事にした……
そして時間帯は夜になり……

「――さて、訊問の時間なんじゃが……？」

「じゃが……？」

「お主は一体何をしとるんじゃ……」

「何って……暇潰しに瞑想してたですが？」

「昼飯も食わずにか……！」

「……えっ?!」

霧夜は慌てて外を見ると、綺麗な夜空が広がっていた

「……集中し過ぎた」

霧夜の呟きに黄蓋は溜め息をつき、孫策は驚いていて、更に黒髪で眼鏡を掛けた孫策と黄蓋の中間位の露出が多い服装の女性が関心していた

「…で、あんたは？」

「私は周瑜しゅうゆと言う。貴様の尋問官の1人と思ってもらえば良い」

霧夜は黒髪の女性…周瑜の言葉に「へえ」と言った

「俺がよくなるか分かんねえが、とりあえずよろしく」

「どうやら、今の状況がちゃんと分かっているようだな」

「まあな。…んじゃ、何でも聞いてくれ。答えられる事はある程度答えるから」

周瑜は「うむ」と頷いた

「…では、まず生地を聞かせてもらおう」

「日本にある黄冬おうどうって街で生まれた」

「日本……それは何処にある国だ？」

「えっとー……多分、こっから東の方に行って海を渡ったところにあると思う」

「東方……と言えば、遙か昔に、徐福じょふくが向かったとされる蓬萊の事

か」

（徐福って誰だ…？ 聞いた事はあるんだが…まあ別に誰でもいいか）

霧夜が「多分間違っていないんじゃない？」と答えると、周瑜は「ふむ…」と何やら考え始めるが、すぐに霧夜へ言った

「…では、次の質問に移ろうか」

「ああ」

「2人より、貴様が未来から来たという話や、違う世界云々という話を聞いたが、それを証明する事は出来るか？」

「（やっぱりか…さて、瞑想前に考えておいたやり方で大丈夫か…？）なあ、証明する際に色々言わないで欲しいんだが…」

「どう証明するのか知らないが、善処しよう」

霧夜は周瑜の言葉に少し悩んだが、結局携帯を取り出す事にした

「これは携帯電話って言うので、遠く離れた人と会話出来る道具なんだが…」

「なんだが？」

「残念だが電波が来てないから通話出来ないんだ」

孫策が霧夜の説明の途中に「でんぱ？ 何それ？」と訊いてきた

「電波ってのは……簡単に言えば、目には見えない波動みたいなもの……かな？」

「波動……氣のようなものか？」

「なんか違う気がするが……多分そんな感じ（本当は代替する言葉が浮かばなかったただけなんだが……なんかニュアンス的には間違っ
て無い筈……）」

すると周瑜が「出来ないならば、それは証明にはならんか？」と言
ってきたので霧夜は「ですよね」と内心呟いた

「慌てんなって。携帯には通話だけじゃなくて、他にも出来る事があるんだよ」

霧夜はそう言うと、携帯を指差す

「これには写真ってのを撮る機能があるんだが……とりあえず撮ってみる？」

「うん！ やってやも「伯符！ 迂闊に話に乗るな！」冥琳のケチ……」

「（いや、流石にケチって問題ではない気がするんだが……）……んじや、どうすんよ？」

霧夜が訊くと、孫策が「やるやる。……冥琳、ちょっと黙ってなさい」と言い、それを聞いた周瑜が「黙ってはいられんな。お前にもしもの事があつたらどうする？」と正論を言い、黄蓋も「儂も公謹こうきんの言

葉に賛成じゃ」と言っただので、孫策が拗ね始めた

「そう拗ねなさんな。まず儂が毒味役をしよう。それで何も無ければ策殿もやってみれば良い」

「…分かった。じゃあ祭がやってもらいなさい」

「うむ。…では遠坂。儂をしたいようにせい。…ただし、儂の身体に変化があれば、すぐさま貴様をくびり殺す。覚悟せいよ？」

黄蓋の言葉に「了解」と答えた霧夜は携帯の撮影機能をセットしたそして黄蓋が少し緊張した面持ちで霧夜の前に立ち、霧夜は携帯で黄蓋を撮った

「「「…：…っ！？」」」

携帯の撮影した際に鳴る音に3人は驚く中「撮れた」と霧夜は言った

「な、なんだ今の音はっ！？」

「変な音…」

「聴いた事の無い音だな。…それは楽器の一種か何かなのか？」

「まあ楽器に良く似た事も出来るんだが、先に写真の方だろ？ ほれ」

そう言って霧夜は撮った写真画像を黄蓋の方に差し出し、3人に見せる

すると孫策と黄蓋が「…わーっ！ 祭が居る！」 「おおお…：…儂は

こんな顔をしとるのか…」と驚き、周瑜は「…凄いわね。これは妖の術？」と2人同様驚きながらも霧夜に訊く

「妖とかじゃなくて、科学の力……かな？（寧ろ、妖の術的なのはそこにある獅子王なんだが…）」

霧夜は内心苦笑いをしながら周瑜に答えた

「なんだそのかがくというやつは。道術や仙術のようなものか？」

「どっちかって言えば学問に近いと思うかな？　ちょっと説明するか。俺が居たところは科学が進んで——」

それから数十分程、霧夜は携帯やテレビ、車等の科学的（？）な物に関して話を続けるのであった…

【第貳拾伍話】証明（後書き）

〔後書き座談室〕

ジェイル「今回は作者とやらのお陰で前書きと座談室の両方に出させて貰った、ジェイル・スカリエッティだ。よろしく頼むよ」

響介「何故にだし…」

亮一「まあ別にいいんじゃない？　今回はあの人に任せて俺達は休もうや」

響介「…分かった」

―響介&亮一退室―

ジェイル「さて、感想の方だが……ヴィス君、竜華零君、時空の旅人君、レティウス君が感想をくれた。有り難うと言っておう」

お前1人だと嫌な感じがするから作者登場！

ジェイル「おや、もうこんな時間か。では読者の皆様方、これから霧夜の活躍を楽しみにしていてくれ」

えっ、ちょ、終わった！？

ジェイル「フツハハハハハ」

【第貳拾陸話】 天の御遣い

霧夜達は暫く科学的（？）な話をしていたが、いつの間にか管輅と言う占い師による占いの話になっていた

「——んで、その占い師の占いつて？」

「管輅曰く“二筋の流星と共にやって来る者はこの乱世を鎮めるへ天の御遣い”である」とな」

「ん？ 二筋って事は…」

周瑜の言葉に霧夜は疑問を抱く
すると黄蓋が

「お主以外にもう1人天の御遣いが居る……と言う事じゃな」

と霧夜の疑問に答えた

「まあ、初めは信じてなかったんだけどね。白い光と共に貴方が現れた。なら、貴方が天の御遣いという存在……ううん、そういう存在になれるって事」

「そういう存在に？ ……成程、そういう事だな？」

霧夜は周瑜に「答えはこれで合ってるな？」と言ってるような視線を向けながら言うと、周瑜は「…分かったようだな」と微笑しなから答えた

「一応な。…んで〈天の御遣い〉とやらの存在になれる俺はこれからどうすりゃよろし？」

「それは我等が主の意志によるな」

周瑜はそう言うと、孫策に「どうする？」と訊く

「元々、考えていた事を実行するわよ。その為に拾ってきたんですもの」

「ふむ…まあ好きにすればよろしい。儂は特に反対はせん。…何より、儂はこやつを気に入った」

豪快に笑いながら黄蓋は霧夜の肩をドンツと叩く

霧夜は予想以上の痛みに思わず苦笑しつつ「んで、俺はどうなるん？」と訊くと、孫策が「その前に質問」と逆に訊いてきた

「…貴方はこれからどうするつもりで居るの？」

「特には無い……が、成し遂げたい事はある」

「成程。…では、行く宛はあるのか？」

「有るわけ無い」

「生きる術は持っておるか？」

「有るには有る」

霧夜の対応に孫策は「…じゃあさ。暫く私達と行動しない？」と言

ってきた

「…つまり？」

「貴方を保護してあげるって事」

「…俺をか？」

「そっ。1人で生きるよりかはずっと良いんじゃないかしら？」

孫策の提案に霧夜は「…確かにな」と呟く

「なら決定。…ただし幾つか条件があるわ」

「…聴こう」

「ええ。まず1つ目。貴方の知恵を呉の統治に役立てる事」

「別に構わないが…他に条件は？」

「もう1つは私に仕えている武将達と、貴方から率先して交流を持つ事」

霧夜は孫策の言った交流を持つ事に対し「どういう事だ？」と訊いた

「有り体に言えば、口説いて子作りに励めって事ね」

「はぁ!？」

霧夜が驚いていると、孫策が説明を始めた

「貴方の胤を呉に入れるの。そうすれば、呉に天の御遣いの血が入ったって事を喧伝出来るでしょ？」

「：つまり、外戚政治みたいなものか？ 俺は子作りに専念し、孫呉に繁栄をもたらせば良いって事か？」

「そういう事。：あ、勿論嫌がる女の子にするのは駄目だからね？」

「んな事は百も承知だ。まさか、それが条件か？」

霧夜が訊くと、孫策は「そ♪」と笑顔で肯定した
霧夜は溜め息をつきながら「こんなん良いのか？」と周瑜に訊く
すると

「良いとは言えんが、伯符の言う事にも一理あるからな」

「何が一理ありだよ……ただへ天の御遣いっていう“何か分からないけど凄そうなモノ”に対して、畏敬を呼び起こそうって事なん
だろ？」

「：良く分かったな」

「まあ、な……んじゃ、俺をその天の御遣いとやらにするって事は、何かしらの神秘と天の御遣いの血統という二つが手に入るって事だ
ろ？」

霧夜の言葉に周瑜は「そういう事だ」と肯定した

「呉に天の御遣いの血が入ったという認識が世に広まれば、庶民の

心の中に、呉の人間に対しての畏怖の感情が起こる。その畏怖、畏敬の念は呉にとって大きな利益になり得るだろう。…今後の事を考えれば、伯符の判断もあらがち間違っているとは言えん」

周瑜の長い説明の直後、黄蓋が「貴様も男なのだから、公認で女とイチャイチャできて嬉しいじやろう？」と霧夜に追い討ちを掛けてきた

「まあ……嬉しく無いと言えば嘘になる」

「だけど、あくまで同意の上だからね？」

「勿論分かってる。寧ろ嫌がってるやつにそんな事するのは俺自身嫌だからな」

「なら良いんじゃない？ 私はいつでも良いわよ♪」

「儂も構わんどぞ」

「構わんどって言われてもな…」

「…まあ、その辺りについては、追々話し合えば良いだろう」

周瑜の言葉に「そうしてけると助かるな」と霧夜は言う、すると孫策が「あら？」と意外そうな声を上げた

「大乗り気になると思ったのに、案外そうでも無いのね？ ウチの可愛い女の子達と、公認でイチャイチャ出来るんだから、もっと喜びなさいよお」

「…正直言えば、嬉しい。…だが、結局のところは俺の胤だけを求められてるって事だろ？ 他の男なら恐らく素直に喜ぶと思うが、俺個人としては素直に喜べないんだよなあ…」

「ほお。案外、骨のある事を言いよるの」

「…それに、誰かに護られる感じがするってのは性に合わないんだよ」

霧夜の言葉を聞いた孫策は「へえ…」と関心した後、霧夜に「…で、受けるの？ 受けないの？」と訊いてきた孫策の言葉に霧夜は…

「その条件…受けよう」

——こうして霧夜は、天の御遣いとなった…

—オマケ1—

「じゃ改めて自己紹介。姓は孫、名は策、字は伯符、真名は雪蓮^{しえれん}よ」
♪

「ほお。真名迄お許しになるのか？」

「だって身体を重ねる事になるかもしれない男なんだし。それぐらい特別扱いしてあげないとね♪」

霧夜は何か嫌な予感をしつつ、恐る恐る「なあ、まなって？」と訊いてみた

「真なる名と書いて真名と読む。…私達の誇り、生き様が詰まってる神聖な名前の事だ」

「自分が認めた相手、心を許した相手……そういった者だけが呼ぶ事を許す、大切な名前じゃよ」

「へえー…」

「因みに、他者が真名を知っていても、その者が許さないと呼んではいけない。そういう名前でもあるわ」

「成程……こりゃ、責任重大ってとこだな…」

霧夜の呟くような言葉に孫策が「そう思える？」と訊く

「そりゃそうだろ……相手に信頼された証なんだ。それを裏切るって事があったゃいかんだろう？」

「ふむ……中々。よくぞそこまで考えが回るものだ」

周瑜の褒め言葉（？）に霧夜は「そりゃどうも」と若干ふてくしながら言った

「…それじゃ私の事は今後、雪蓮って呼んでね」

「了解だ、雪蓮殿」

霧夜の呼び方に孫策…雪蓮は「雪蓮殿、か…」と小さく呟いた…
そして霧夜は黄蓋…祭さいの事は「祭さん」と、周瑜…冥琳めいりんの事は「冥琳殿」と呼ぶのであった…

―オマケ2―

3人との自己紹介が終わった直後…

「孫策様…。袁術さんが呼んでるみたいですよー」

部屋にほんわかオーラを纏った女性が入ってきた

雪蓮は「袁術が？ 用件は何？」と訊くが「さあ？ また何か我儘でも言うんじゃないですかねえ？」と女性は答えた

「…全く。私はあいつの部下って訳じゃないのに。こき使ってくれるわね」

雪蓮の愚痴に「時が来る迄の辛抱だ、雪蓮」と冥琳が言うと、「分

かってるわよ。けど……むかつくなー」とブツブツ文句を言いながら雪蓮は振り返りもせずには部屋を出て行った

「…現状って、一体何がどうなってんだ？」

霧夜の言葉に冥琳が自分達を取り巻いている状況を淡々と霧夜に説明した

その後…

「私の姓は陸、名は遜、字は伯言、真名は穩のんって言います。穩とお呼び下さいね、御遣い様♪」

「あ、どうも。…俺は遠坂霧夜です」

霧夜は女性…穩（陸遜）と互いに自己紹介をしたのであった…

※因みに穩の呼び方は「穩殿」です

【第貳拾陸話】 天の御遣い（後書き）

〔後書き座談室〕

天使「レティウス様、感想有り難うございました！」

さて、遂に次回から連続コラボ再開だが…

響介「作者の事情により、コラボの順番が変更になったそうだが、すまない」

すみません…

亮一「んじゃ、今回はここまで。次回もよろしく！」

天使「さよなら〜♪」

【第貳拾漆話】元異形宿しな少年とチート持ちな少女（前書き）

さて、今回からコラボ再開です！

天使「ちなみに、今回コラボするのは十六夜 白爛様が先日完結になった『魔法少女リリカルなのは くとある少女はチート持ち』とで、後書きで色々と説明させていただきます」

それでは、本編スタート！

【第貳拾漆話】元異形宿しな少年とチート持ちな少女

霧夜が呉で〈天の御遣い〉になって2、3日経った

霧夜はちよつとした野暮用で雪蓮の屋敷にある庭に大急ぎで向かっていた

理由は今から少し前の時間に遡る…

昼食を食べ終えた霧夜は、老夫婦と会話をしていた雪蓮に「老夫婦の為に写メを撮って欲しいの」と頼まれたが、霧夜は「写メより絵の方が絶対に良い」と言い、老夫婦の絵を描く事になり、霧夜は無事に描いた絵を老夫婦に渡し、老夫婦は嬉しそうに帰って行った
その時、ポケットから震動がしたので霧夜は慌ててポケットからマナーモードにしていた携帯を取り出す

携帯の画面には〈幼女〉と名前があったが、霧夜はその時不思議に思った

（なんで電波がなかった携帯にいきなり…？　まあ、電話に出てみれば良いか）

霧夜は雪蓮と別れ、その後すぐに通話ボタンを押した

『霧夜さん、今まで無事でしたか？』

「そう思ったならお前の首を絞める」

『仕方なかったんです！　天界がちよつと慌ただしい事態で、通信が上手く出来ない状況に…』

「天界が慌ただしい事態だと？」

『まあ、自分はアルテミス様に無茶苦茶働かされてるんですが……天界全体がまるで大晦日の大掃除みたいな感じですよ！！』

「成程、それなら仕方ないな。んで、何の用だ？」

『実は、もうすぐ霧夜さんのお知り合いの転生者の方がそちらへ行くそうですのでご連絡を……それと、後程携帯に「ヘイレギュラー発見器」のアプリを送りますので登録しといて下さい。更にポーチへ世界移動用の剣も送っておきます』

「分かった。んじゃな、幼女」

『だから私は幼女Z』

霧夜は通話を切ると送られてきたアプリを登録すると携帯から何故か監理局の白い魔王砲撃の叫び声がいきなり聞こえてきた

「この着メロを選択したあいっ（アルテミス）の考えが分からん……」

霧夜は登録したアプリの画面を見ると、先程幼女の言っていた転生者の居ると思われる場所が描かれていた

「ここって、場所的に雪蓮殿の屋敷……って、この場所は無茶苦茶ヤバいんじゃない？」

霧夜は携帯をポケットに突っ込むと、雪蓮の屋敷に向かって走り出し、そして現在に至る……

霧夜が広場に着くと、そこには1人の少女の背中が見えた

「（こいつが幼女の言ってた俺の知り合いの転生者……一体誰だ？）
…おいあんた、そこで何してんだ」

霧夜の言葉に少女は霧夜に振り向く
そして…

「遠坂……君!？」

少女は驚きながらも霧夜の名前を言った

「あんた、何で俺の名前を知ってんだ…」

霧夜は左腕を少女から隠すような構えを取りながら少女に訊く
そして少女の視界からは見えなくなった霧夜の左腕では、ゆっくり
と魔力を収縮し始めていた

「私はセレナ。セレナ・アーヴェンクルス」

「（おい、まさかアーヴェンクルスって…）…悪いが、俺はアーヴェ
ンクルスと言う名前を名乗っている事についてや何故俺の名前を
知ってる事や色々問い質したいんだが？」

霧夜は左腕で収縮した魔力を指の先へ5つに分割し、師匠直伝の魔
法攻撃の準備を整える

それに対し少女…セレナは霧夜を見ながら言う

「そして、私の転生前の名前は……空乃撫子よ」
そらのなでしこ

霧夜はセレナの言葉を聞いた瞬間、左腕で備えていた魔力が一瞬の内に全て消しきっていた

「まさか……あの空乃さんなのか？」

霧夜が呆然とする中、セレナは頷いた
その時…

「ん？ 遠坂。お主、そこで何をしとる？」

「…あつ、さ、祭さん!？」

広場を偶々散歩していた祭と出会った霧夜は「後できちんと説明すりから!」と言い、セレナを引っ張りながら広場から走り出した…

「…さて、話してくれますか？ 空乃さん……いえ、今はセレナさんの方が良いですね？」

「そうしてくれると助かるわ」

霧夜はセレナを連れて雪蓮から与えられた自室へと来ていて、セレナから色々聴く事にした

そしてセレナは自身に起きた出来事を霧夜に語る
最後まで語った時には既に夜の時間帯になっていた

「——とまあ、こんな感じね。：遠坂君。貴方こそ何故？」

「あんまり詳しくは話せないんですが、まずは今の俺の名前を。今の俺の名前は霧夜・T（遠坂）・ゼクトです」

「ゼクトって……まさかあのへネギま！の！？」

セレナの言葉に霧夜は苦笑しながら頷く

「詳しい事は後程後書きで教えますが、今の俺には為し遂げたい事があります」

「いきなりメタ発言の直後なんだ……で、為し遂げたい事って？」

「椿姉を助け出す事」

霧夜の言葉にセレナは一瞬の内に霧夜の首根っこを掴む

「椿さんを助け出すってどういう事なの！？ 答えてよ遠坂君！！」

セレナが問うが、霧夜は何も答えない

そしてセレナは霧夜の首根っこを離すと、その場に泣き崩れた
そんなセレナを見下ろす霧夜の右手からは、いつの間にか赤い滴が
ゆっくりと滴り落ちていた…

セレナが泣き崩れ、霧夜が右手から血が滴り落ちていた時、廊下では祭が居た

祭はゆっくりとその場から離れると、とある部屋に向かった
そして部屋に入ると、雪蓮と冥琳が座っていた

「あら、祭。どうしたの？ そんな暗い顔をして」

雪蓮が祭に訊く

すると祭はいきなり2人の目の前で頭を下げた

「えっ！？ ちょっと、祭！？」

雪蓮が慌てる中、祭は頭を下げた状態で言う

「お主ら2人に頼みたい事がある。どうか、遠坂がこれから何をしても信じてやってほしいのじゃ」

祭の言葉に「どういう事ですか？」と冥琳が訊く

「詳しくは儂も言えん。じゃが、頼む！」

祭が頭を下げながら願いを言ってきた事に驚いていた雪蓮だったが…

「…良いわよ」

「ちよつと雪蓮！？」

「別に良いじゃない。…祭がここまでするって事は、それなりの事情があるって事でしょ？ それに……霧夜はれっきとした私達の仲

間。だから、仲間は信じないとね♪」

雪蓮の言葉に冥琳は「…分かったわ」と答えた
そしてこの後、霧夜がセレナを雪蓮達の元と一緒にいき、セレナや
転生者の事を話したが、驚かれただけで、決して何も起こらなかった…

—オマケ1—

「霧夜」

「どした？ 雪蓮殿」

「例え貴方がさっき説明してくれたへてんせいしゃ〜だとしても、
私達は貴方を仲間として信じてるから。それだけは覚えておいて」

「…ああ。分かった」

―オマケ2―
セレナは雪蓮から霧夜の自室の真正面にある空き部屋を提供して
もらった

そして霧夜と部屋の前で別れる時…

「…セレナさん、椿姉を助け出すのに、協力してくれないか？」

「椿さんには妹と一緒に御世話になったんだもん。助け出すのに協力するのは当たり前」

「…有難う。んじゃ、お休み」

「はい、お休みなさい」

【第貳拾漆話】元異形宿しな少年とチート持ちな少女（後書き）

〔第4回『天使ちゃん発表会』IN後書き座談室〕

霧夜「今回の本編に関して色々と説明しますが、分からない場合は畏無に『処刑状』と題名に書いてご連絡下さい」

響介「その前に謝辞だ。レティウスさん、感想有難うな。んじゃ天使、頼んだ」

天使「では、今回の本編に関して説明させていただきます。今回の内容は十六夜 白爛様からのリクエストに答えながら色々作者が考えつつ執筆した内容です。更に、今回から『魔法少女リリカルなのは』とある少女はチート持ち」の主人公であるセレナ・アーヴエンクルスさんが此方の作品の主要メンバーとして追加されます」

亮一「ちなみに、ちゃんと許可貰ってるからな」

それと、セレナと霧夜との詳しい関係はまたの機会にと言う事でんじゃ、セレナ。これからよろしく頼むぞ（へーへ）b

セレナ「まあ、そういう事だから、白爛で完結した私の物語共々、これからよろしくね」

霧夜「んじゃ、次回もよろしく！」

セレナ「またね」

【番外編】異世界をさ迷いし異形と守護者（前書き）

今回の番外編は混沌の魔法使い様の作品『夜天の守護者』で現在戦っている最終決戦が終わった後でのコラボとなっている感じです

天使「それではどうぞ♪」

【番外編】異世界をさ迷いし異形と守護者

—ここはとある荒野

そこには、要塞のような建物が存在していたが、既に廃墟と化していた…

そんな廃墟の中から2人の人物が姿を見せる

1人は貴婦人風ドレス姿の欧州系の女性で、もう1人は髪の赤い女性だった

「——全く、歩く事もままならぬほど力を吐き出すとは……らしくないのであります」

欧州系の女性が髪の赤い女性を見ながら言う

すると、髪の赤い女性が左手に着けていた指輪から男声の声が聞こえてきた

「『そう言うな。仮にも一党の長。侮り難き強さではあったのだ』

指輪の声に髪の赤い女性が「ええ」と同意する

「出し惜しみしてたら、助けも間に合わなかったでしょうね。でも、ま……前哨戦でへばってもいられないか。ここからが本番なんだから…」

その時、2人の目の前の空間に亀裂が入り、亀裂の中から髑髏の文様を胴体に持つ異形が姿を見せた

女性2人は突然現れた異形に対し、即座に対応しようとした
その直後、2人の後ろから声が聞こえてきた

「私と似た波長がしたからてつきり半身かと思ったのに……まさか
〈負の神ヴェルガディオス〉とは……しかも、中身が残念な程朽ち
てるときた…」

2人が慌てて振り向くと、1人の女性が立っていた
女性は振り向いてきた2人を見る

「貴女達は……成程、この世界の把握は出来た。すまないけど、貴
女達にはコレと戦かわせる訳にはいかない。だから、大人しくこの
場から逃げて。反論とかしてる時間は無いから」

女性に言われた2人は大人しくその場から走り出す
そして女性は異形を見る

「風の噂では……って、噂程度では意味無いっか。悪いけど…」

女性はいつの間にか持っていた刀の刃先を異形に向ける

「この世界の言い方を借りれば、貴方を討滅させてもらおうよ？」

そして女性は異形と戦いを始めた…

――――――――――少しして、異形…ヴェルガディオ
スが咆哮を上げる
すると、ヴェルガディオスの体から無数の異形が現れる

「人だった存在のネクロを体から出すって……それ、神としてどう
かと思うが？　まあ、負の神だからこと出来る特権って事かな？」

女性はヴェルガディオスから出てきた異形…ネクロの一体を斬りな

がら言う

すると、無数に出てきていたネクロが突然半分程消えた
女性は地面にトンと爪先を当てると、女性の体が浮き出し、女性は
空に上がる

女性が空に上がると、1人の男性が複数のネクロを一気に消し去っていた

（この感じは…）

女性が思いだそうとしていると、男性が近づいてきた

「君、大丈夫だったか？」

「（…思い出した！）別に問題無いわよ？ 神王様」

「私が神王と知っているのか？」

「伊達に長生きはしてないわよ？」

男性は突如女性の後ろに現れたネクロを持っていた剣で斬る

「あら、助かったわ」

「それは何よりと言っておこう…：では、君に訊きたい。私が神王と知っているのなら、協力してくれないか？」

男性がヴェルガディオスを指差しながら女性に訊く

すると女性は男性を後ろから襲おうとするネクロを刀で突き刺す

「その申し出、受けさせてもらうわ♪」

「それは助かった」

男性と女性は互いの背中を守るように背中を合わせる

「とりあえず自己紹介。私はヴェルガディオスとは似て非なる存在で、名前は無いわ」

「なら私も。私の名前は八神龍也^{やがみ たつや}。君も知っての通り神王であり…」

男性：龍也は目の前に来たネクロを斬る

「死ネ！守護者アアアア！！」

龍也は襲い掛かって来た先程とは違うネクロを斬り伏せる

「…ネクロの言う通り、夜天の守護者だ」

「夜天？ …成程、把握したわ」

女性は刀と鞘の二刀流で複数のネクロを一気に斬り散らす

「なら、あの朽ち果ててるヴェルガディオスの相手は神王様…いえ、守護者様に任せるわよ？ 私はネクロ全ての相手を」

「分かった」

そして龍也はヴェルガディオスに向かって飛んで行き、女性は宣言通りネクロを全て相手し始めた…

ヴェルガディオスの前に着いた龍也は自身のデバイスであるオメガブレードを構える

「彼女が言っていた通り、確かに朽ち果てているな……ただ破壊するだけの残骸と化した貴様だが、私は容赦せずに、全力で消し飛ばす！」

そして龍也はヴェルガディオスに斬り掛かった…

暫くして、無事龍也はヴェルガディオスを、女性は全てのネクロを倒し終えた

「協力感謝する」

「別に構わないよ。…さて、守護者様はこの後自分の世界へ帰還かな？」

女性の言葉に龍也は「ああ」と答える

「それなら、帰還される前に1つ。もしこの先、私の半身であるへ遠坂霧夜」に会ったら、彼の知り合いとなってもらいたい」

「…会えたら、な」

龍也はそう言うと、いつの間にか持っていた剣で空間を裂き、自分の世界へと帰っていった

アインスト

女性：ペルセインも異形の姿になり、世界から転移した：

後に守護者はペルセインの言葉通り、彼女の半身である遠坂霧夜と出会う事になるが、それはまた先の話：

【番外編】異世界をさ迷いし異形と守護者（後書き）

〔後書き座談室〕

はい、と言う事で混沌の魔法使い様とのコラボでした

響介「龍也さんとは久し振りだな」

そういや響介は以前コラボしていただいたもんな

響介「あん時は本当に作者が迷惑を掛けてすみませんでした…」

では、もう暫くコラボが続きますが…

亮一「今回の番外編みたいなコラボも可能性の1つなので、ご了承下さい！」

響介「そして、十六夜 白爛さん、レティウスさん、時空の旅人さん、黎音さんは感想有り難うございました」

次回のコラボの相手はレティウスさんです

響介「内容は敢えて伏せるそうだ」

亮一「んじゃばいなら」

普通にまた次回と言えんのかお前は…

響介「だから天然馬鹿なんだよ」

亮「（。Д。）」

【第貳拾捌話】厨二には注意(?) (前書き)

今回はちよつと進展を

アルテミス「コラボ相手はレティウスさんよ」

セレナ「それじゃ、スタート♪」

【第貳拾捌話】厨二には注意(?)

霧夜はある日、とんでもない事態に巻き込まれた
それは…

「霧夜！ 前に貴方が言ってたへへいこーせかい」
「わ！」
「行ってみたい

「朝一番に無茶言いやがったよ!？」

雪蓮による平行世界への日帰り旅行計画であった…

「…んで、雪蓮殿。何故平行世界に行きたいと?」

「だって、セツちゃんもへいこーせかいの人なんでしょ?」

霧夜が「セツちゃんって誰だよ…?」と呟くと、後ろから誰かに学ランの裾を引っ張られる感じがしたので振り返ると…

「セツちゃんってのは私よ」

「セレナさんかいな!?!」

セレナの言葉に霧夜は思わずエセ関西弁でツッコミを入れてしまったその時、携帯が鳴ったので霧夜は雪蓮とセレナに「悪い」と一言告げると電話に出た

「もs『もしもし霧夜君。今から悪いんだけど、ちょっとある場所強制召喚させてもらうわよ』えっ、ちょっ!?!」

霧夜が電話相手に色々言おうとした時、霧夜の足元に突然穴が開き、そのまま霧夜は穴へと落とされた…

「うつ……ここ、は…」

いつの間にか気を失っていた霧夜が目を覚ますと、何故か倉庫の影みないな場所で倒れていた

状況把握をする為に思い出そうとした時、突然複数の声が聞こえてきた

「まったく、なんでこうなるかな俺は……」

霧夜は呟きつつもポーチから絶影を取り出し、声の聞こえてきた場所へと向かった……

声が聞こえてきた場所に着くと、8人の男が1人の少女を囲んでいた

(オイオイ……まさか、こんな場面に出会すとかマジねえよ……)

霧夜は物影に隠れつつも内心溜め息をつく
すると、少女の声が聞こえてきた

「あんたら、一体何が目的なのよ!？」

(ん? この声は……いや、まさかな? だとしても有り得ねえつて……)

霧夜は少女の声を聞き思わず1つの可能性が浮かんでくるが、それだけは有り得ないと強く思う事にする
が、8人の男の内の1人と思われる声が霧夜の可能性を肯定する事になる

「なあ、^{もみじ}椛ちゃん。俺と付き合ってくれないか」

(椛だど!?! まさか、ここは俺の生前の世界とでも言うのか……!?)

霧夜が内心驚いていると、少女…椛が「絶対嫌!」と答える声が聞こえてきた

「仕方ないな……なら、悪いけど死んで。椛ちゃんの御兄さんには俺等全員世話になったからさ……」

男の言葉を聞いた霧夜は物影から姿を見せた

「デメエら！一体何してやがる！！」

霧夜の言葉に全員が霧夜に注目する

「えっ、兄……ちゃん？」

（やっぱり、樫だったのかよ…）

「久し振りだな、くれない紅の殺人鬼」

男性が霧夜に向かって言う

「何その厨二丸出しの恥ずかしい呼び名。その呼び名を付けた奴のセンスが疑われるわ…」

「煩い！　だが、お前が居るのはちょうど良い！この樫ちゃんは俺等がお前に対しての人質として誘拐したんだ！　だから、変な動きを少しでもしてみろ。一瞬で樫ちゃんはある世へ片道切符旅行だ！
！」

男性の脅迫に霧夜は舌打ちをする

その直後、霧夜はいきなり右肩を銃で撃たれた

「くっ…！？」

霧夜は痛みに顔を歪めながらその場にしゃがみこむが、近付いて来ていた他の男に右手を蹴られ、絶影が手元から倉庫の隅の方に転がっていく

（痛てえな、オイ……てか、こいつらまさか全員転生者か…？）

霧夜は痛みに堪えながらも男達の素性に予想を立てていくが、その間にも霧夜は妹の柎の悲鳴を聞きながら男達によって腹を蹴られたり、脚や腕に刃物を刺されたりして、霧夜自身が既に身動きの取れない状況になっていた

（くそっ、全く体の身動きが効かねえ……こんな時こそ、力が必要なんじゃねえかよ……!!）

内心悔しがっていた時、突然霧夜の左目に強烈な痛みが霧夜を襲い始めた

「ぎっがああああああああああああ!!？」

霧夜の左目に突然痛みが襲い始めた原因は、左目に突き刺さったナイフだった

「兄ちゃん!？」

柎が呼ぶ中、霧夜は意識が朦朧となり始めていた

（もみ……じ……）

霧夜の意識が無くなる直前、霧夜は幻聴かも知れないが、その声だけはハッキリと聴こえていた…

「霧夜、待たせた。こっからは俺等に任せとけ」

意識の失った霧夜を1人の青年が何故かお姫様抱っこをしていた

「き、貴様は抹消者!？」

男達：転生者は突然現れた青年を驚くように呼んだ
抹消者と呼ばれた青年は転生者達を睨み付けながら言う

「テメェら、よくも俺の友達^{ダチ}をここまでしてくれたな……雪蓮、霧夜を頼む」

霧夜を友達と呼んだ青年は自身の後ろに居た雪蓮に霧夜を預けると、

何処からもなく青空の如く透き通った蒼色の刃の刀を取り出し、転生者達に向けて刃先を向ける

「さて、久し振りに俺はキレてるからな？ その少女を助けつつも俺の呼び名同様、テメエらを抹消してやるよ！」

青年：赤羽紅那岐は転生者達へ突っ込み始めた：
あかばね くなぎ

柊は学校帰りに突然意識を失わされた

そして気がつくと思覚えない倉庫に居て、両手は後ろで縛られ、脚には何故か鎖が巻かれており、鎖の先には鉄球がついていた

（まさか私、誘拐された……！？）

柊は倉庫にちょうど入って来た男達を睨み付ける

「おっ、目が覚めたみたいだな」

男の1人が言う

柊は男達に向けて怒鳴るように言った

「あんたら、一体何が目的なのよ！？」

「なあ、柊ちゃん。俺と付き合ってくれないか」

「（いきなりなんなのこいつら…）絶対嫌！」

「仕方ないな…：…なら、悪いけど死んで。柊ちゃんの御兄さんには俺等全員世話になったからさ…」

椛は男の言った言葉に耳を疑った

（兄ちゃんに世話になったってどういう…）

その直後、いきなり「テメェら！一体何してやがる！！」と懐かしい声の聞こえてきた方へ見た
そこには…

「えっ、兄…ちゃん？」

事故で亡くなった筈の兄…霧夜が居た…

そして現在、霧夜の友達と名乗った青年が椀の目の前で刀を持った状態で男達と対峙していて、霧夜は左目にナイフ、両足の太股には刺し傷、右肩に銃弾、全員は見てられない程の痣が出来て、今は桃髪的女性にお姫様抱っこで抱かれながら守られている
すると、突然男達の内の1人が椀に近付いて来るが：

「ネイカに言われてにある転生者を迎えに行ったと思ったら今度は
トール様から霧夜少年とその妹の救出依頼………ったく、俺は早急に
やらないかん事をしとるってのに……」

椀はいつの間にか自分の前に立っていた男性に驚く

「な、なんだお前は!？」

「全く、最近の転生者は礼儀がなってないな………仕方ない、お前さんに少し転生者としての礼儀を教えてやろう」

男性はそう言う。と椀の目の前でトンファーのような剣を何処からもなく取り出し、椀を守りながら右腕のみ（・・・・）で戦い始めた…

暫くして、転生者達は紅那岐達によって全員完膚無きまで倒され（ちなみに死んではない）、人質にされていた椀は既に気絶していたので男性によって自宅へと転位された
そして椀を守りながら戦っていた男性は紅那岐を見ながら言う

「お前さんがツール様の秘蔵っ子で、低級神共が噂してたへ反逆の神」か

「貴方はどちら様ですか？」

「その口調は止せ。さっきの口調の方が気が楽だ」

「ああ。んで、貴方は誰なんだ？」

紅那岐の言葉に男性は「その前に彼の治療だ」と言うと、紅那岐が何故か悔しそうな顔つきになった

「にしてもこういう事だ……霧夜の傷は粗方へ復元する世界」で元に戻った。だが、左目だけが全く元に戻らない…

紅那岐の説明を聴いた男性は「うむ…」と考えながら霧夜の左目に突き刺さっていたナイフを見ると、若干驚いたような顔になった

「これはまたけつたいな品物を…」

男性はナイフを掴むと懐にしまい、紅那岐を見る

「このナイフは天界から追放された挙げ句、地獄とは奈落とかに堕ちた神の道具……通称〈堕神器^{だしんき}〉の1つだ。とりあえずこれは俺が預かっておくからな」

男性の説明に紅那岐は驚くような顔をした後「それが原因で元に戻せないって事だな…」と呟く

「（これがあると言う事は、やはり…）おい〈反逆の神〉。これを霧夜少年の左目に付けた後、済まんが霧夜少年を頼むぞ」

男性の言葉に紅那岐は頷いた後「んで、貴方の名前聞いてないんですけど？」と男性に言う

「俺は橘悠。ではな〈反逆の神〉」

男性：悠はある物を紅那岐に渡した後、その場で転移した
紅那岐は悠から受け取った物：黒い眼帯を霧夜の左目に着け、雪蓮と一緒に転移するのだった：

【第貳拾捌話】厨二には注意(?) (後書き)

〔後書き座談室〕

亮一「おいおい本編が大変な事になってるぞ!？」

響介「悠を久し振りに見たな」

悠「俺も響介を見たのが久し振りなんだが？」

あんたら前作キャラは色々使えるからなwww

響介「否定出来ないな」

悠「しゃあなし」

亮一「なあ!?!俺の話聞いてます!?!」

さて、次回のコラボ相手は時空の旅人様です!

ですが、予定よりちょっと人数とか役割がアレなので急遽レティウス様の紅那岐君も加わります!

響介「許可は取った」

悠「勿論、双方にな」

では、次回もよろしくお願いします(^ー^)b

亮一「俺は無視ですか、そうですか(泣)」

【第貳拾玖話】 ほのぼのな日常…? (前書き)

今回は前回に引き続きレティウス様&時空の旅人様とのコラボです！

セレナ「コラボが終わった後にキャラ設定を載せるらしいね」

ネタバレ(?) 厳禁

セレナ「んじゃ、本編スタート♪」

【第貳拾玖話】ほのぼのな日常…？

—ここは天界

「これで終わった」

とある部屋で、アルテミスが椅子の背凭れに倒れた

そしてアルテミスの目の前にある机の上には複数の山積みになった書類

何故アルテミスが俗に言う書類仕事をしていた理由は、先日天界で起きたとある出来事が原因なのだが…

「結局は私達がいけないんだけどさ…流石に通信機器とかの破壊だけは止めて欲しかったな…お蔭で何人かの転生者リストが紛失しちゃったし…」

アルトミスが愚痴っていると、扉をノックして1人の男性がアルテミスの部屋に入ってきた

「書類は無事終わったようだな」

「そっちはどうなのよ？ ハデス」

男性…ハデスはアルテミスの言葉に突然真剣な雰囲気を出す
アルテミスはハデスの雰囲気を感じとり、真面目な顔になる

「先日の騒動によって、何人かの転生者リストが無くなったのは既に把握しているな？」

「ええ」

「そのリストの中に数人、冥界牢から脱獄した転生者が居るのが、先程ゼウスから報告が来た」

ハデスの報告にアルテミスは驚愕の表情になる

「…だが、ケルベロスの報告では誰も脱獄して居ないんだそうだ」

「何その矛盾」

「それで私個人が各所に設置していた隠しカメラを調べたんだが…
「ちょっと待てや!？」ん？ どうした？」

「何で隠しカメラが天界に設置されてるのよ!？ ちゃんと他の神々から許可は…って、絶対取ってないわね…」

アルテミスの言葉にハデスは「何を当たり前な事を…」と言いたげな顔をする

「…んで、その隠しカメラには何か映ってたの？」

アルテミスが訊くと、ハデスは無言で懷から1枚の写真を取り出し、アルテミスに渡す

写真を受け取ったアルテミスは写真を見る
すると…

「…なんで彼が映ってるのよ!？」

写真に映っていたのは1人の青年

そして彼が手にしていたのは…

「コレってまさか!？」

「そう……本来は冥界の最下層の部屋に封印されていて、一度は神器となり、そして混沌の闇に堕ちた災厄の宝具だ」

「…だけど、この宝具は本来〈反英雄〉と呼ばれる存在で、それがいつの時代で何処の世界かすら分からない平行世界の遺産として遺されていたのを冥界に封印した……それを何故？」

2人が悩んでいた時、部屋の1人の男性が入ってきた

「アルテミス様、霧夜少年が複数の転生者にやられて重症。更に何故か奴等はこの堕神器を持っていた」

男性…悠は懷から出した物を床に投げる

床に刺さったのは、刃の部分に黒くなった血の付着したナイフ
そのナイフを見たアルテミスは目を見開くが、ハデスは何故か不思議そうな顔をする

「悠、これが何かに刺さったりしなかったかい？」

「…霧夜少年の左目に」

悠の報告を聴いたアルテミスは遂にその場で崩れるように気を失った

「（…これは実に厄介な事になった……よし、何とかするか）悠、すまないが今すぐ霧夜君の世界にとある人物を……今の彼は少々危険だからな。とりあえず様子見の為に」

「了解した。で、誰を？　今あいつの世界には〈反逆の神〉が居るが…」

「それは好都合。では言うぞ、その人物の名は…」

――場所が変わり、雪蓮の館の中庭

そこでは、2人の人物が石段に座っていた

片方は昨日霧夜救出に協力した赤羽紅那岐^{あかばね　くなぎ}

もう1人は髪が紫色で、右目が群青色、左目が茜色、服装は黒のパーカーに黒の学ランを着た少女

「んで、体調はどうだ？」

紅那岐が少女に訊く

少女は自身の髪を見ながら何故か溜め息をつく

その時…

「おわあああああ！？」

空から1人の少年が少女の真上からいきなり落ちてきていた

少女は立ち上がると少年を俗に言うお姫様抱っこで助ける

「あつ、有り難うござ「なんだ神威じゃねえか」なんで紅那岐が居るんだ!？」

少年…神威が驚く中、少女は神威を立たせるように降ろす

「えっと、有り難うござ「久し振りだな、神威」えっ、誰ですか？」

神威の言葉に少女が「やっぱな…」と呟き、紅那岐が笑いながら神威に言う

「こいつは霧夜だよ」

「…えっ？」

神威が少女を見ると「そういうこった」と少女…霧夜が苦笑しながら答えるのであった…

「確か俺が霧夜さんと会ったのは数ヶ月前の筈なんですが…紅那岐の時同様、時間差なんですね」

「俺は神威が小さいままだったもんだから、ついチビだなくと思ったしまった。すまん」

「い、いえ…／＼／＼」

霧夜が微笑みながら言うと、神威の頬が若干だが何故か赤くなったそんな神威を見て霧夜は思わず首を傾げる
紅那岐は何を思ったか、何度もウンウンと頷いていた

暫くして、紅那岐は雪蓮と一緒に街へ向かい、中庭には霧夜と神威は軽く拳を構えながら対峙していた

「何となく拳と拳でつてのもいいと思わないか？ 神威」

「まあ、そうですね」

そして霧夜と神威は拳同士で模擬戦（？）を始めた：

「火竜の「ぶるあああああああああ！！」バルバトス！
？」

神威の魔法を止めた霧夜はそのまま神威に近づき左手による手刀を神威の横腹に入れるが、神威は霧夜の左手首を持って回避して霧夜の頭部に右足で踵落としを決めようとする

しかし神威の踵落としは霧夜の右手での裏拳で止められ、神威は一度霧夜から距離をとった

「やっぱ、兄弟子は強いのが基本なんかね？」

「知りませんよッ！」

神威が一気に霧夜の懷へ突っ込んでくるが、霧夜は神威の頭に右手を置きそのままジャンプして回避、そして回避ついでに神威の背中に空中踵落としを食らわす

神威が咳き込みながら霧夜を見て言う

「思ってた以上に痛かったんですけど…」

「んなもん、俺の師匠達に比べたらORTと蟻の差だぞ？」

「比べる対象が可笑しくないですか!？」

「可笑しくない」

神威は溜め息をつきながら構え直す

しかし…

「なあ神威。さっきからそこで飲んだくれてるオッサンなんかならんか？」

「…霧夜さん。飲んだくれてるオッサンなんて何処にも居ませんよ？」

「…えっ？」

「えっ？」

…2人の間に突然気まずい沈黙が起きる
そんな沈黙の中、神威は恐る恐る霧夜に訊く

「霧夜さん……冗談ですよ？」

「寧ろ冗談だったらどれだけ楽な事か…orz」

霧夜の言葉を聞いた神威は色んな意味で模擬戦を続ける気分にならず、構えを解くのだった…

「おっ、オッサンが神威に絡み酒」

「ちよっ!?!」

――霧夜が神威と模擬戦をしてる頃、街に来ていた紅那岐と雪蓮はある鍛冶場に居た
ちなみに現在剣を打っているのは紅那岐で、雪蓮はそれを興味深く見ていて、その2人の様子を遠くから2人の女性…祭と冥琳が見ていた

「策殿も面白いのお。まさか、いきなり遠坂の知り合いと名乗った青年に遠坂以上に興味を持つとは…」

祭は隣に居る冥琳をチラッと横目で見る

冥琳は祭の言葉に溜め息をつきながら答える

「自分から御遣いの血をどうか言ってたのに、当の本人がこれじゃ…」

「まあまあ、策殿もお主も1人の女性。あの青年に一目惚れしてもしゃあない」

「なっ!?!?／／／」

頬を赤く染めながら驚いている冥琳を見ながら祭は内心思う

(…まあ、儂も策殿達の事を笑ってられる立場ではないのじゃがな…遠坂がいきなり髪や瞳等が変わったせいで、まさかの儂が遠坂に一目惚れするとはの…)

そして次の日、神威は霧夜のポーチに入っていた世界移動用の剣（何故かKHのキーブレード）で霧夜が帰し、紅那岐は幾つか作った剣を霧夜に預けて転移しようとした時、雪蓮が突然紅那岐にキスすると言うビックリが起き、啞然としていた紅那岐はそのまま転移したのであった…

―オマケ―

紅那岐達が帰って行った日の夜、雪蓮は部屋に冥琳を呼んでいた

「雪蓮、私に何の用だ？」

「悪いけど、私はいつか紅那岐と一緒に行くわ♪」

「!？ ……そうか」

「だから……冥琳も一緒に行きましょ？」

「…なに？」

「冥琳も紅那岐の事一目惚れしたんでしょ？ 祭が教えてくれたわ」

「そ、そう…（黄蓋殿…明日は覚えておいて下さいね…）」

「だから、ね♪」

雪蓮の言葉に冥琳はただ溜め息を（嬉しそうに）つくのだった…

【第貳拾玖話】ほのぼのな日常…？（後書き）

〔後書き座談室〕

響介「霧夜に一体何が…」

亮一「そして勝手にフラグ建て！」

響介「十六夜 白爛様、秋代様、レティウス様、感想有り難うございました」

セレナ「次回は黎音さんとのコラボを予定♪」

亮一「んじゃ、次回m」

セレナ「次回もよろしく♪」

亮一「姐^{あね}さん、それは酷いよ」

セレナ「酷くない酷くない♪」

響介（お前らはなにしたいんだ…）

【第参拾話】 2つの争い（前編）（前書き）

今回は黎音さんとのコラボです

天使「更に言えば前後編となっています」

それではどうぞ

【第参拾話】2つの争い（前編）

―とあるマンションの一室

そこには銀髪の女性の目の前で土下座をしている男性が居た

「…で、神が私に何の用だ？」

女性が目の前で土下座している男性を睨みながら言うと、男性は顔だけ上げ、女性に「ある世界に居る人物の為に力を御貸し下さい」と言った

「何故私が誰かも知れん奴の為に協力しなければならないのだ」

女性は男性に対し正論を言う

「確かにその通りです。 ですが、このままでは幾つかの世界を巻き込む事態になってしまうのです」

男性の言葉に女性は「なに？」と訊く

「以前貴方が天界に被害をもたらした原因は本来頼む側なのに対し、命令した事等の非常識な対応をした我々がいけなかった事は重々承知しています。そんな我々ですが、お願いします！貴方の力を我々に御貸し下さい！」

男性が再び頭を下げる

それを見た女性は「とりあえず事情を聴かせてもらえう」と男性に言う

そして男性は頭を上げ、女性に何故力を貸して欲しいのか訳を話し始めた：

「ここは雪蓮と祭が霧夜を見つけた街外れから少し離れた場所にある荒野に、霧夜は居たこんな荒野に理由は先日紅那岐が打った剣の内の一振りを試し切りにきたのだ

「えっと……確かコイツの名前は〈勝利すべき白銀の一振り（カリバ）〉だっけか？」

霧夜は試し切りする為に持っている刀：〈勝利すべき白銀の一振り〉を鞘から抜く
すると、鞘から抜いたのと同時に透き通った銀一色な〈勝利すべき白銀の一振り〉の刀身が姿を見せた

「…綺麗」

霧夜は思わず〈勝利すべき白銀の一振り〉の刀身に目を奪われたが、突然左目が痛み始める

「んッ!？」

霧夜は左手で痛みの増していく左目を強く押さえ、その際に〈勝利すべき白銀の一振り〉を地面に落としてしまう

——あなたはだれ?——

「あん、たこそ、誰だ、よッ!!」

突然聞こえてきた声に霧夜は痛みを我慢しながら訊く

——わたしは——

「やっぱ、あんたの事、なんて、知りたくねえ、つてのッ!!」

その時、霧夜は左手の指と指の隙間からあるものを見た（・・・）直後、突如意識が闇へと落ちた。そして、霧夜の姿はいつの間にか居なくなっていて、霧夜の居た場所には1人の少女が立っていた

「……」

少女は足元に落ちていた〈勝利すべき白銀の一振り〉を拾う
すると透き通った銀一色の刀身は一瞬にして赤い線が峰に入った漆黒の闇のような刀身に変わる

「……」

少女は黒くなった刀身を覗きこむように眺める
その時…

「神から説明を受けまさかと疑っていたが…」

少女がゆっくりと振り返ると、そこには銀髪の女性が立っていた…

| | | | |

霧夜が目覚めますと、霧夜は何故か一面が真っ黒な空間に居た

「なんだよここは……お、声と体が元に戻ってる」

『ココハアナタノココロノヤミ』

霧夜は声のした方向に振り向く
するとそこには…

「女声の黒いペルセインだと……！？」

『ペルセイン？』

全身黒くなり、赤い長髪を靡かせていた異形…ペルセイン・リヒカ
イトが居た

「（なんか、髪があったり体から触手っぽいのが消えてて……まるで、人に近くなったみたいに見える…）てか、なんでペルセインが？」

『コノカラダトワタシ、キョウメイシタ』

ペルセインの言葉に霧夜は疑問を得た

（共鳴？ ペルセインと何が共鳴したんだ…？）

―霧夜がペルセイオンと会話(?)をしていた頃
銀髪の女性と少女は対峙していた

「…だれ？」

「私はゼフィリス・エーデルフェルト。お前は自分が一体何なのか分かってるか？」

銀髪の女性：ゼフィリスの質問に少女は頷く

「…〈この世全ての悪〉^{アンリマユ}。…それが、わたし」

「では、私がやろうとしている事は分かるか？」

ゼフィリスの質問に少女：この世全ての悪は無言で黒い〈勝利すべき白銀の一振り〉を構える

「その刀は……成程」

黒い〈勝利すべき白銀の一振り〉を興味深げに見たゼフィリスは自身の能力の1つ〈空想具現化^{マーブルファンタズム}〉を使い、黄金に輝く剣を創りだす

「さあ来い、この世全ての悪」

「……」

そして次の瞬間、ゼフィリスとこの世全ての悪による戦いが始まった…

「——んで、俺の心の闇とやらに俺は居るんだ？」

『ワタシ、ノゾンダ』

霧夜が「何を？」と訊こうした時、ペルセインはいつの間にか持っていた刀の刃先を霧夜に向ける

『ショウブ』

「勝負、か……いいぜ、俺はバトルマニアじゃねえと個人的には思ってるが、ちよつとやってみたかったんだよ…」

霧夜はペルセインに語り掛けるような口調で拳に魔力を纏わせた状態で構える

「…ペルセイン（自分）と戦うって事がよ！」

そして自分対自分の……ペルセイン刀対拳けんけんとの戦いが幕を開けた…

【第参拾話】 2つの争い（前編）（後書き）

後編は後程投稿しますので、後書き座談室もそちらにて b y畏無

【第参拾壹話】 2つの争い（後編）（前書き）

黎音さんとのコラボ後編です！

アルテミス「（ガクガクブルブル）」

天使「アルテミス様？」

セレナ「それではスタート♪」

【第参拾壹話】 2つの争い（後編）

―とある荒野

そこでは、2人の人物が戦いを繰り広げていた

1人は銀髪で女性のような外見をした男性：ゼフィリス・エーデル
フェルト

もう1人は服装が黒一色と言っても過言でない少女：この世全ての悪^{アンリマユ}

ゼフィリスは黄金に輝く剣を、この世全ての悪は闇を纏わせたような漆黒の刀で何度も激突する

その際に大地が衝撃で抉れたりするが、2人の戦いには全く支障をもたらず気配は無い

「（このままでは埒があかないな…）ブラウニング・スターマイン
！」

ゼフィリスは指先から5つの魔力レーザーをこの世全ての悪に向けて放つ

「……」

この世全ての悪は3つを躲した後、残りの2つを刀で同時に斬る
2つのレーザーを斬った直後、どこからともなく現れた鎖がこの世
全ての悪の左腕を縛る

この世全ての悪は刀で鎖を斬ろうとするが、鎖は全く斬れる様子が
無い

「…しんそのくさり」

「ほお、よく知っているな」

この世全ての悪は刀をいきよく振るう……自分の左腕に向けて左腕の肘から下が鎖で縛られる中、この世全ての悪は後ろへ飛びながら、いつの間にか元に戻っていた（……………）左手に一本のナイフが現れる

ゼフィリスはこの世全ての悪の行動に少々用心しながらも、剣を握り直した…

場所は変わり真っ黒い空間

そこでは、学ランを着た女性…霧夜が一体の真っ黒い異形…ペルセイン・リヒカイトと戦っていた

「食らえ！　　^{サギタ・マギカ}〈魔法の射手〉！」

霧夜がでペルセインに向けて〈魔法の射手〉と呼ばれる魔法を左手で放った直後、そのまま一瞬でペルセインに近づき魔力の纏われている右腕で殴る

しかし、殴られたペルセインは何事もなかったように霧夜を刀で斬る

「ッ！？」

『タノシイ？』

「知るか。お前さんはどうなんだよ？」

『タノシイ♪』

「そうかよ…」

『フタリトモ、ツヨイ♪』

霧夜は両腕に魔力を纏わせながらペルセイネに訊く

「2人共？　　どういう事だよ？」

『♪』

「答えろよっとッ!？」

霧夜は突然飛んできた斬撃を慌てて躲すと、ペルセイネを睨む
すると、完全に楽しんでいるような雰囲気醸し出していたペルセ
インが首を傾げてきた

（恐過ぎだろそれ!!?）

霧夜は溜め息をつくと魔力を左手に集中させる

「色々疑問が残ってるが、戦闘再開といこうか！」

『タノシイネ♪』

| | | | |

ゼフィリスが再び放ったブラウニング・スターマインをこの世全ての悪は躲しながらゼフィリスへ着実に近づく

そしてゼフィリスとの距離がある程度近くなった直後、出鱈目な数の斬撃がゼフィリスへと放たれた

ゼフィリスは全ての斬撃を紙一重で躲し、この世全ての悪へ斬りかかる

しかしこの世全ての悪は左手に持っているナイスで剣を止めようとする

ゼフィリスは剣が止められる事を想定していたかのように右足でこの世全ての悪を蹴り飛ばす

この世全ての悪を蹴り飛ばしたゼフィリスは剣を見ると、剣は何故かある程度の長さから先が無くなっていて、その先はすぐ近くの地面に落ちていた

「まさか…」

ゼフィリスはある仮定を建てると先程蹴り飛ばしたこの世全ての悪を見る

この世全ての悪は多少外見に傷を負っていたが「まだまだ余裕」と言いたげな雰囲気を出していた

（思ってたより少々厄介だな…）

ゼフィリスは斬られた剣を左手に持ち変えると右手に同じ剣をもう一本創りだす

「さて、第二幕といこう」

「……」

ゼフィリスとこの世全ての悪は同時に動き出す
ゼフィリスは斬られた剣をこの世全ての悪へ投げ：

フロークン・ファンタズム
「壊れた幻想」

ゼフィリスが呟いた直後、斬られた剣は爆発する
ゼフィリスは爆発によって生まれた爆煙を利用してこの世全ての悪に近づこうとしたが、この世全ての悪がゼフィリスは少々慌てながらナイフを躲し、仮定していた事を推測する

（どうやら、複数の能力を持った魔眼を得ている可能性があるな：
：先程私の剣を斬ったのは恐らく直死。そしてナイフを私へ精確に投げたのは爆発による爆煙での目眩ましが通用しない能力が原因だろう：）

この世全ての悪の能力の一部を推測した後、ゼフィリスは：

（それなら、デカいのを一撃叩き込めばいい）

そう思うと左手を頭上に掲げ、ゼフィリスの上空に出来た本物ではない：つまり、偽りである小さい月が創り出される

「プルート・ディ・シュヴェスタア」

そして偽りの月はこの世全ての悪へと落ちていく
しかしこの世全ての悪は偽りの月に対し居合いの構えをとる

（まさか、斬るつもりなのか！？）

ゼフィリスが内心で驚く中、この世全ての悪が呟く

「――悪を纏いし（アンリマユ）…」

この世全ての悪の呟きと同時にどこからともなく漆黒の魔力が集まりだし、構えた刀に纏われていく
そしてこの世全ての悪は…

「――勝利の一振り（カリバ）」

刀に纏われてた漆黒の魔力を斬撃として居合いの構えから放った
そして放たれた斬撃は落ちてくる偽りの月へと向かっていき……一瞬の閃光と静寂、その直後に起きた爆音と衝撃が2人の居る荒野を激しく揺らし、辺り一体は爆煙に包まれた…

霧夜は左手に纏わせた魔力を突然爆発した

『シッパイシタ？』

ペルセインは霧夜が魔法の発動に失敗したと思ったがその直後、爆発した事で生まれた爆煙から霧夜が目の前まで突っ込んで来ていて、そのままペルセインは霧夜に殴られた

『！？』

ペルセインは殴られた衝撃で後ろへと吹き飛ばされる

『イマノ、ナニ？』

ペルセインは最初の方で殴られた威力より急激に威力の増した事に

驚きながら霧夜の見る

すると霧夜の服装が変わっていたのに気づく

霧夜の服装は学ランではなく黒いTシャツに黒のジーンズと言う服装で、両腕には肘から刃の出ている赤い籠手が、両足には赤いローラーブーツがあった

『ソレ、ナニ?』

「…〈紅煉壞那^{ぐれんかいな}〉。俺のアーティファクトだ」

『アーティ……ファクト』

ペルセイン不思議そうに呟く中、霧夜は身に付けている籠手をチラっと見る

籠手とローラーブーツ…紅煉壞那はノーヴェと仮契約^{キス}をした際に得た霧夜の魔法具であり、先程の魔力を爆発させた事で起きた爆煙を利用して発動したのであった

（ノーヴェ、あん時は色々アレで悪かった……それと有り難うな…）

霧夜は複雑な想いと一緒にノーヴェへ感謝した後、ペルセインを見ながら拳を構え直す

しかしペルセインは霧夜を見ながら刀を消す

『ショウブ、オワリ』

「何…?」

霧夜は構えた状態でペルセインに問うと、ペルセインの体が突然ブレる

『ワタシ、マケ』

「…はっ？」

『スツキリ♪』

ペルセインの楽しそうな口調に霧夜は思わず溜め息をつく

『マタネ♪』

「ああまたな……ってちょっと待て!!?」

霧夜はペルセイんに問おうとすぎ、一瞬で意識が落ちるのだった…

次に霧夜が目を覚ますと、いきなり目の前に見覚えのある人の顔を
見た

「誰かと思えば、いつぞやの少年だったのか。成長するのが速いな」

「貴方は……成程、2人ってのはそういう事かよ…」

霧夜は以前神が霧夜を鍛える為に神が寄越した敵であり、バイクの乗り方を教えてくれた人物がペルセイアの言っていた2人共とは自分と彼の事だと分かり、起き上がろうとする
しかし…

（体が動かねえ…）

何故か全く体が動かないので起き上がる事が出来なかった

霧夜は男性を見る

男性は立ちながらいつの間にかキセルを吸っていた
すると男性はキセルを口から離し、霧夜を見た

「ところで少年。体に異常はないか？」

「体は何故か動かないって事だけ…」

——おはよう♪——

「…だったら良かったと思ってます」

男性が「何？」と訊いてきたので霧夜は頭に響いてくる少女の声や、自分の心の闇とやらでの事を話した
そして話し終えた霧夜に男性が言った

「あくまで推測だが、その少女の声は恐らく私と戦っていたこの世全ての悪が、少年と奇跡的に融合した為の副産物だと思われる」

「この世全ての悪?! この声が!?!」

霧夜は自身と融合し、心の闇とやらで戦った黒いペルセインを思い出す

「（んじゃ、アレも…）凄い事になったな、俺…」

——すごいのか？——

霧夜は頭に響いてくる少女の声…この世全ての悪に対し溜め息をつく

「少しの間だが、少年の身を監視させてもらう。構わないな？」

男性の言葉に霧夜は「よろしくお願いします」と素直に頭を下げるのだった…

—オマケ—

「えっと、取り敢えず自己紹介をします。俺は遠坂霧夜です」

「（遠坂？ まさか、あの爺の…いや、まさかな）私はゼフィリス・エーデルフェルト。取り敢えずよろしく頼む」

そして数日後、監視されながらも修行（？）をしていたゼフィリスは霧夜に別れを告げ、自分の世界へと帰っていった…

【第参拾巻話】 2つの争い（後編）（後書き）

〔後書き座談室〕

亮一「霧夜がパワーアップ（？）したな！」

響介「知らん……では謝辞を。時空の旅人様、黎音様、レティウス様、感想有り難うございました」

セレナ「そう言えば、畏無さんが例の〈なのは〉の主人公の設定がやっと決まったって本当？」

誰だ！

そんなデマ流したのは！？

——わたし♪——

マジスカ：

響介「確か…」

亮一「この世全ての悪！？　なんで俺等にも聞こえるんだ！？」

後書き座談室に常識は無い

響介「効かないとか以前に無いのかよ…」

——ないのかよ♪——

セレナ「凄い楽しんでるわね……と言うか、デマ流したのって彼女？」

——でまゝ？——

そうだ、デマ

——さくしゃうそつき——

セレナ「へえゝ…」

> (;) <

亮一「俺等マジ空気……あれ、響介？」

響介「えっと、畏無から緊急発表(?) だとさ」

緊急発表……ああ、思い出した

響介「忘れるなよ…」

えっとですね

今回霧夜と融合したへこの世全ての悪の名前を募集します！

亮一「なにそれ？」

響介「いや、そのまんまだろ……だから天然馬鹿なんだよ、お前は」

亮一「(; 𐤅)」

それと期限は12／20までとさせていただきます

セレナ「その間、畏無さんはどうするの？」

ちよつと色々

響介「…では、取り敢えず次回もよろしくお願いします」

——またね♪——

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3851v/>

異形の魂を宿す者

2011年12月2日15時54分発行